187
157

古今和歌集評釋

第五

雜歌上下
雜體
大歌所御歌
附
作家列傳

金子元臣著

古今和歌集評釋 第五

東京 明治書院

古今和歌集卷第十七

雜歌上

題しらず　よみ人しらず

わがうへに露ぞおくなるあまの川とわたる舟の櫂のしづくか

（釋）雜歌　ザウノウタ、又ハクサ〴〵ノウタと訓む。序文に、「春夏秋冬にも入らぬ、くさ〴〵の歌を選ばせ給ひ」と見えて、四季、戀、賀、別離、羇旅の部に入れ難きを收めたり。

○題しらず　伊勢物語には、「昔、男、京をいかゞ思ひけむ、ひむがし山に住まむと思ひ入りて云々」かくて、物いたく病みて、死に入りければ、おもてに、水洒ぎなどして、息出でて」と詞書ありて、この歌を擧げたり。○とわたる　門渡るなり。門は、こゝにては、天の川の川門をいふ。川門は、川岸の迫りて、水瀬の、一つに流るゝ處、迫門（セト）、水門（ミナト）の門、またこの意なり。○しづくか　かは疑辭なり。

一首の意は、自分の體のうへに、思ひがけず、露がサ置いたワイ、これは、あの空の天の川の渡しを渡る舟の櫂の雫か知らぬワイとなり。

明治 21 9 内交

金子元臣著

古今和歌集評釋 第五

東京 明治書院

古今和歌集卷第十七

雜歌上

題しらず　よみ人しらず

わかへに露ぞおくなるあまの川とわたる舟の櫂のしづくか

（雜歌）ザウカウタ、又ハクサ〳〵ノウタと訓む。序文に、「春夏秋冬にも入らぬ、くさ〳〵の歌を選ばせ給ひ」と見えて、四季、戀、賀、別離、羈旅の部に入れ難きを收めたり。

○題しらず　伊勢物語には、「昔、男、京をいかゞ思ひけむ、ひむがし山に住まむと思ひ入りて云々」かくて、物いたく病みて、死に入りければ、おもてに、水洒ぎなどして、息出でて」と詞書あり。で、この歌を擧げたり。○とわたる　門渡るなり。門は、こゝにては、天の川の川門をいふ。川門は、川岸の迫りて、水瀬の、一つに流るゝ處、迫門（セト）、水門（ミナト）の門、またこの意なり。○しづくか　かは疑辭なり。

一首の意は、自分の體のうへに、思ひがけず、露がサ溢いたワイ、これは、あの空の天の川の渡しを渡る舟の櫂の雫か知らぬワイとなり。

明治 41 1 9 内交

（評）契沖いふこの歌のつゞきは、皆、歡ある歌のたぐひなるを、その始に出せるをもて思へば、七月七日の夕べ、思ひがけず、内宴に召されて、祿など賜はりし人の、御惠のかゝれるを、かく寄せたるにやといひ、景樹は、この歌の調、いとはかなげなれば、歡喜の情もて詠めるものならじ、勢語に、面に水洒ぎたるとある、いと似つかはしく聞ゆ、さる傳などありて、それを飾りて作れるも計り難しといへり。熟ら思ふに、この歌、ア列の開口音多くして、聲調、いと花やかなれば、決して、景樹のいふが如くならず。勢語の傳說、亦、もとより信ずべからず。さりとて、必ず、契沖の說の如くならむも覺束なし。只、七夕の夜、さる故ありて、露に立ち濡れたる人の詠めりとせむぞおだしかるべき。元來、二星を主として詠じたるものならねば、七夕の部にも收め難く、さりとて、秋の露の部にもふさはしからねば、雜の初に置けるならし。わがうへにといへるは、天河の水の洒ぎかゝるに、恰當の措辭なり。袖になどいひては、餘に、區域を狹むる恐あるべし。落想奇拔、體格、また雄健にして、百錬の鐵の如し。萬葉集十、

このゆふべふりくる雨は彦星のはやこぐ舟の櫂のしづくか

は、この同想同型なり。但、修辭に於ては、數段の進歩を認む。

（七九〇）

○

思ふどちまとゐせる夜は唐錦たつまくをしき物にぞありける

（釋）まとゐ　圍繞の義。○唐錦　漢土より舶載せる錦なり。蜀錦などをいへるならむ。たつまくを

しきといはむ序に用ゐたり。錦は、貴重なる織物なれば、切斷することの惜まるゝものなるが故に、裁たまく惜しきに、立たまく惜しきをかけたるなり。○たつまく　まくはむの延言。

一首の意は、かう、心の合うたる友達同志打寄つて、語り合うて居る夜は、唐錦の裁つのが惜しいやうに、座を立つて去なうとすることが、惜しいものでサあつたワイとなり。

（評）平凡の想なれども、その眞なるを失はじ。わづかに、唐錦たつまくをしきの剪裁によりて、一首、光彩を生ず。

○

うれしきを何につゝまむから衣袂ゆたかにたてといはましを

（釋）○袂ゆたかに　ゆたかには、廣く大なる意。

一首の意は、このやうなる嬉しい事を、何に包まうぞ、ちひさいこの袂には、なか〳〵包まるゝ事ではない、かうと知つたら、裝束の袂を、もつと寬に裁つてくれいといはうであつたものをサとなり。

（評）無形の感情を、有形の事物に取做して、袂に包まむといふ、何たる詩的ぞ。況や、袂ゆたかにたての痴呆、詩味をたすけて、餘あり。けだし、躍るばかりの嬉しき事あるを包みかねるよりいへるにて、かゝるを、いかゞ包まむとなり。その包むといふより、袂を思ひ寄せたり。景樹が、昔は、袖の尺、いと長ければ、何ぐれに用ゐしなり、今の不用の類にあらず、故に包むといへば、

（七九一）

袖の事となれるなりといへる、よし。　又、初句を、うれしさをと、體言にいふべき由いへるは拘れり。本文のまゝにて、事もなし。

○

限なき君がためにとをる花はときしもわかぬ物にぞありける

ある人のいはく、この歌は、さきのおほいまうちの君のなり。

（釋）伊勢物語に、「昔おほきおほいまうち君と聞ゆるおはしけり。仕うまつる男、長月ばかりに、梅の作枝に、雉をつけて奉るとて」と、詞書ありて、この歌を奉げたり。○限なき　壽命の限なきなり。○ときしも　時しもなり。しは強辭、もは歎辭。

一首の意は、御壽命の限ない君に、さし上げませうと思うて折る花は、かやうに、何時といふ時節の分ちも無しに、咲くものでサありましたワイとなり。

（評）御壽命の限もなき故に、花も、時節の限なしに、何時も咲けるなりの餘意あり。反咲の花などを折りて、御門、或は、わが主君などに奉れるなりけむ。勢語の詞書によれば、ときしもに、雉を隱せりといふべけれど、例の作話なれば、以て、これを說くは非ならむ。

六帖には、形見の題に收めて、二句、君が形見にとあり。勢語には、初句、わが賴むとあり。左註は、勢語によりて、後人の書き添へしものならむ。さきのの下に、おほきの三字落ちたり。この集に、「前のおほきおほいまうち君」とあるは、忠仁公藤原良房なるより、これをも、忠仁公の作とするは、左註に泥めるなり。

○

紫のひともとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る

（釋）○武藏野　武藏の國の中央の平原、紫草の產出を以て名あり。紫草のことは、戀三「戀しくば下にを思へ紫の」の條下を看よ。○みながら　皆ながらの略にて、悉皆の意。

一首の意は、色深き紫の一株を、あはれなつかしい物と思ふ故に、その緣にひかされて、限もない廣い武藏野中の草が、皆殘らず、あはれになつかしいとサ思ふワイとなり。

（評）全然諷喩なるべし。さらば、わが愛する妻一人故に、そのゆかりの人は、悉くなつかしく思はるといふ裏面の意あらむ。數多あるべき紫草を、必ず一本といへるも、この意をたしかにせむとてなり。さて、この歌よりして、紫を、「ゆかりの色」といひ慣へり。

めのおとうとをもて侍りける人に、うへきぬのを贈るとて、よみてやりける。

なりひらの朝臣

紫のいろこきときは目もはるに野なる草木ぞわかれざりける

（釋）女のおとうと云々　女は妻、おとうとは、こゝにては妹なり。うへのきぬは袍なり。意は、妻

の妹に連れ添へる男に、袍を贈り遣るとて詠めるとなり。伊勢物語の詞書には、姉の夫を貴人、妹の夫を卑しき者とし、師走の晦日に、妹は、手づから、夫の袍を洗濯したるが、慣れぬ事とて、袍の肩を張り破り、せむ方もなくして泣き居たるを、姉の夫聞きて、あはれに思ひて、位に合へる綠袍を贈りやるとて、この歌を添へたりとあり。○目もはるに　目路遥になり。

一首の意は、紫の花の、色濃く咲く時は、見渡し遥に、野にある草木までが、差別もなくなつかしいワイ、といふが表面の意にて、古歌に「紫の一本故に云々」と詠んであるが、いかにもその通りで、私も、妻一人を思ふ心が深い時は、それにひかされて、そのゆかりの人は、誰でも皆サ、妻同前に、かけ隔なしに、大切に存せられますワイ、といふが裏面の意なり。

(評)されば、失禮をも顧みず、この袍を進呈致し申すといふ餘意あり。思ふに、この袍や、綠色ならしならむ。女の龍深きを、紫の色濃きに譬喩して、上の歌の意を、下に踏みなせり。必ず、紫草生ふる武藏野の實景とせむは、いかゞあらむ。勢語に、その男を位淺き卑しき者のやうにいへるは、例の作話ならむ。

(七九四)

大納言ふぢはらの國經の朝臣、宰相より中納言になりける時に、染めぬうへのきぬのあやをおくるとて、

近院右のおほいまうち君

いろなしと人や見るらむ昔より　ふかき心にそめてしものを

(釋)○大納言ふぢはらの國經云々　藤原國經が、宰相より中納言に昇任せしは、寛平六年五月五日なり。宰相は參議の唐名、染めぬ云々は、袍の料に、白綾を贈るとて、この歌を詠み添へたりとなり。

一首の意は、これは白綾なれば、何も、色がなくて、興のないやうに、貴方はお思ひなさらう、しかし、私は、以前から、貴方に、大層深切なる志を、濃う染めて置いたる、この綾であるものを、不興には思うて下さるなとなり。

(評)國經は、官位を、弟基經に超えられ、後には、甥時平の爲に、その愛妻を奪はれし程の氣の毒なる人なり。作者能有、皇親の尊を以て、よく、この人に、同情を寄せたりといふべし。色の有無に、志の淺深を寄せたる構想、おのづから、語言の技巧に傾かざるを得ず。

いそのかみのなみまつが、宮づかへもせで、石の上といふ所にこもり侍りけるを、にはかに、かうぶり賜はりければ、喜びいひつかはすとて、よみて遣しける。

ふるのいまみち

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里の花も咲きけり

(釋)いそのかみの云々　石上の並松が、奉公もせずして、大和の石上に籠り居けるが、急に、冠位

(七九五)

を賜りけるに就いて、賀詞をいひ遣るとて、詠めりとなり。かうぶり賜りは、叙爵とて、五位に叙せらるるをいふ。三代實錄に、「仁和二年正月五日、授二從七位石上朝臣並松從五位下一」と見えたり。

○やぶし　やぶは藪なり。草深き處をいふ。今、籔をさしていふは轉れるなり。しは、强辭。

一首の意は、日の光は、どのやうなる草深き藪原をもサ、分け隔てなしに御照しなさるゝから、石上の荒れてさびれてしまうたる里にも、流石に、春が來て、花が咲いたワイ、といふが表面の意にて、御上の御惠は、何處までもサ行き渡つて、分け隔てが無いから、世に棄されたる貴方の御身の上にも、名譽の花が咲きましたワイ、といふが裏面の意なり。

(評)單に、表面の意のみを以て論ずれば、なほ、理窟に着する嫌あるべけれど、譬喩の巧は、そを償うて餘あるが如し。渾然として、斧鑿の痕なきは、老手なり。新撰姓氏錄に據れば、布留氏は宿禰姓にて、布留の神主なり。その族人にて、當時造酒正たる作者は、同鄕の好に、並松の昇叙を賀したるなりけむ。

二條の后の、まだ、東宮のみやす所と申しける時に、大原野にまうで給ひける日よめる。　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ

(釋)二條の后の云々　二條の后は、清和天皇の皇后藤原高子なり。大原野は、山城國乙訓郡にして、こゝにもうで給ひとある故は、閑院左大臣藤原冬嗣の、氏神春日の社の、遠地にありて、神拜に

不便なるを憂ひ、この地を相して、春日を勸請あり。文德天皇の仁壽元年より祭儀始り、藤氏の皇后、必ず行啓ありき。二條后の大原野詣は、同后の、東宮の御息所の稱ありし貞觀十一年より、同十八年までの間にあらむ。伊勢物語には、「昔、二條の后の、まだ、春宮の御息所と申しける時、氏神に詣で給ひけるに、近衛司にさむらひける翁、人々の祿給はりける序に、御車より給はりて、詠みて奉りける」と、詞書あり。○大原やをしほの山　をしほの山は、大原野の神の鎭座しましませる小鹽山なり。○神代の事も　古事記に、天照大神の御子邇々藝尊の天降ります條に、「爾天兒屋命云々、幷二五伴緒矣二支加而天降也」と見え、日本紀、古語拾遺にも、天つ神の御孫の、この國に天降り給ひし時、輔佐し奉り給へる神の中にて、天兒屋命ぞ、特に重かりける趣見ゆ。この天兒屋命は、春日の御神にして、即ち藤原氏の祖先なり。

一首の意は、かやうに、御子孫の藤原氏の御息所が、東宮の御臣儀として、御參詣あるなれば、この大原野の小鹽山に、御鎭座あらせらゝる氏の御神も、かの神代に、天照大神より、天孫を輔佐すべき由の勅定承りし昔の御事も、何時はともあれ、今日こそは思し召し出されて、御滿足に思はるゝで御座らうとなり。

(評)大原野やをしほの神もといはで、山もと轉義して、思ひ出づらめと擬人したるを、この巧とす。山ものは、わが神代の事を思ひ出づるに對へたるなり。眞淵は、いと安らかにめでたしと評せり。舊說の、勢語に據りて、山もは、二條后を喩へたりとして、作者と密事ありし早くの事を思ひ出づらむといふ意に釋けるは非なり。勅撰の集に、恐多くも、皇后密通などの隱事を歌へるものを

掲ぐべしやは。勢語なるは、もとより、一場の作話なるべし。

三句、大鏡には、けふよりは、六帖には、けふしこそとあり。又、勢語には、四句、神代の事を、同塗籠本には、二句、をしほの松もとあり。

五節の舞姫を見てよめる　よしみねのむねさだ

あまつ風雲のかよひぢふきとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

（釋）五節の舞姫　五節の舞姫は、陰暦十一月中の丑の日、豐明節會に、臣下に、酒宴を賜はる儀式ありて、その時行はるゝ女樂なり。舞姫五人、公卿國司などより、美しき少女を、花やかに裝束せしめて奉りて舞はしむるを、臣下に見せ給ふなり。後には、大嘗會の時のみに行はる。續日本紀天平十五年五月、橘諸兄公、太上天皇に傳奏し給ふ詔に、天武天皇、禮樂なくしては、世を治むる事缺けたりとて、この舞樂を作らせ給ふとあり。この舞の來由は、政事要略に、「五節舞者、淨御原天皇之所制也、相傳曰、天皇御二吉野一、日暮彈レ琴有レ興、俄雷雨之間、前岫之下、雲氣忽起、疑如二高唐之神女一、髣髴應レ曲而舞、獨入二天嶽一、他人無レ見、舉レ袖五變、故謂二之五節一、其歌曰、乎度綿度茂邑度綿左備須茂可良多萬乎多茂度遍麻岐氏乎度綿備須茂」と見え、三善清行の意見封事にも、「按二舊記一、昔神女之來舞云々」と見えたれば、神女が五變の舞を象るといふが、古き傳說なるべし。宣長曰く、この古傳說は、古事記に、雄略天皇、吉野に行幸して、吉野川の濱に、美麗なる童女にあひ給ひ、御みづから、御琴を彈じて、そをして舞はしめられし事見えたるに據りて作れるものならむと。

一首の意は、空を吹く風よ、あの天女が歸り上らうとする雲の中の通路を、雲を吹き寄せて塞げてくれい、さうして、あの面白い天女の舞姿を、もうすこしの間なりとも、留めて置いて見ようワイとなり。

（評）五節の舞の古傳說によりて、所がら、今の舞姫を、直に、天女と看做し、その舞ひ果てて還り入らむとする名殘を惜みて、雲路を吹き閉ぢよと詠めるは、業平朝臣の、

あかなくにまだきも月の隱くるゝか山のは逃げて入れずもあらなむ

と共に、同巧異曲の妙作なり。殊に、五節の舞姫は、當時の若殿原の、大騷をしたりしものなれば、宗貞も、同じく、その一人なるべく、舞姫の姿に見とれて恍惚たりしさま、思ひ遣られたり。色卽是空、これが、法德四海に遍照せる花山僧正の前身と觀じ來れば、更に、一段の面白味を加ふ。

五節のあしたに、かむざしの玉の落ちたりけるを見て、たがなむと、とぶらひてよめる。　河原の左のおほいまうち君

主やたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

（七九九）

(八〇〇)

(釋)五節のあした云々　五節の舞ありし翌朝、舞姫の簪の玉の落ちたるを見て、これは、誰のならむと、落し主を尋ねて詠めりとなり。○あはれ　可怜の意にて、いとしと思ふをいふ。一首の意は、この簪の玉の落し主がなつかしさに、これの主は誰ぞと、玉に問へども云はぬによつて、それならば、いつそ、夜べの舞姫を、誰彼といふ事なしに、皆々、あゝいとしやと思はうかとなり。

(評)まことは、舞姫に問へども、いづれも知らぬ顔して、我がのといふ者なかりしならむ。乃ち、この玉のうへに轉じて、擬人したるなり。なべてやあはれと思はむの狂痴、この生命なり。

寛平の御時に、うへのさぶらひに侍りけるをのこども、かめを持たせて、ささいの宮の御方に、おほみきのおろしと、きこえに奉りたりけるを、くら人ども、笑ひて、かめを、お前にもていでて、ともかくもいはずなりにければ、使のかへり來て、さなむありつるといひければ、くら人の中におくりける。

としゆきの朝臣

玉だれの小かめやいづらこよろぎの磯の浪わけ沖に出でにけり

(評)寛平の御時に云々　寛平は、宇多帝の御代の年號、うへのさぶらひは殿上の間、ささいの宮は皇后藤原温子なり。おほみきのおろしは大御酒の下しなり。このあたり、誤寫あるべし。顯註には、きこひにとあり。きは、を文字の誤寫にて、大御酒のおろしをこひにとありけるなるべし。さてなむ、事狀も明らかに、歌の趣にも協へる。くら人は女藏人にて、皇后宮の御方に侍へる女官なり。意は、寛平の御時代に、殿上に詰めて居たる衆が、酒瓶を、使に持たせて、后の宮の御方へ、御酒のおさがりを下さりませと申し上げたりけるを、女藏人共、その瓶を、后の御前に持ち出しながら、笑ひこけて、折角の口上を、何ともいはずにしまひしかば、使、立歸り來て、しかくと復命したりければ、その女藏人の中にいひ送りける歌となり。○玉だれの小がめ　眞淵いふ、玉簾の緒と續けたる枕詞なり。されば、小がめは小がめと訓むべしといへり。小がめは小瓶なり。小龜を寄せたりと。顯註には、玉だれとは、小瓶をいふ、瓶の上に塗りたる物の、玉のやうにさがりたればいふ。玉だれのみすとも續くるは、玉すだれとて、玉を貫きても、簾には懸くれば、玉を垂るといふなりとあり。清水光房は、この說に據りて、玉だれのを、枕詞にあらずとして、玉垂の小瓶、玉垂の小簾と訓むべき由をいへり。諸本、已に、コガメとあり、六帖も、本文と同じければ、姑く、顯註の說に從ひ置く。○こよろきの磯　小洶の磯にて、相模國中郡にあり。一首の意は、先稚の小瓶はサ、どれ何處にあるぞと、使の者に問へば、風俗の謠物にある小瓶とは違うて、その小瓶といふ小龜は、小洶の磯の浪を分けて、存外に、沖へ出てしまうたワイ、即ち、后の宮の御前にサとなり。

(評)この歌の趣を案ずるに、瓶など持たせて、大御酒のおろし乞に遣はすは、若殿上人等が、女蔵人に向ひての打解け業と知られたり。されば、后宮の御前に、その小瓶を持ち出でたるは、殿上人等の意外とせし所ならむ。卽ち、風俗の謠物なる、

多萬多亂乃、乎加女乎奈加仁須恵天、阿流之者毛也、佐加奈未幾二、佐加奈止利仁、己由流木乃、伊曾乃和加女加利阿介二。

を捉へ來りて、典據とし、かの小瓶は、主客の中に据ゑられしかども、この小龜は、小淘の磯をさへ離れて、沖遠く出でたりと、秀句をもて洒落れたるなり。玉垂の風俗は、當時、誰も知れる謠物なめれば、この機智頓才は、大喝采を博せしならむも、今日となりては、興味索然たるなき能はず。結句、千秋が、田中道麿の説によりて、けむの誤寫ならむといへるは、あらず。意釋を見て、その非を知るべし。

二三の句、六帖に、こかめはいづらこゆるぎのとあり。

(八〇二)

女の見て笑ひければよめる　　けんげいほうし

かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ

(釋)一首の意は、女中達よ、さやうに、御笑ひなさるな、この通り、形こそ、見る影も無い深山の奥の朽木のやうなれ、しかも、心は、花にせうならば、花にもならうはサとなり。

(評)古木倚二寒巖一、三冬無二暖氣一の消極的禪と異りて、一道の春風、常に、心頭に存するは、この作者、なか〳〵、只の鼠にあらず。朽木なれの隱喩、及び、その緣にて、心は美しくといふべきを、花にと轉義したる對映、意簡に、詞約なり。

方たがへに、人の家にまかりける時に、あるじのきぬを著せたりけるを、あしたに返すとてよめる。　きのとものり

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな

(釋)方たがへ　源氏物語河海抄に、「金櫃經云、天一立二中央一、故號二中神一歟、件方、古來所二違來一也」と見え、この中神、日毎に巡行するが故に、又、一夜巡りの神ともいへり。物へ行きて歸らむとする時、その方、この神塞りの方なれば、又一夜、他家に假寢して歸る、これを方違へといふ。中古、陰陽家のしいでし事なり。○蟬のはの　蟬の羽の如きの意。

一首の意は、昨夜拜借したるこの衣は、時節がら、蟬の羽のやうに薄いけれど、移香が、濃くまあ匂ひましたる事よとなり。

(評)時は、これ夏なるべし。かく、その餘香を賞愛するは、卽ち、かの人柄を稱へて、その親切を感謝する所以なり。濃きと薄きとの對照は、餘に親粘に過ぎて、却つて淺薄なり。

題しらず　　よみ人しらず

おそくいづる月にもあるか山のはのあなたおもても惜むべらなり

(八〇三)

（釋）○あるか　かは歎辭。

一首の意は、待てども〳〵、遲くいづる月でまあある事よ、これを思ふに、此方で、かう待つやうに、あの東の山のあちら面でも、山へ入るのを、人が皆、惜むさうな樣子だワイとなり。

（評）この著想、地平說の行はれし昔時においては、質に、破天荒の沒理想といはざるを得ず。これらの空想は、今日は、既に、學理上立證せられて、事實となりたれば、詩味一半を減するが如し。然れども、猶、月の、人に惜まれて、運行を躊躇する有情の取做し、詩としての價値を失はず。四句のもは、わが、月出を待つことを本としていへる辭なり。注意すべし。

二句、六帖、及び、新撰和歌に、月にもあるかなとあり。又、六帖再出のには、三句以下、山のはのあなたの里もをしむなるべしとあり。本文のに比すれば、大に劣れり。

○

わがこゝろなぐさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て

（釋）○更科やをばすて山　信濃國更科郡にあり、姨捨山と書く。

一首の意は、自分の心が、何となく物悲しくなつて、慰めかねたワイ、この更科の姨捨山の照る月を見てサとなり。

（評）遊子、秋月を、姨捨山に見る、折柄、處がら、その境遇と相俟ちて、この愁思ありしならむ。姨捨の名によりて釋くは非なり。大和物語に、「この山に、姨を捨て置きて歸るとて、甥が詠める」

とて、この歌を擧げたれど、こはもと、雜寶藏經の棄老國緣第四に見えたる事を、わが國の事めかして作り設けたるものと見ゆ。今の集解に、信濃の俗、老人を捨つる事ありし由をいへれど、皆、この誤を襲へるにて、信ずべからず。

おほ方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの　なりひらの朝臣

（釋）伊勢物語には、「昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友達ども集りて、月を見て、それが中にひとり」と、詞書あり。○おほ方は　大概の事ならばの意。○これぞこの　「これやこの」などの類にて、このは、下の老といふ語に跨續す。

一首の意は、月は面白い物であるが、大概の事には、さう、その月も、餘り賞翫すまいワイ、なせなれば、この月をめづることがサ、段々とたび重なると、何時か、光陰が經つて、この人間の老となるものであつたワイとなり。

（評）一年の盈虛、よく〳〵幾何ぞや、月に狂し、月に執して、老の、まさに到らむとするを知らず。その詩的生活、眞に羨むに堪へたり。俄然、二毛の白きに愕きて、月をもめでじといふ。必ず、月は、老に關し、老は、月によつて催さるゝものとしたる沒理想の構想、この作者が擅場なり。結句、老となるものなりけるといふべきをいひさしたるにて、體調勁健の素を成せり。

初句、勢語の眞字本に、大方のとあるを、眞淵は執したれど、わろし。結句、家集には、老とい

ふものとあり。

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる。　紀つらゆき　（八〇六）

かつ見れど疎くもある哉月影のいたらぬ里もあらじと思へば

（釋）○かつ　片一方の意。

一首の意は、あの月を、片心では、見はするけれども、疎くまあ思はるゝ事よ、何故なれば、あの月の光は、此處ばかりに、心あつて照るのではなくて、何處もかも、行き渡らぬ土地もあるまいと思へばサ、といふが表面の意にて、躬恒の來れるを、親切には見れども、かつは疎くも思ふ事よ、何故なれば、そは、月故に來れるなれば、月の照るかぎりは、躬恒の往かぬ處もあるまいと思へばサ、といふが裏面の意なり。

（評）月を、躬恒に擬へての諷喩なり。詞書の「月おもしろしとて」とあるに、心を注ぐべし。躬恒の來れるは、主人は傍にて、月が主なればと、一寸、嫌味をいへるは、素より、親しき間柄の戯なり。夏部に、

時鳥ながなく里のあまたあればなほ疎まれぬ思ふものから

とあるに、構想を同じくして、これは、諷喩の巧を加へたれば、理路に着する憂を免れて、おもしろし。

二句、新撰和歌に、疎ましきかな、四句、新撰和歌には、里の、六帖、及び家集には、里はとあり。

池に、月の見えけるをよめる。

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月影

（釋）一首の意は、月は、二つ無い物で、山の端から出るばかりの物と思うたものを、それにまあ、あれ、山の端では無い、池の水底にも出る月影なることよとなり。

（評）かくては、月は二つあるものの如く見ゆの餘意あり。秋下に、友則が、

一本と思ひし菊を大澤の池の底にもたれが植ゑけむ

と同型の構想にして、尖新なり。

題しらず　よみ人しらず

天の川雲のみをにてはやければひかりとゞめず月ぞながるゝ

（釋）○みを　水脈なり。水筋をいふ。

一首の意は、天の川は、下界の川とは違うて、雲の水脈で、瀬が早い故に、光を、暫くも留めずに、月がサ、早う流れて行くワイとなり。

（評）今少し、光の淀まゝほしきを、殘多きことよの餘意あり。天の川の名に據りて、くだち行く月

（八〇七）

を流るるといひ、さて、雲のみをにてと、混喩を用ゐたり。貫之が土佐日記に、

照る月のながるゝ見れば天の川いづる湊は海にざりける

と詠めるも、これにや胚胎したりけむ。

（八〇八）

○

あかずして月の隱るゝ山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

（釋）○山もと　山麓なり。

一首の意は、まだ見飽かずしてあるうちに、山に支へられて、早くも、月の隱るゝ西の山本では、月の入るこの山のあちら面がサ、戀しうあつたワイとなり。

（評）上なる「遲くいづる月にもあるかな」と、その場合を反對にして、同巧異曲の觀あれども、これは、遙に下れるが如し。蓋し、戀しかりけると道破したるは、露骨に失して、かの「惜むべらなり」と、詩的想像を逞しうしたるに及ばざること遠し。

三句、新撰和歌に、山里はとあり。

惟喬のみこの、狩しける供にまかりて、やどりけるに、歸りて、夜ひと夜、酒のみ、物語をしけるに、十一日の月も隱れなむとしけるをりに、みこ醉ひて、うちへ入りなむとしければ、よみ侍りける。

あかなくにまだきも月の隱るゝか山のはにげて入れずもあらなむ

なりひらの朝臣

（釋）惟喬親王の云々　伊勢物語には、惟喬親王、年毎の花の盛には、山城國水無瀨（ナセ）の別業におはして、常に、右馬頭なる人を、供に率て遊び給ひしが、河内國交野に狩して、渚の院に至り、天の川を經て、再び、水無瀨の宮に還り給ひて、酒宴せられし折の事として、「還りて、宮に入らせ給ひぬ、夜更くるまで、酒のみ、物語して、主人のみこ、ゑひて入り給ひなむとす。十一日の月も隱れなむとすれば、かの馬の頭のよめる」と詞書して、この歌あり。○あかなくに　あかぬになり。

○隱るゝか　かは歎辭。

一首の意は、面白くて、見ても〳〵見足らぬのに、入るべき時刻よりも、一通りならず早うまあ、月の隱るゝ事よ、あの月の隱るゝ山の端が、脇へ逃げ退いて、月を入れずにまああつてほしワイ、といふが表面の意にて、この興宴の愉快の盡きぬのに、早くもまあ、親王の、席を辭して、お奥にお入りなさるゝ事よ、あの親王のお姿をお隱し申す御簾や御帳やが無くなつて、親王をお入れ申さずにまああつてほしワイ、といふが裏面の意なり。

（評）月を、親王に比興したるゝ巧は巧なれど、さばかりの高手ならぬも、猶いふを得べし。只これ、山のはにげての一語ぞ、實に、超凡の大手腕なるべき。高情の極、遂によく、一切の理筌を脫

（八〇九）

離し得て、詩趣の妙諦に達し、こゝに、天外の痴想を現じ來れり。李長吉が、「黑風吹レ山作二平地一」と作り、人麿が、「妹が門見む、靡けこの山」と詠めると共に、豪宕の奇作たり。逃げての擬人、猶綽々として、顧眄の餘裕あるを見る。然るに、論者、往々、この語を以て、雅馴ならずとなす。所謂、駱駝を見て、馬の肉腫を病むものと思へる僻ならむ。十一日の月の、はや、山の端に落ちなむとするまで、夜は更けたるに、酒宴、興なほ酣に、玉山、將に頹れて、親王は、座に堪へ給はざらむとす。この時、この人、この歌あり。情味興會、果して如何。

二句、新撰和歌に、まだきにとあるはわろし。

（八一〇）

田村のみかどの御時に、齋院に侍りけるあきらけいこの

みこを、母あやまちありといひて、齋院を易へられむとし

けるを、その事やみにければ、よめる。

あま敬信

大空をてりゆく月し清ければ雲かくせどもひかりけなくに

（釋）田村のみかどの御時に云々　文德天皇、山城國葛野郡田村に葬め奉る。故に、田村の御門と申す。齋院は、もと、伊勢の齋宮に倣ひて置かれたる、山城の上下加茂の神に奉仕する齋女にて、內親王を以て、これに充つ。慧子（アキラケイコ）は、文德天皇の皇女なり。母は列子、從五位上藤原是雄の女なり。母あやまちありとは、慧子の母列子に、罪過ありてなり。その事やみければは、慧子の、齋

院を廢せらるゝ事のやみたるなり。然れども、その後、また、他の事によりて、慧子の廢せられし事は、文德實錄に見えたり。「天安元年二月、廢二鴨齋內親王慧子一、更立二述子內親王一、遣二右大臣正三位藤原朝臣良相於神社一告二事由一、其事秘者、世無レ知レ之也」とあるこれなり。○けなくに　消えぬになり。

一首の意は、あの廣い空を照つてゆく月がサ、清いによつて、いくら、雲が隱しても、光は消えはせぬにサ、といふが表面の意にて、素より、曇の無い御身は、一旦、人が、いろ〳〵と無き名を立てても、ちきに、明りが立つワイ、といふが裏面の意なり。

（評）所謂晴天白日の譬喩を、月にかへていへるまでなり。但、喜氣、格表に溢るゝ觀あるが如し。

よみ人しらず

いそのかみふるからをのの本がしはもとの心は忘られなくに

（釋）○いそのかみふるからをのの本がしは　もとのといはむ序なり。石上布留のことは、夏歌「石の上ふるき都の時鳥云々」の條に既出。古幹斧は、柄の古き斧にて、本は手元なりとは、寄居歌談に出でたる和田正主の考なり。又契沖は、布留枯小野にて、布留野の冬枯れたる時をいへりといひ、眞淵も、これに從へり。景樹は、古幹なる小野の略といへり、前說は、孫姬式に、舊枯野とあるによりていへるなめれど、牽强にして、語を成さざるはもとより、後說と雖も、猶妥當を缺けるが如し。又、大和の地名とするは、舊註の說なり。本がしはは、景樹が、若生に對へたる名に

て、元木の柏なり。野には、古木、若木立交りて、實に然るものなりといへるぞ宜しかるべき。雅嘉は、柏は、梢の方は散りても、本の方に、葉の殘りてあるものなれば、本柏といひ、本の心を忘れぬといへる譬喩の序に用ゐたりといへり。

一首の意は、石の上ふるからをのの本柏のもととといふやうに、もとからの心は忘られぬにサ、さう思うて下されとなり。

(評)秋上、躬恒の歌、

秋はぎのふる枝に咲ける花見れば本のこゝろはわすれざりけり

といふは、これを本歌として詠めるが如し。景樹曰く、この歌、その頃もてはやして唱へたりしならむ、孫姫式に、難波津の歌と並べていへるにて知らる、その歌ざま、實にめでたければなりといへり。序の意解、なほ心ゆかず覺ゆれば、今は、姑く、是非の評を下さず。

(八一二)

○

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をゝる人ぞくむ

(釋)○野中の清水　舊くは、播磨國印南野にありといひ、十六夜日記にも、同じ趣にいへり。又、一說には、大和國布留野にありといひ、貫之集「石の上布留野の道の草分けて清水汲みには又も歸らむ。寂超法師「昔見しふる野の澤の忘水なに今更に思ひいづらむ。堀川初度百首「いにしへの布留野の道を尋ねきて清水を猶もむすびつる哉」などを證として、布留の社は、崇神帝の時の

鎭坐にて、瑞垣の久しき所なれば、昔より、舊き心にいひなし來れるより、古野といふ意になして、いにしへの野と續けたるかといへり。後說、やゝ勝れるか。但、布留野の社云々は從ふべからず。只、布留の野中に、よき清水ありて、遂に、野中の清水と、固有名詞にいはれたるを、今は、その水のよかりし昔をかけて、いにしへのといへるなり。○ぬるけれど　温けれどなり。水は、冷列なるを以て勝れりとす、温きは下なり。

一首の意は、つめたいよい水と云うので、名の高かつた、昔の野中の清水は、今は、もう生温いけれども、やはり、昔の事を知つて居る人はサ、今でも汲んで飲むワイ、といふが表面の意にて、この節衰へたれども、前方繁昌であつた時の事を忘れぬ人は、やはり訪らうてくるゝワイ、といふが裏面の意なり。

(評)昔よかりし人の詠なるべし。今は、世に侮りすてられたるものの、猶二三、故舊の情を忘れぬ人あるを嬉しみ喜びて、みづから慰藉したる、その衷情憐むべきものあり。況や、暗喩の工を添へたるをや。

○

いにしへのあづの苧環いやしきもよきも盛はありしものなり

(釋)○いにしへのしづの苧環　いにしへのしづは、上代に始りし倭文布をいふ。青と白とを織りませたれば、今いふ縞織に似たり。これを、シヅリともいふは、倭文の義織なり。苧

(八一三)

瑕は、その倭文を織る料の卷子なり。さて、このしづの苧環を、卑しきの枕とするに就きて、眞淵は、倭文に、賤の音あるが故といひ、正義に引ける榎並隆璉の說には、「卷子は、いやが上に卷くものなれば、彌繁といへるを通はせたるならむ」といへり。後說可なるが如し。

一首の意は、身分のよい者ばかりでは無い、我等がやうなる賤しい者でも、一度は、男盛はあつたものであるワイとなり。

（評）老いたりとて、さのみ侮り給ふなの餘意あり。身柄卑き老人の、世を憤りての作なるべし。よきもは、只いひ添へて、調を諧へたるなり。自負の言、次なる歌の「今こそあれわれも昔は」といへると、その趣を同じうす。

結句、六帖に、ありこしものをとあり。

○

今こそあれわれも昔はをとこ山さかゆく時もありこしものを

（釋）○今こそあれ　今こそ、かくてあれの略。○をとこ山　山城國久世郡男山なり。石清水八幡宮の鎭坐まします山、清和天皇の貞觀元年、八幡の神を、宇佐より勸請す。○さかゆく　榮行くなり。

一首の意は、今こそ、このやうに、年も寄つて老い朽ちたれ、自分とても、昔は、男山の神威の榮行くといふやうに、一廉の男と榮え行く、若盛の時節もあつてきたものを、あゝくち惜しいことよとなり。

（評）清和の朝の頃の人の作なるらむ。初句を、字餘りにていひ切りたる語調の强さ、われも昔はと思ひ入りたる自負の氣持、ありこしものをといひさしたる餘情、皆これ、無量の感慨を惹く所以なり。われものもは、人に對へていひ、時ものもは、今衰へたるに當てていへり。四句は、男山は、山上に、社殿あれば、阪行くにかけたるなりといへる說もあれど、俗解なり。

○

世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり

（釋）○津の國の長柄の橋　攝津國長柄郡長柄の里なる長柄川に架けたりし橋なり。元明帝の和銅六年に、國郡の名を、二字に定めて、好名を用ゐしめられし時、津の國を、攝津の國と稱せらる。されど、打解けたる假名物や、歌などには、昔のまゝに、津の國といひならへり。

一首の意は、この世の中に、段々舊くなつて衰へ行くものは、よく〳〵思ひまはして見れば、外には無い、たゞ、あの津國の長橋の橋と、自分とであつたワイとなり。

（評）老人の感懷なり。文德帝の仁壽三年十月、攝津國よりの奏言に、

長柄三國兩河、頃年、橋梁斷絕、人馬不レ通、請、准二堀江川一置二二艘船一、以速二濟渡一、許レ之、

と見えたれば、この歌は、仁壽より以前、長柄の橋梁の、いまだ斷絕せざりし時代の人の作なるべし。猶思ふに、頃年云々とあれば、橋梁の腐朽も、年久しきことにて、當時、物の舊りたる例

には、この橋を、專らいひならへりけらし。されば、われの對比に取出づるに、この橋を以てして、聽者の記憶を喚び起し、彼の事態を借りて、我が感愴を映帶せしむ。蓋し、作者の狡手段なり。長柄に、存在の意を寄せたりとするは、穿鑿に過ぐ。

（八一六）

○

さゝの葉にふりつむ雪のうれを重み本くだちゆくわが盛はも

（釋）○うれ　末なり。○くだち　くだりの古言。○はも　嘆辭。

一首の意は、笹の葉に降りつもる雪が、笹のするの方が重さに、斜に靡いて、本の方のが崩れて、段々に墮ちて行くが、まづ、そのやうに、段々に傾いてゆく、自分の若盛であるはまあとなり。

（評）四十を越したる人などの、老の將に來らむとする述懷ならむ。四句までは序なり。上に、雪のとあれば、くだちゆくも、雪のくだつなり。笹の本のくだつにはあらず。誤解し易ければ、一言しつ。

初二句、一本に、わが宿の竹の白露とあり。結句、六帖に、わが心かなとあるは、更に聞えず。

○

大あらきの森の下草おいぬれば駒もすさめず刈る人もなし

又は、櫻あさのをふの下草おいぬれば

（釋）○大あらきの森　萬葉集十一に、「大荒木の浮田の杜」とあるも、同處か。神名帳に、大和國宇智郡荒木神社あり。そこの森なるべし。能因歌枕には、「山城國にあり、尤もあらはなる森なり」とあり。○すさめず　すさむは進むこと。○左註、櫻あさは、櫻の色したる花のさく麻とも、櫻花の色に似たる麻ともいへり。をふは麻生にて、麻畑なり。

一首の意は、大荒木の森蔭の草も、盛過ぎてからは、馬も喰ひたがらず、又、刈る人も無いワイ、といふが表面の意にて、人も、このやうに、年が寄つてからは、皆厭がつて、寄りつく人もないワイ、といふが裏面の意なり。

（評）大荒木の森をいへるは、作者の住まへるあたりなればならむ。下句の層々反復、詠嘆の味、いよ〳〵永し。草も、馬にすさめられざるに至りては、もはや論外といふべし。傷心の句なり。かくて、諷喩の嘆意は、こゝに活躍す。作者を、六帖に、小町とあれど、更に、かの娘子の風調にあらず。しかも、婦人の口氣にあらず。

櫻あさ、六帖には、櫻麻とあり。

○

數ふればとまらぬ物をとしといひて今年はいたく老いぞしに

（八一七）

ける

（釋）○とし　疾しに、年をよす。

一首の意は、暫時もとまらずに過ぎて行くものを、早いといふ名の年と云うので、數へて見れば、忽ちの間に、今年は、存外に、甚だ、年寄にサなつたワイとなり。

（評）初句は、四句のうへにまはして心得べし。

○

おしてるや難波のみつにやく鹽のからくも我は老いにける哉

又は、大伴のみつの濱べに

（釋）○おしてるや　難波の枕詞。おしてるは、襲ひたてるの約にて、波の高く襲ひ立ちてあるをいふ、難波は、そのかみ、浪の速きところなりし故に、難波にかけたり。○難波のみつ　みつは御津にて、官船の出入する津なれば、貴びていへり。○左註、大伴のは、御津の枕詞なり。古語に、才德勇威のあるを、稜威（イツ）といひ又みづといへり。古事記に「みづ〳〵し久米の子らが」とあるこれなり。往古、大伴氏は、武勇の家柄にて、みづ〳〵しきより、うつりて、御津にかけたるならむ。一首の意は、あの難波の御津でやく鹽は辛いものであるが、そのからくも、卽ちつらくもまあ、自分は、年が寄つてしまうたことよとなり。

（評）三句までは序なり。

三句、六帖に、難波の浦にとあり。又、和歌九品に、荒汐の汐の八百會にとあるはわろし。

○

おいらくのこむと知りせば門さしてなしと答へてあはざらましを

（釋）○おいらく　賀、業平「櫻花ちりかひくもれおいらくの來むといふなる道まがふかに」の條を看よ。

一首の意は、この老といふものが、自分を尋ねて來うといふことを、早く知りもしたならば、門をしめて置いて、留守と云うて、逢はずに居ようであつたものを、さうしたならば、このやうに、年は取るまいにとなり。

（評）老の擬人、既に、一つの趣向なるに、なしと答へて逢はざらましをの痴呆の想は、このをかしき所以にして、覺えず破顏せらるゝなり。業平の「櫻花ちりかひくもれ」の歌よりは、やゝ古き世のものか。さらむには、これを據として、「來むといふなる」と詠めりとすべし。

左註は、もとよりの事にて、いはでもありぬべきなり。すつべし。

○

さかさまに年も行かなむとりもあへず過ぐる齢やともにかへ
ると　（八二〇）

（釋）一首の意は、月日がまあ、逆に、あとへいつてもらひたいワイ、何する間もなく經つて行く齢がサ、その月日と一所に、あとへ戻つて、若がへるかと思へば、試にサとなり。

（評）あとへ、年を取りたしとは、よく、人のいふことなり。しかし、當時には、尖新の語なりけむ。

○

とりとむむる物にしあらねば年月をあはれなうと過しつる哉

（釋）一首の意は、月日のたつのは、取止めらるゝ物でサないから、仕方がなさに、あゝさて、憂いことぞと、歎きながら過したことよとなり。

○

とゞめあへずうべもとしとはいはれけりしかもつれなくすぐる齢か

（釋）○としとは　疾しに、年を寄す。○か　嘆辭。

一首の意は、年のたつのは早くて、止めうと思うても、止むる間もない、道理でまあ、疾しといふ名をつけられたワイ、それは、仕方が無いとしても、そのうへにまあ、年につれて、氣強く過ぎてゆく、自分の齢であることよとなり。

（評）年ゆるには、重ね〳〵、難儀なる目を見る由なり。諸註、しかもの意を解き得たるなし。

○

鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

此歌は、ある人のいはく、大とものくろぬしがなり。

（釋）○鏡山　近江國蒲生郡、古は、野州郡のうちなり。

一首の意は、鏡山といふ山なら、人の影が、よく映るであらうほどに、年を、ひどく久しう經てきたこの身は、老いくちたかどうかと、どれ、たち寄つて見てゆかうワイとなり。

（評）初老の程の人の、鏡の宿あたりを過ぎての作なるべし。山口ながら、年寄の部に入りたれば、鏡山の名を聞きては、面影も變りやしつらむ、いざたち寄りてとざればみたるなり。全くの老人ならむには、老いやしぬると疑はむやうなきをや。前人、皆、箇中の消息をえ曉らで、耆老の人の作としたり。疎漫といふべし。鏡山の名によりたる著想は凡なれど、立ち寄りて見むといへるは詩的なり。

左註に就いて、眞淵は、例の採らねば、論なし。景樹は、黒主は、近江の滋賀郡大友郷の人なれば、立ち寄りて見むとやうに珍しむべからずといひ、又、この歌は、老いて後の意なるに、黒主

（八二一）

の滋賀にありしは、若き程なり、女と戯れたるにて知るべしといひて、黒主説を否認したり。然れども、假令、同國同郡なりとも、未見の地ならむには珍しむべく、況や又、これは、元來、狂痴の想を歌へるものにて、まことに珍しがりて詠めるにはあらざるべし。女と戯れたる云々は、既にいへる如く、四十の聲を聞きたるばかりの初老の人ならむには、常あることなり。されば、景樹の論據、極めて薄弱なり。故に、必ず、黒主のといふ證もなく、又、あらずといふ證もなし。姑く、左註を存するものなり。

（八二二）

業平の朝臣の母のみこ、長岡にすみ侍りける時に、なりひら、宮づかへすとて、時々も、えまかりとはず侍りければ、しはすばかりに、母のみこの許より、とみのこととて、文をもてまうできたり。あけて見れば、詞はなくて、ありける歌。

おいぬればさらぬ別もありといへばいよ〳〵見まくほしき君哉

（釋）業平の朝臣の云々　この詞書、勢語にもありて、異れるところ多けれど、長ければ省きつ。母のみこは、桓武帝の皇女伊登内親王なり。長岡は、山城國乙訓郡鶏冠井にありて、桓武帝の延暦三年遷都の地、古來、この地を、大極殿と稱せり。とみは、頓の字音にて、俗の急用の意。○さらぬ別　さらぬは、え去らぬことにて、遁れ難き別、卽ち、人世に於ける死別をいへるなり。

一首の意は、今は、親子が、都と長岡とに、別々で居るが、そればかりか、このやうに年寄つて、は、世の中に、是非とも遁れぬ別も、またあると云ふことなれば、それが氣になつて、常々逢ひたく思ふ其方に、いよ〳〵、この頃は逢ひたく思はるゝことよとなり。

（評）作者伊登内親王は、夫阿保親王とは、叔母、甥の關係なれども、阿保親王は、父帝の壯時の初孫にして、承和九年五十一歳にて薨ぜられ、内親王は、御姉甘南美内親王が、弘仁八年に、十八歳にてまし〳〵しより推算すれば、承和九年に、四十三歳よりは若くておはせしものなること著し。されば、貞觀三年薨去の御時は、六十歳程と見て誤なかるべく、業平は、時に三十七歳なり。「とみの事とて」とある詞書と、この歌とを併せ思ふに、内親王が薨去の前年の師走、心地煩ひて、こたびはと思し召し給ひし折のことと知られたり。夫親王に後れてより、父帝の、一旦遷都ありし長岡の舊土に寂居すること、二十年に亟んとせり。その愛子は、世過ぎ、身過ぎの京住居、公務に忙殺せられて、僅々一里内外の道ながら、往省する遑だになく、殆ど、生別に等しき觀あり。剩へ、さらぬ別の死に目に近き頽齡の病身なり。況や、今は師走にて、又しも、一箇の老を加へむとするをや。いかんぞ、いよ〳〵見まくほしき感起らざらむ。眞にこれ、心の聲なり。彫琢の語の、遠く及ぶところにあらず。さらぬ別もと、婉曲にいへるに、凄愴の意、殊に活躍す。もは、離居の生別に對へたる辭にて、下のいよ〳〵の語も、その響を受けてこそ落着すなるを、諸註、別のといふも同じやうに解きなしたるは、粗しといふべし。

（八二三）

二句、一本、及び、伊勢物語に、別のとあり。このわろき由は、上にいへるが如し。恐らくは、次なる返歌の詞のまぎれしならむ。

（八二四）

かへし　　なりひらの朝臣

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

（釋）一首の意は、何卒、世の中には、遁れぬ別などいふことの無いやうにしてほしいことよ、親の壽命を、千年もあれかしと歎いて願ふ息子の爲にサとなり。

（評）單に、子の爲といひても聞ゆることを、人のと修飾したるが、親持の子の爲にといはむ程の意ありて、多樣の姿致を生ず。萬葉、「人の祖（オヤ）の立つること立て」、「人の子は祖（オヤ）の名絶たず、大君にまつろふものと」、又、後撰集兼輔、「人の親の心は闇にあらねども」の類、皆これなり。さて、歌は、世の中の人の子にかけていへるさまにて、中に、わが事は含めるなり。眞情眞詩。

四句、伊勢物語に、千代もと祈るとあり。又、眞字本伊勢物語には、齋の字をかきたれば、千代もといはふと訓むなるべし。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　ありはらのむねやな

白雪の八重ふりしけるかへる山かへる〳〵も老いにけるかな

（釋）○かへる山　離別、「かへる山ありとは聞けど云々」の條に出でたり。○かへる〳〵も　かへり〳〵といふべきを、かへる山の語調を承けていひかへたるなり。かへし〳〵といはむに同じ。一首の意は、自分の頭はまあ、雪の、幾重〳〵も降り積つたる北國の鹿蒜（カヘル）山のやうに、眞白になつて、その山の名のかへるがへるも、ひど〳〵年寄つたことよとなり。

（評）山に寄せて、頽老を歎けるなり。山の雪を、白髮頭に喩へ、しかも、八重ふりしけるは、かへる〳〵もにかけ合ひたれば、打任せたる序歌にはあらず。さて、寛平后宮の歌合の歌は、寛平五年の撰なる菅家萬葉に收められたれば、歌合は、寛平の初年に行はれしものなるべく、作者の父業平は、寛平元年より十年前なる元慶四年に、五十六にて卒したれば、假令、業平存命なりとも、寛平歌合の頃には、六十五六の齡なり。その子たる作者棟梁の齡の若からむこと思ひ遣るべし。歌の趣、これに適はず。さりとて、擬人して、山のけしきを詠めるものとも思はれず。前後の部立にもかなはぬことなり。或は題詠か。然れども、古人は、題詠にても、述懷などには、虛構して詠むことはかりき。されば、棟梁の歌にはあらざるべきか。姑く、疑を存す。

四句、顯本に、かへす〳〵もとありて、定家も、異存なき由なれど、かへる山を打返したることは明なれば、いかゞあらむ、新撰萬葉にも、「白雪之八重降敷留還山還々曾（茂の字の誤か）老丹藝留鉋」とあるにて、本文の方正しきを知るべし。

おなじ御時、うへのさぶらひにて、をのこどもに、おほみき

（八二五）

給ひて、おほみあそびありけるついでに、つかうまつれる。　　（八二六）

おいぬとてなどかわが身をせめきけむおいずばけふにあはまし　　としゆき朝臣

（釋）うへのさぶらひは殿上の侍所。おほみあそびは大御遊にて、管絃の御遊なり。○せめきけむ　せめきは迫めきにて、迫めくと活く。めくは、形容の接尾語なり。毛詩に、「兄弟鬩二于牆一、外禦二其侮一」とある、鬩の字を訓ませたり。鬩は、註に「鬩很也」とあり。爭ひもとること、いさかふことなり。責め來けむの意に解けるも一說なり。

一首の意は、ひどく、年が寄つたと云うて、我とわが身を、これまでなぜに責めたげたことであつたらうぞ、よく思うて見れば、年の寄つたは嬉しい事かな、かう年の寄るまで生きて居ずば、めでたい今日に逢はうものか、いや、逢はるゝものでないワイとなり。

（評）老を贊して喜べるは、老を歎ける餘の强語なり。面に笑ひて、心に泣く、同情に堪へたりといふべし。二つのか、上のは疑辭、下のは反動辭なれば、こともなけれど、おいの語の重複したるは、洗煉を缺けりといふべきか。

二句、六帖に、などやとあるは誤れり。家集に、わが身などてかとあるも、意とほらず。

題しらず　　よみ人しらず

ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば

（釋）○ちはやぶる宇治の橋守　ちはやぶるの解は、秋下「千早ぶる神代も聞かず云々」の條にいへり。こゝは、宇治とはいはむ枕詞に用ひたり。冠辭考に、「宇治は、稜威と同音にて通へば、千早ぶる宇治といひ下したり」といひ、萬葉古義に、「宇治は、俗に、いちある人、いちはる、いちのわるきなどいふと同音にて、（意地とかくはあて字）平穩ならず、烈しき意ある言なる故に、ちはやぶる宇治と續けたり」といひ、古說は、物部の八十氏人は逸隼ぶるが故に、千早ぶる氏と續け、さて、宇治にいひかけたりといへり。橋守は、野守、山守、關守などの類にて、宇治に、橋守のあることは、日本紀天武の卷に、「命二兎道守橋者一遣中皇太弟宮舍人運二私粮一事上」と見えたるにて知らるべし。○なれ　汝なり。

一首の意は、宇治の橋守よ、外の人よりは、其方をサ、取分けて不憫な者ぞとは思ふワイ、自分と同じやうに、ひどく年寄つた者と思ふによつてサとなり。

（評）わが老によりて、人の老を憐む。所謂相見互の同情なるべし。打聽の或說に、才德ある人の、世に沈みてあるを憐みて、橋守に寄せていへるかといひ、眞淵は、宇治に住める人の、宇治の橋守に寄せて、そのいふかひなくて年老いたらむを、高貴の人の憐み給へるにてもあるべしといへり。

（八二七）

いづれも面白き說なれど、「題知らず」とあれば、さまでは、想像の說を用ゐがたし。

（八二八）

○

われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ

（釋）○住の江の岸の姫松　住の江の松のことは、賀部「住の江の松を秋風云々」の條にいへり。姫は、細小にして愛すべき物を形容するに用ゐる語なれど、こゝは、單に松といはむに同じ意なり。一首の意は、この住の江の岸の姫松は、自分が見はじめてからも、もう久しいことになつて居るが、一體、抑もの始からは、いか程、年を經てきたことであらうぞとなり。

（評）さばかり久しく見來れる作者は、即ち老人なり。萬葉集七、

いにしへのことは知らぬを我見ても久しくなりぬあめのかぐ山

を踏襲したれど、語調の流暢にして、姿清げなるは、この特色と稱するに足らむ。初句、わがと讀むべき由、景樹の說あれど、僻言なり。

○

住吉の岸のひめまつ人ならばいくよか經しと問はましものを

（釋）○住吉　住の江と同じ。攝津國住吉郡（今東成郡に合せり）。吉の古訓エなり。住吉と書きて、猶「スミノエ」と訓むべきを、夙く、この頃は「スミヨシ」と訓みけるなり。下にも「住みよしと蜑はつぐとも長居すな」と詠めり。

一首の意は、住吉の岸の姫松は、大層、年久しい物のやうに呼せらるゝが、これが人間ならば、いか程、年を經たかと問うて見ようものを、人間ならぬ故、仕方がないワイとなり。

（評）この種の構想は、先型あることなり。景行紀に、日本武尊の御歌、

尾張にたゝにむかへる、をつの崎なる一つ松あはれ。一つ松、人にありせば、きぬ著せましを、太刀佩けましを、一つ松あはれ。

これ、最も古く、物に見えたる、いとめでたきものならむ。

をぐろ崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを（本集大歌所）

くり原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを（伊勢物語）

また、その響をつぐものなり。中に、この住吉の松は、やゝ、狂痴の想に乏しくて、人ならばと設けいへる詮うすきが如し。但、こは吹毛の難をいふのみ。格調、すべて、おなじ僻なるべし。

初二句、六帖に、玉津島入江の小松とあり。

○

あづさ弓いそべの小松たが世にか萬代かねて種を蒔きけむ

このうたは、ある人のいはく、柿本人まろがなり。

（釋）○あづさ弓　解は、春上「梓弓おしてはる雨けふふりぬ云々」の條に既出。こゝは、磯といは

（八二九）

む枕詞なり。梓弓射といふ響に、磯をいひかけたり。○かねて　かけてといはむに同じ。

一首の意は、この磯岸の上の小松は、ひどく古びて居るが、昔、いつの誰が時代に、これから後何萬年もかけて、生え茂れと思うて、種を蒔いて置いたことであつたらうかとなり。

（八三〇）

（評）この小松は、二葉のにあらず、巖に根させる老樹の矮松なり。宣長が、小松は、たゞ松なり、小きをいふにあらずといへるは、强言なり。樹こそ古りたれ、猶小松なれば、普通の長立（タケタチ）とならむには、萬年の久しきを要すべく思はるゝより、さては、たが世にか、萬代かけて、かくは蒔きおきけむと訝かれるが、この趣向にて、面白きなり。左註の非なることは、この風調を知る者の、ひとしく點頭くところならむ。

○

かくしつゝ世をやつくさむ高砂のをのへに立てる松ならなくに

（釋）○高砂　播磨國加古郡高砂港のあたり。高砂は、もと普通名詞にて、いづくにもあれ、濱風の吹き上げたる砂の積りて山となれるをいふ。やがて、松など生ひて、眞の山といひつべし。播磨の高砂も、さる景色の所なるより、一轉して、これは、固有名詞に呼ばれたるなるべし。序文に「高砂、すみの江の松も、相生のやうに覺え」とあるは、この歌に據りて書けりと覺しければ、撰者も、播磨の名所としたることうつなし。

一首の意は、自分は、この年になるまで、何一つ仕出したる事もないが、毎日毎日、このやうにして、つい、一生を送つてしまうであらうか、あの高砂の山の上に立つて居る松こそ、何の役にも立たずに、年久しうある物なれ、自分は、その松でもないのにサとなり。

（評）世に無用の長物たらむことを慚悔せる對比に、高砂の松を取出でたる、無量の感慨を寓せり。或は、世に、大材を抱ける者の、老境に至るまで、時に合はずして沈淪したるを嗟傷せるものか。こは、試にいふのみ。

たれをかも知る人にせむ高さごのまつもむかしの友ならなくに

藤原興風

（釋）○知る人　知己なり。

一首の意は、自分は、かう年寄つて、今では、生き殘つて居る友達も無いによつて、誰をまあ近付として、交をせうか、あの高砂の松も、年久しい物なれど、それも、昔からの友ではないによつて、話相手にもならぬワイとなり。

（評）上句を、下句にてことわりたるなり。松の有をいひて、故舊の無を嘆ずる對照の間、無限の感を生ず。白居易の「十人酬和九人無」と同じく、老境に於ける孤獨の酸味思ひやるに堪へたり。高砂は、山の意にて聞ゆれど、撰者は、これも、名所として採れるならむ。

（八三一）

○

わたつみの沖つ潮合にうかぶ泡の消えぬ物からよる方もなし

（八三二）

（釋）○沖つ潮合　潮合は、さしひく潮の滿ち合ふところ。○物から　物ながらの意。

一首の意は、海の沖の潮合に浮く泡は、消えずにはありながら、寄りつく場所もないが、自分も、その泡のやうに、命は消えずにはありながら、何處と云うて、たよる所もないワイとなり。

（評）おなじはかなき物ながら、磯邊の泡は、猶寄りつくところあるべし。然るに、これは、沖つ潮合の泡なり。老大、猶、志を得ずして、世に浮沈する意を寄託し得たり。眞淵が、上は、消えぬものからといはむ序なりとのみいへるは精しからず、全然譬喩なり。

四句、六帖に、たえぬ物からとあるはわろし。美成が、この歌、或人の本に、「よみ人しらず」とあり、與風集にも、以下三首、ともに見えず、善本なるべしといへり。さる証本あらば、諒に從ふべし。

○

わたつみのかざしにさせる白たへの波もてゆへるあはぢ島山

（釋）○わたつみ　こゝは、海神の名とせり。陰陽二神、國產みませる次に、海神を產み給ひしことを、古事記に、「次生二海神一名大綿津見神」、日本紀に、「又生二海神等一號二少童命一」と見えたり。古事記

傳に、「師說（眞淵）に、綿は海、津は助辭、見は毛知の約りたるにて、海津持の意なり、これ、海を持つ神なればなり」とあるが如し。海を「ワタ」といふは、渡る意より出づとぞ。さて、轉じては、直に、海のことにも用ゐたり。○かざし　挿頭なり。冠帽の巾子の脇に、造花、或は、生花を挿して、飾とすることとあり。○ゆへる　結へるなり。

一首の意は、海の神が、簪に刺してお出なさるゝ白波を以て、くるりと結ひまはして居る淡路島であることよ、さても面白い景色よとなり。

（評）播磨のあたりより、海越に見渡して詠めるならむ。海神の挿頭、おのづから、崇高の觀念を與ふ。白妙のは、枕詞ながら、こゝは、その本義に立ち返りて、白き色相を聯想せしむ。

○

わたの原よせくる波のたびゝも見まくのほしき玉づ島かも

（釋）○波の　波の如くの意。○玉づ島　紀伊國海部郡若の浦（今の和歌の浦）にあり。三代實錄に、玉出島とかゝれ、空穗物語に、玉出る島ともあり。されば、つは濁りてよむが正し。玉津島明神の社あり、衣通姫を祀る。

一首の意は、この海原から、絶間もなく、しばゝ寄せてくる波のやうに、何遍も來て見たいと思ふ玉津島であることよとなり。

（評）さても面白き景色かなの餘意あり。有心の序歌なり。玉津島の景は、聖武帝、いたく愛で給ひ

（八三三）

て、

登レ山望レ海、此間最好。不レ勞ニ遠行一足ニ以遊覽一。故改ニ弱濱一、名爲ニ明光浦一、云々。春秋二時、差ニ使官人一、奠ニ祭玉津島之神明光浦之靈一。

と詔らせ給ひき。爾來、奈良人の賞翫するところとなりて、以て、この朝に至れり。今は、海潮減退して、昔時の觀なしといふ。

○　（八三四）

なには潟潮みちくらしあま衣たみのの島にたづ鳴きわたる

（釋）○あま衣たみのの島　あま衣は雨衣にて、たみのの島は、攝津にありと、古註にいへど、今は、和名美能、雨衣也」とあるを思ひ合はすべし。たみのみのといはむ序に用ゐたり。和名抄に、「簑場處不明なり。秋成の說に、「今大わたと呼ぶ里あり、近昔までは、みのわたと呼びしなり。是たみのわたりなるべし。今、難波とよぶ里も、そこに遠からず」といへり。

一首の意は、あゝ、難波の浦の干潟に、潮が滿ちてくるらしいワイ、その證には、あのたみのの島へ、鶴が飛び騷いで鳴いて渡るワイとなり。

（評）神韻を以て勝る。又、ア列音多くして、聲韻爽快なり。

難波潟汐干にたちて見わたせば淡路の島にたづ渡る見ゆ（萬葉七）

わかの浦に汐みちくれば潟をなみ蘆邊をさしてたづ鳴きわたる（萬葉六）

の如き、皆同型にして、格調蒼古なり。但、當代より論せば、萬葉の糟粕、奈良人の餘唾を舐れるものならむ。

貫之が、いづみの國に侍りける時に、大和よりこえまうできて、よみてつかはしける。　藤原たゞふさ

君を思ひおきつの濱になくたづのたづねくればぞありとだに聞く

（釋）○思ひおきつの濱　思ひ置くに、沖津の濱をかけたり。濱は、和泉にありとぞ。

一首の意は、私は、貴方のことを、心にかけておいて忘れずに、この沖津の濱に鳴く鶴（タヅ）の名のやうに、尋ねて來たればこそ、御無事で御出なさるといふことだけなりとも聞いたれとなり。

（評）それに引換へ、貴方からは、一向、音信も給はらぬことかなと、暗に怨じたる餘意あり。忠房が、大和守となれるは、この撰集後、延喜廿二年のことなれば、當時は微官にて、大和に在任せしものか。貫之が、蟻通明神の社頭にて、歌詠みしけることをも思ひ合はすれば、これも、和泉の國衙にありける小吏なりけらし。されば、公務などにて、和泉の沖津の濱まではきたれど、私に、閑を偷みて、貫之を訪はむことなり難かりけるより、歌のみ贈りしものならむ。

かへし　つらゆき　（八三五）

おきつ浪たかしの濱のはま松の名にこそ君を待ちわたりつれ　（八三六）

（釋）○おきつ浪たかしの濱　沖つ浪高しといふに、高師の濱をかけたり。濱は、和泉國泉北郡（もと大鳥郡）高石の海岸、濱寺あたりなり。

一首の意は、あの沖つ浪の高いといふ高師の濱の、そこの松の名の通りにサ、自分は、とうから、久しう、貴方をお待ち申して居つたワイとなり。

（評）彼より、なくたづのたづねくればぞといひおこせるを受けて、此方も、高師の濱の濱松の名にこそといひて、疊音の巧を闘はせたる、時に取りて、興なからずやは。作者は、流石に老手なり。松を、待つに取做すは、例のことなり。こゝその用法、後ざまなるに注意すべし。この歌、拾遺集雜戀に再出したるには、詞書「和泉の國に侍りける程に、忠房の朝臣、大和よりおくれる返し」とあり。然れども、上なる忠房の歌に「尋ねくればぞ」とあれば、却りて、事實違ふべし。

なにはにまかれりける時よめる

難波潟おふる玉藻をかりそめの海士とぞ我はなりぬべらなる

（釋）○玉藻をかりそめの　玉藻を刈りといふに、假初をかけたり。

一首の意は、たま〳〵、京地より來て、この難波潟の風景を見れば、さて〳〵珍しく面白くて、歸ることも忘れて、當分、玉藻を刈る海士にサ、自分はなつてしまひさうな樣子だワイとなり。

（評）面白さに長居せらるゝを、海人になりぬべらなりと誇張したるを、手柄とす。

上句、六帖浦本に、生の浦におふる玉藻のかりそめにとあり。本文のに劣れり。

あひ知れりける人の、住吉にまうでけるに、よみてつかはしける。　みふのたゞみね

住吉とあまはつぐとも長居すなひとわすれ草おふといふなり

（釋）○住吉　地名の住吉に、住み好しの意を寄せたり。○人わすれ草　人を忘るといふに、わすれ草をかけたり。

一首の意は、貴方が、住吉に行かれたなら、所の名の通りに、住みよい處であると、海士は申さうとも、必ず、長居をなさるゝな、かの住吉の岸には、人を忘るといふ名の忘草が生えて居るといふことだワイとなり。

（評）何分、早く戻り給への餘意あり。人は、大やうにいひて、自身を含めたるなり。住吉の神詣、假初の出立ながら、風光明媚にして、長居しぬべき處がらなるより、忘草を撮み合はせて、一ふし巧みたる、又、初句の口合ひなど、皆、この作者の風骨なり。人わすれ草は、一寸面白きが、この作者のはじめたる造語にはあらじ。既に、萬葉にも、戀わすれ貝と作り、この集墨滅の歌にも、戀わすれ草と詠める貫之のがあればなり。

なにはへまかりける時、たみのの島にて、雨にあひてよめ　（八三七）

る。

雨によりたみのの島をけふゆけばなには隱れぬ物にぞありける　（八三八）　つらゆき

る

（釋）○たみのの島　上に既出。○なには　名にはなり。難波を寄せたり。

一首の意は、雨が降るによつて、簑といふ名をあてにして、この難波のたみのの島を、今日行けば、存外に、名には、身體（カラダ）の隱れぬものでサあつたワイとなり。

（評）やはり、さん〳〵に濡れたるはの餘意あり。俄雨に過ひて隱れたるに、所しも、たみのなりしかば、名には隱れぬと思ひ寄せたり。さて、本の句をも、雨の降るによりて、もしやと、わざと、田簑に行きたるさまに構へなせりと、景樹のいへるが如し。但、緣語の仕立を主想としたる尖鋭の格調、わが諸はぬところなり。

三句、顯本に、けふゆけどとあり。意は聞え易けれど、本文の方、含蓄ありてよかるべし。

法皇、西川におはしましたりける日、つる洲に立てりといふことを題にて、よませ給ひける。

あしたづの立てる河べを吹く風に寄せて返らぬ波かとぞ見る

（釋）法皇西川に云々　法皇は宇多の上皇。西川は大堰川なり。京都より西に當ればいふ。つる洲に立てりは、鶴立ノ洲の漢字題を譯せるなり。日本紀略に、「延喜七年九月十一日、天皇幸ニ大堰河ニ」と見えて、その前日に、「法皇召ニ文人ヲ、賦ニ眺望九詠之詩ニ」とあり。鶴立洲は、眺望の一つなるべし。序文は貫之、歌人は、序者、及び躬恒、是則、賴基等なり。

一首の意は、あれは、白い鶴の立つて居る河邊であるものを、自分は、ついしては、吹く風につけて寄せたまゝかへらずにある波かとサ、見るワイとなり。

（評）色相上の聯想より、浪を點出し、更に、寄せてかへらぬの巧を添へたり。さて、これは、この集奏進後の歌なり。

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて、遊びける日、法皇、御らんじにおはしましたりけり。夕さりつ方、かへりおはしまさむとゝけける折に、よみて奉りける。　伊勢

水のうへに浮べる舟の君ならばこゝぞとまりといはましものを

（釋）中務のみこ云々　中務の親王は、宇多法皇の御子にて、玉光宮といはれし敦慶親王なるべし。この親王、延長八年二月に、四十四歳にて薨ぜられしより逆算すれば、延喜の頃は十七八歳にて　（八三九）

おはしますなり。初冠し給ひて、直に、中務卿に任ぜられ、後、御弟敦實親王に、中務卿を譲りて、式部卿に轉じ給ひき。中務卿にておはせし程の御女を、中務と稱して、名譽の歌人なり。諸註、こゝを、敦實親王といへるは差へり。敦實親王は、この集撰進後の延喜七年に冠せさせ給ひ、尋いで、中務卿となり給へるなればなり。おろしはじめては、新造の舟を、始めて進水すること、遊びは、例の管絃の遊なり。法皇は宇多の上皇。○とまり　舟泊なり。

一首の意は、水の上に浮いて居る、今日、御召になつた舟が、法皇樣であるならば、こゝが、その泊所でありますと申し上げて、お留め申さうものを、舟でない法皇樣には、さやうにも申し上げられず、お留め申さぬが、殘多いことに存じ上げますとなり。

（評）舟の君ならばといへる空中樓閣、幻化の手段妙といふべし。作者は、中務の君の母なるよしなれば、この頃は、敦慶親王の妻にて、亭主方として、法皇の御駕を迎へ奉りしものか。さては、法皇との關係は、すでに絶えたりしものと看做すべきに似たり。物の音、名殘をかしう、池の中島にすさび、木の香新しき朱のそほ舟は、汀の波にただよへり。見送仕うまつると、御車のへに侍ふ、一雙玉の如き人、御心ゆきて笑ましげに見おこせ給ふ法皇の御顏、この時の情景、おもひやるだに、限なくおもしろうなむ。況や、別れがてなるこの三十一字の歌辭、今日の掉尾の興を添へたるをや。

この歌、及び、上の歌の詞書に、「法皇云々」とあるが、他の例にたがへるを訝りて、廣蔭が、後人の書入ならむと推し量れるは、却りていかゞなるべし。そは、宇多帝御在位中にかゝれるものは、

（八四〇）

「寛平の御時」と書し、御讓位後にかゝれるもののうち、御出家後のは、「法皇」とのみ書けるなり。史によるに、この帝、御讓位の後、朱雀院太上天皇と稱せられ、昌泰二年、太上天皇の尊號を辭して、單に、朱雀院とのみ稱せむことを請ひ給ひしかども、醍醐天皇きかせ給はざりしかば、これより、法皇と申すと見えたり。この集の詞書、正に、これに符合す。その差別の嚴なること思ふべし。猶、おなじ人の作を、一は良岑宗貞、一は僧正遍昭と書きわけたるが如し。

唐琴といふところにてよめる　　眞せい法師

都までひゞきかよへるかからことは波の緒すげて風ぞひきける

（釋）唐琴　備前の國なる泊とぞ。○すげて　附けての音轉なり。

一首の意は、京まで、名の響いて聞えてある唐琴の浦は、どうして、さやうにひゞいたかと見れば、波の絲をすげて、風がサ彈いて、音をたつるのであつたワイとなり。

（評）これは、無理のないこと、人間業にあらざればの餘意あり。唐琴より、響かよへるといひ、さて、波の緒に風の彈手の空想を案出せる、恰も、春鶯の絲を吐くが如し。たゞ、その緣語にからまれたるを飽かずとするのみ。

四句、六帖に、波の緒よりてとあり。

布引の瀧にてよめる　　在原行平朝臣

（八四一）

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる

（八四二）

（釋）布引の瀧　攝津國、今の神戸市の北端、布引山の半腹にかゝれり。雄瀧十五丈、雌瀧七丈餘。勢語の傳ふるところに據れば、「この山の上にありといふ布引の瀧見にのぼらむといひ、のぼりて見るに、その瀧、物よりことなり。高さ二十丈、廣さ五丈ばかりなる石の面に、白絹、岩を包めらむやうになむありける。さる瀧のかみに、蓁蓋の大さしてさし出たる石あり。その石のうへに走りかゝるは、小柑子（ウカウジ）栗の大さにてこぼれ落つ」とあり。

一首の意は、丁度、緒につないである玉を引きしごいて撒きちらすやうなる、この瀧の氷玉を拾うておいて、世の中の憂い時節の自分の涙にサ、借りてつかはうワイとなり。

（評）百尺の素練、絶壁に翻りて、大珠小珠を、瑠璃盆に跳らす。この絶景も、何の思ふところなくてこそ面白けれ、身はこれいかに、胸中萬斛の愁思は、けせども消し難きにあらずや。いきほひ、遂には、塵世のうきを感ずるに至りぬべし。乃ち、その時の涙として、かばかりおびたゞしき瀧の白玉をかるべしといふ。以て、その涙の甚しきこと知るべく、又、世のうさの一方ならざる事見つべし。四句、豫定の語なり。ひろひおきてと、その意相應ず。さらば、結句、からむと、未來にいふべきを、現在に斷定せるは、強くいひつめたるものなり。作者が、この布引に來れるは、下に、「田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふところに籠り侍りけるに」とある度ならむか。程も遠からぬ、同じ國内の名所なれば、排悶の便にもとて、訪ひけるならし。

布引の瀧のもとにて、人々あつまりて、歌詠みける時によめる。　　なりひらの朝臣

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

（釋）一首の意は、誰ぞ、繋いである緒から拔いて、ばら〳〵にちらす人がサ、あるらしいワイ、このまゝ、狹い袖に、包まれもせぬ程、うつくしい白玉が、絶間なしにまゝ、散りかゝる事よとなり。

（評）例の玉の緒、著想に珍しげなけれど、ぬき亂る人を捉へたるは、時にとりての思ひつきか。詞書も、その心して、「人々あつまりて」の一句を加へて、上のとわかちたり。瀧のしぶき、面をうちて、衣袂、皆沾ふあたりの歌まとゐ、興に乘じては、さる業する戯者（イタヅラモノ）なしと限らむや。その打解けて遊び耽りたるさま想ふべし。伊勢物語に、この歌を掲げて、「かたへの人、笑ふことにやありけむ」とあるは、正に、この意を得て書けるものなり。景樹は、勢語に、作者の兄行平も同伴したる由に書けるを見て、上なる行平の歌をも、同時の詠とし、この詞書を、後人の書入なりといひ、殊に、その說を立てむとては、「人々集りて」を、徒書なりとまでいへるは、歌の趣を無視したる妄論なり。何も、同時の詠とすべき確証なく、また、その必要なし。彼これ、更に相渉らぬ事と知るべし。

（八四三）

六帖に、四句、間なくもふるか、結句、袖のせばさにとある、いづれもわろし。

よし野の瀧を見てよめる　承均法師

たが爲にひきて晒せる布なれや世をへて見れどとる人もなき

（八四四）

（釋）よし野の瀧　萬葉集に、「鮎はしる吉野の瀧」など詠みて、吉野河の、早瀬となりて落ちたぎつところなり。宮の瀧など、皆然り。

一首の意は、誰が著物にする爲にと云うて、引張つてほしてある、あの布であればかして、年月へて久しく見れども、いまだに、そのまゝにて、別に取入るゝ人も無いワイとなり。

（評）不思議なることかなの餘意あり。怪訝の意を、この性命とす。

六帖に、二句、かけて晒せる、結句、きる人ぞなきとあり。又、季吟の抄に、結句、とる人のなきとあり。かけては、垂水のさまなれば、吉野の瀧にはかなはずと、景樹のいへるよろし。又、結句、六帖のは、てには調はねば論なし。抄のも、本文に劣れり。

題しらず　神たい法師

清瀧の瀨々のしらいとくりためて山わけ衣おりてきましを

（釋）○清瀧の　清き瀧つ瀨は、清瀧なり。その固有名詞になれるものにては、山城高雄山の麓なる清瀧川、最も有名なり。○山わけ衣　山を行く時の衣なり。山ごもりする僧、又は、隱士などの

服をいふ。

一首の意は、この清瀧の瀨々の水は、宛も、白い絲のやうであるが、これを、澤山繰りためて、山わけ衣を織つて著ようものをサ、さうもならぬが惜しい事よとなり。

（評）作者の身上相當の構想ならむ。出家の服は墨染なるべきをなど、いひ泥むべからず。さて、瀧の絲の混喩は、到底、奈良時代のものにあらず。或は、この歌にはじまれるか。後人の、みだりに踏襲するところとなれり。

龍門にまうでて、瀧のもとにてよめる。　伊勢

たちぬはぬ衣（キヌ）きし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

（釋）龍門に云々　龍門は、大和國吉野郡なる龍門山の龍門寺なり。山は、高さ三千二百餘尺。二條の瀑布あり、一を龍門の瀑、一を白倉の瀧といふ。いづれも、高さ三丈、濶さ三尺ばかり。寺は、今は退轉して、跡かたなし。扶桑略記に、

古老傳、本朝往年、有二三人仙一、飛二龍門寺一、所レ謂大伴仙、安曇仙、久米仙也、大伴仙、有レ基無レ舍、餘兩仙室、今猶在云々。

懷風藻に、葛野王遊二龍門山一一絶、

命レ駕遊二山水一、長忘冠冕情、安得二王喬道一、控レ鶴入二蓬洲一、

など見えて、龍門に、仙人の住みし傳說ありけるなり。○たちぬはぬ衣きし人　仙人をいへり。

（八四五）

天衣無縫などいひて、仙衣は、裁縫を要せずとなり。○山姫　山を守る女神。

一首の意は、裁縫せぬ衣を著たりし昔の仙人も、今は居もせぬのに、何の爲に、山姫の、あのやうに、布を晒すのであらうぞとなり。

（許）垂水を、布と見立つること、すでに、瀑布の字面すらありて、何の奇だになし。これによりて、いかに、想を構ふとも、そは徒に、機巧に流るゝのみにして、詩味、いよゝ索然たらむ。このわたりの作者、惜むらくは、語言の末をおふに急にして、かの自然の大觀を忘れたり。銀河の、九天より落つる李青蓮が胸吐、いづこにかもとめむ。嘆ずべきかな。この歌、仙衣をさらすを、山姫の仕業としたる詩的空想、なに山姫のといへる一番の嘲笑、いづれもをかし。瀑の布の中にては、最もすぐれたり。

（八四六）

朱雀院のみかど、布引の瀧御覽ぜむとて、ふむ月のなぬかの日おはしましてありける時に、さぶらふ人々に、歌よませ給ひけるによめる。　たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布を棚機にわが心とやけふはかさまし

（釋）朱雀院のみかど云々　こは、宇多上皇が、大に遊幸せさせ給ひし昌泰元年、二年の間の出來事なるべし。○棚機　例の織女星なり。神代の棚機姫のことにあらず。

一首の意は、主なしにさらしてあるあの白布を、織女に、自分だけの取計で、借さるゝものならば、外の日はともかく、七夕の今日は借さうワイとなり。

（評）織女に借さむといふは詩的なれども、七夕祭には、物を手向くるにいふ套語にて、作者の新案にあらず。只、主なき瀑の布を、けふの祭に取合はせたる當意のをかしきのみ。

ひえの山なるおとはの瀧をみてよめる。　たゞみね

おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黑き筋なし

（釋）ひえの山なる云々　山科の音羽瀧と區別せむとて、「比叡の山なる」と冠せたり。空穗物語に「住みわたりけるところは、そのあたりは、比叡の坂本小野わたり、音羽川近くて、瀧の音、水のこゑ、あはれに聞ゆるところなり」とある瀧の音は、この音羽の瀧なるべし。六帖、及び、源語に、小野山に、音なしの瀧をよみ合はせたれば、或は、この瀧を、音無の瀧ともいひしか。○をちたぎつ　水の落ちてたぎること。

一首の意は、たぎつて落つる、この瀧の水上が、久しくなつて、年寄つて去まうたさうな、みるところ、白髪ばかりで、黑い筋は、一すぢも無いワイとなり。

（釋）初三句、聲調よろしけれど、こは、萬葉にいくらも見えて、一種の成語となれり。唯、全體の調の勁健なるを、この特色とす。元來、國歌に、擬人を運用すること少ければ、耳なれぬ心地に

（八四七）

は、この歌などは、俳諧にも入りぬべく思はるゝなるべし。水上に、皆髪をかけたりといはむは、この歌を俗了するのみならず、意のたじろぐことを知ざるものなり。よくよく味ひみよ。三句、打聽本に、年をへてとあり。語調、やゝよわし。

おなじ瀧をよめる　　みつね

風ふけど處もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞありける

（八四八）

（釋）○さらぬ　去らぬなり。

一首の意は、風が吹けども、同じ所を去らずにゐる、あの白雲は、不思議のことと、よく〳〵見れば、昔から落つる瀧の水でサあつたワイとなり。

（評）忠岑、躬恒の兩歌仙が歌によりて想ふに、音羽の瀧は、垂水にはあらで、山腹の木繁きあたりに、白泡立ちておつる溪流なるべし。この二首、同時の詠か、異時の詠か。そは明らかならず。結句、六帖に、瀧にざりけるとあり。

田村の御時に、女ばうのさぶらひにて、御屏風の繪御覽じけるに、瀧おちたりけるところ面白し、これを題にて、歌よめと、さぶらふ人におほせられければ、よめる。

三條の町

思せくこゝろのうちの瀧なれやおつとは見れど音のきこえぬ

（釋）田村の御時に云々　田村の御時は、文德天皇の御時なり。この帝の陵、山城國葛野郡田邑郷にあり。故に申す。女ばうのさぶらひは、女房達の詰所にて、即ち、臺盤所なり。清涼殿中、朝餉の間の南、鬼の間の北にあり。○思　名詞法なり。

一首の意は、人が、物思を怠へて居る心のうちは、音こそせね、瀧のやうにわきかへる物であるが、この繪の瀧は、その心の內の瀧であればかして、落つるとは見えながら、一向に、音が聞えぬワイとなり。

（評）戀の心を、瀧によそへて詠みなすことは、古歌にも、集中にも、例多かり。たゞ、心のうちの瀧を、一ふしとす。題詠の詠、おのづから、過巧の弊あるは、是非なし。二句のはてのの文字を、の如くの意と見ば、意、やゝ明快ならむも、この語勢は、しか打弛びて聞き做すことを許さず。又、作者は更衣なれば、その人柄として、下には、おのが思をほのめかせりともいはるべけれども、さまであなぐる要なかるべし。

屏風の繪なる花をよめる　　つらゆき

咲きそめし時よりのちはうちはへて世は春なれや色の常なる

（釋）一首の意は、咲きはじめし時から後は、長くうちつゞいて、世の中は、いつも、春であればかして、この花は、色が、常住おなじ事であるワイとなり。

（八四九）

（評）屏裡、常に、春風を廢する底の詩味あれど、措辭、やゝ冗漫にして、結句、ことに凡なり。繪にゆづりて、花の字を着けず。

（八五〇）

屏風の繪によみあはせてかきける　　坂上これのり

かりてほす山田の稻のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

（釋）屏風の繪によみあはせて　繪に、おのが情をよみあはするなり。○こきたれて　扱き垂れてなり。

一首の意は、この繪にかいてあるやうに、刈つてはほす山田の稻をこきおろすやうに、涙を、はら〳〵流して、雁のなくやうに泣いてサ、月日をたつるワイ、秋がつらいによつてサとなり。

（評）繪樣は、かたへには、刈りほしたる稻塚ありて、賤の、稻をこきおろすところ、空には、雁のつらねて、鳴き渡るさまなるべし。初句、かりてに、雁をよせたり。秋上、躬恒、

うきことを思ひつらねて雁が音のなきこそ渡れ秋のうければ

と、全く同意ながら、一段、理趣におちて、措辭も、簡淨ならず。

古今和歌集卷第十八

雜歌下

題しらず　　よみ人しらず

世の中は何かつねなる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀨になる

（釋）○飛鳥川（アスカ）　大和國高市郡飛鳥を流るゝ川。

一首の意は、飛鳥川を見れば、昨日まで、淵であつた所がサ、今日は、もう淺い瀨になるワイ、あの川でさへさうである、世の中では、何が、いつも變らぬ物か、いや、變らぬ物といふは無いワイとなり。

（評）廣陰が、淵瀨の變らぬ喩に、古歌に詠まれたる飛鳥川すら變るなればと解したるは、まことに面白き新說なり。されど、古歌に、さか詠まれたる例を知らず。萬葉を檢するに、山川にて、瀨の早きこと、淀のあること、玉藻のおひたること、蛙の鳴くこと、身そぎすることなどのみ見えたり。恐らくは、杜撰ならむ。さて、この飛鳥川は、あながちに、要あるにあらず、淵瀨の變り易き山川ならば、いつこにても可なれど、只、きのふけふといへる因に、明日をまじへて、文としたるのみ。但、明日は、また、淵になるならむの意を添へてきかむは、蛇足なり。「けふ〳〵と飛鳥にい

（八五一）

り」、「飛鳥川あすさへ見むと」、「飛鳥川あすも渡らむ」、「飛鳥川ゆきたむ岡の秋萩はけふふる雨に散りかすぎなむ」など歌ひし奈良朝歌人は、昨日今日明日とまで數へたてたる、この大胆に、舌を卷くなるべし。着想は、例の佛教思想にして、卽ち、涅槃經の諸行無常觀なり。その奇警なる點は、餘り、變轉なき物のやうに、人の思ひすてたる地象に屬する川を拈出して、その證左としたるにあり。また、措辭奇巧に。調、渾然として、一の浮辭漫辭なし。これ、千古、人口に膾炙せらるゝ所以か。

（八五二）

○

いくよしもあらじわが身をなぞもかく蜑の刈藻に思ひ亂るゝ

（釋）○いくよしも　いくよは幾世、しは强辭、もは歎辭。○刈藻に　刈る藻の如くにの意。一首の意は、いか程長生すればとて、千年萬年もはサ、まあるまいと思ふこの身なるものを、なぜまあ、かう、海士の刈る藻の亂るゝやうに、とつおひつ思ひ亂れて、苦勞するのであるぞとなり。

（評）浮世は、まゝ皮にせよやの餘意あり。人生いくばくもなし、李白が、

處レ世若二大夢一、胡爲勞二此生一、

と、その想相同じ、初二句の、理をいひつめたると、わが身をと制限して、詩味を狹めたるとは、この、大に劣れる點なり。只、蜑の刈る藻の修辭を、この優れるところとせむか。初二句、

あらじと思ふわが身なるものをとあるべきを略きたり。諸註、今は、いくばくもあるまじきわが身をと、もはや、盛過ぎたる人の述懷とせり。さては、いくばくもあらじなどあらでは當らぬ事なり。新撰六帖には、いくばくもとあれども、彼によりて、必ず、此を解かむとするは非なり。又、四句、六帖に、かる藻のとあり。

○

雁のくる嶺のあさ霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

（釋）一首の意は、雁のくる時分の、その嶺の朝霧の曇つてあるやうに、心が晴れずにばかり、常住、おもひ事の盡きぬ、この世の中の憂さワイとなり。

（評）初二句は序にて、時の景物をあしらひたるなるべし。孟郊が、「出レ門皆有レ礙、誰言天地寬」の如く、餡酸の氣の迫るにたへず。

結句、六帖に、うきとあり。

小野たかむらの朝臣

あかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中

（釋）○背かれなくに　背くは、世を遁るゝこと。

（八五三）

一首の意は、さうであつたとて、世を遁れらるゝこともないのに、何ぞ、事がサあれば、まづ一番に、あゝ愛い世の中ぞと云うて、歎かれたワイとなり。

(評)こゝに悲觀し、こゝに厭世す。只、しかりとて背かれなくにの理性のあるありて、わづかに、死の手を免るゝのみ。流石の野狂その人も、境遇の不平は、遂に、この愚痴に墮ちたるか。六帖に、初句、をかありとて、四句、歎かるゝとあり。又、新撰和歌には、結句、あれば世の中とあり。

(八五四)

甲斐のかみに侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける。

みやこ人いかにととはば山高みはれぬ雲ゐにわぶと答へよ　をのゝさだき

(釋)京へまかりのぼり　まかるは、退出の意なるが、この頃は、行くと同意に用ゐられたり。

一首の意は、もし、京の人が、自分の事を、どうして暮して居ると尋ね問うたならば、山が高くて、常住、雲の晴れぬやうに、心もはれぬ遠い國に、難儀して居ると答へてくれとなり。

(評)事にあたりたるさすらひの身にあらず、又、住むべき國もとむるにもあらず、大君のまけのまゝに、事とりもちて、民草をやはすべき官人にして、いふところ、かくの如し。高山のかひの國、處がらとはいへ、餘に女々しきを慨む。否、こは、人の同情を求むべく、わざと、旅愁を誇張したるのみ。下なる行平の「わくらばにとふ人あらば」と、全く同型なり。いづれか踏襲なるべき。

ぶんやのやすひでが、三河のぞうになりて、あがた見には、えいでたゝじやといひやれりけるかへりごとによめる。　小野小町

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

(釋)ぶんやのやすひでが云々　三河のぞうは、三河國の椽にて、國司の三等官なり。あがた見は、田舍見物なり。あがたは、上田(アガリタ)の略にて、田舍にある御料地をいひしが、轉りて、縣主の治むる地の稱となり、又、轉りて、地方官の任國をいひ、更に、田舍の稱となれり。えいでたゝじやは「えう出掛けまいかどうか」の意。

一首の意は、自分は、今では、ひどく難儀にくらして、身を憂いつらいと思うてをるゆゑ、丁度、浮草の根がきれて、水のゆく方へ誘はるゝやうに、誰でも、誘うてくるゝ人があるならば、どちらへなりと往かうと思ふワイとなり。

(評)康秀が、縣見には、えいでたゝじやといひおこせたるを承けて、田舍見物位の洒落にはあらず、誘ふ水だにあらば、いづこへなりとも、往き切に參らむと答へたり。これ、一時の辞令なり。康秀の好意に對する挨拶なり。詞のうへにのみ泥みて、眞に、田舍住せむとするものと速斷すべからず。又、落花流水の風流消息ありと忖度すべからず。さはいへ、彼が、當時、失意の境遇にあ

(八五五)

りける事は、論なし。春下、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

後撰雜一、定めたる男もなくて、物思ひける頃、

蜑のすむ浦こぐ舟のかぢをなみ世をうみ渡るわれぞ悲しき

などを思ふに、漸く、縮緬皺の、小鼻に寄るに驚き、さて、生涯の苦樂を託すべき、眞面目なる戀瀬を思はざりし不覺に想到して、懊惱煩悶に禁へざりし折も折、康秀が誘ふ水にあひけるならし。本居内遠が考に、當時、康秀五十餘歳、小町三十七八歳なるべくいへり。措辭巧慧、作者の才思を見つべし。詩の鄭風に、

蘀兮蘀兮、風其吹ㇾ女、叔兮伯兮、倡ㇾ予和ㇾ女、

と、全く、その體製をひとしうして、聯璧の觀あり。

題しらず

あはれてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ

（八五六）

（釋）○うたて　うたたの轉。○ほだし　古語ふもだし、馬の足を繫ぎとむる綱なり。

一首の意は、人を、あゝいとしいと思ふことがサ、この憂い世の中を、生憎に、えう思ひ切つてすてられぬ羈絆（キヅナ）であつたワイとなり。

（評）わびて、世を背きなむなど思へる折の作なるべし。諸註、人の、あはれといひてくるゝ詞こそ、浮世の絆とはなれと解きたるは、面白きものから、いひ過したる嫌あり。

新撰和歌には、二句、ことこそうけれ、結句、けりとあり。

あはれてふ言の葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり

よみ人しらず

（釋）一首の意は、昔の事を思ひ出して、あゝと歎くたび毎に、涙がこぼるゝ、すれば、そのあゝといふ言の葉に、ひとつ〳〵おく露は、涙であつたワイとなり。

（評）言の葉の混喩より、涙を露にいひなしたる隱喩、意巧に、詞簡淨に、調流諧なり。但、珠はちひさし。

○

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしる物は涙なりけり

（釋）一首の意は、世の中の憂いことも、つらいことも、云うて聞かせもせぬのにまあ、存外に、一番に知るものは、涙であつたワイとなり。

（評）憂きにつけ、つらきにつけ、ちきに、涙のこぼるゝを、涙の、まづ知るとやうに擬人したるが、この一ふしなり。告ぐれども知らぬふりする人、いかに、背に汗すらむよ。しかし、つげなくには、

（八五七）

餘に、理をいひ詰めたり。

○

よの中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらずありてなければ

（八五八）

（釋）一首の意は、この世の中は、夢か正眞か、いや、正眞とも夢とも知られぬワイ、世の中は、あつて、しかもないのであるからサとなり。

（評）想は、天台にいはゆる三諦の理なり。萬有の現象、有と觀ずればうつゝなり。無と觀ずれば夢なり。有の假諦にあらず、無の空諦にあらざる實相、これ中諦なり。現とも夢とも知らずば、中諦にあたる。この眞如の妙諦を、三十一字に發展し得たるを、作者の技倆とす。初二句は自問、三句以下は自答なり。促句まじりの四段切の中に、漸層法と反轉法とを用ゐて、語調の勁健をつとめ、同時に、同語を反復せしめて、聲調の和諧をはかれるなど、作者苦心のところなるべし。

○

世の中にいづらわが身のありてなし哀とやいはむあなうとやいはむ

（釋）一首の意は、この世の中に、どれどこに、わが身があるぞ、今日明日にも死なうも知れねば、あつてないものである、されば、あゝ悲しいといはうか、あゝ愛いといはうかとなり。

（評）例の無常觀、平々凡々なり。四段切の促句仕立にて、四五の句、同型の語を反復したるうへに、アの頭韻を押せるを、異色とす。

○

山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり

（釋）一首の意は、山家は、物さびしいことこそあるけれ、それでも、世の中の憂いのよりは、存外に住みよくあつたワイとなり。

（評）境は、卽ち心を移す、人生の行路に蹉跌し、世をすて、世にすてられて、山里に思ひ入りぬる時こいかで、この感なからむ。哀なり。

六帖、小町集に、二句、物のわびしきとあるを、しまりて優れりと、景樹はいひたれど、うなづき難し。うきといふの類語なるわびしきにては、一向、對照の妙を見ず。又、朗詠に、物さびしかる事はあれどとあるは拙し。

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそあり

これたかのみこ

けれ

（八五九）

（釋）一首の意は、雲の、不斷たなびく高山の峰でさへ、住めば、かうして住んで居らるゝ世の中であつたワイとなり。

（評）この親王の御事に就いては、既に、春上「世の中にたえて櫻のなかりせば」の條下にいへることあり。參照すべし。失意の極、遂に出家して、山城國愛宕郡小野の里に住ませ給ひき。伊勢物語に、

む月に、拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪、いと高し。しひて、御室にまうでて拜み奉るに、つれづれと、いと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など聞えさせけり。

とは、この間のことなり。金殿玉樓にのみ起臥せさせ給ひし御心地に、住み遂げ難く思し召されし山住なるを、住めば都と覺らせ給ひけむ御心の中、思ひやるだに、いと悲しく、はた畏し。住めば住みぬるの同語の折りかへし、沈痛の意を深むる所以なり。

六帖には「よみ人しらず」とあり。又、四句、古本貫之集には、住めばすまるゝとあり。

（八六〇）

ありにけむきゝても厭へ世の中は涙のさわぎに風ぞたくめる　　ふるのいまみち

（釋）○しくめる　しくは頻の意、重波（シキ）のしきに同じ。

一首の意は、これ、世間の人達よ、もう知つてしまうて居るであらう、もし知らずば、今、自分が云ふことを聞いてなりとも、この世を厭うて捨ててしまへ、この世の中は、丁度、海ならば、涙の騷しう、風が吹きかけ〳〵するやうなるものと見えたワイとなり。

（評）法華經の偈文、

三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏、

の意をのべたり。下句は、古物語などに、疫病などにて、人數多死ぬるを、「世の中騷しき頃」と書けると同意にて、無常迅速、物安からぬ貌を、浪の立ち騷ぎ、風の吹きしきるに喩へたり。千秋が、風吹きて、浪ぞ騷ぎしくめるといふ意なるを、さはいひ難き故に、風と浪とをわけたりといへるは非なり。實景はしかならむも、こゝは、たゞ、關聯したる事項を排對したる譬喩なるのみ。

そせい

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

（釋）一首の意は、どちらの方へ、この世を捨ててゆかうぞ、この心といふものがサ、野に往つても、山に入つても、やはり惑ひさうな樣子だワイとなり。

（評）我ながら、わが心には、愛想のつきたる事かなの餘意あり。華嚴經にいはゆる、「三界唯一心、心外無別法」の理は、かくて暗示せられたり。四句は、野にても山にてもの意なるが、辭樣、やゝ、明快を缺けり。

（八六一）

雜部下の古本に、初句、いづこにかとあり。

世の中は昔よりやはうかりけむ　わが身ひとつの爲になれるか　よみ人しらず　（八六二）

（釋）○やは　やは疑辭、はは添辭。
一首の意は、世の中は、昔から、この通りにまあ、憂いのであつたであらうか、それとも又、自分の身ひとりの爲に、このやうに憂い世の中になつてあるのであらうかとなり。
（釋）わが身ひとつの爲といふことはあるまじきを、去かも疑ひて、兩端を叩ける愚痴を聞くべし。

○

世の中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色に出にけむ

（釋）○あなうの花　あな憂に、卯の花をかけたり。あなは歎辭。
一首の意は、あゝ憂いと思うて、世の中を厭うて引込む山邊の草木（サウモク）といふことでか、憂いといふ名の卯の花が、かう、色にあらはれたのであつたらうとなり。
（評）正義に引ける赤尾可官の說に、うつ木の一種を、今、比叡の山人「あなうつ」といへり、色も薄紅なれば、色に出にけむといふかといへるよろし。抑も、うつ木には、常いふうつ木と、山うつ木と、箱根うづ木との三種あり。比叡山なるは、山うつ木なるべし。白きをのみ見馴れたる目に、その淡紫紅色なるを訝りて、處がら、非情の草木も、猶かつ、あな憂の色に出でたるかとなり。うつ木な漉木なるを、草木とやといへるは、熟語の常なり。

○

三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

（釋）○かくれが　隱處（カクレガ）なり。隱家とかくはあて字。
一首の意は、吉野山は、深い山であるが、その吉野山のまだあちらに、家がまあほしいことよ、それがあらば、世の中の憂いと思ふ時の隱場所にせうワイとなり。
（評）到底憂き世と見なして、早手廻しの隱宅穿鑿、大覺の眼より見れば、唯これ、一箇の痴案のみ、さはいへ、境は以て、心をうつす。凡夫は、この詩的方案なかるべからず。

○

世にふればうさこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならして

（釋）○岩のかけ道　和名抄に、棧道を「山のかけみち」とよめり。こゝも、棧道をいへるか。一說に、岩の陰道といへり。さては、かげと濁るべし。○ふみならし　踏み平（ナラ）しなり。
一首の意は、世に、かうして居れば、次第に、憂いことがサ增るワイ、これではかなはぬ故、いつそ、
（八六三）

吉野山の難所をも踏み開いて、奥深く引籠らうぞとなり。

(評)四五句、山ごもりせむといふことを轉義したるにて、婉曲なり。しかも、かく辛き岩のかけ道をも厭はぬに、ます〳〵、世の憂さのはげしきを見せたり。

(八六四)

○

いかならむいはほの中にすまばかは世のうき事は聞えこざらむ

(釋)○いはほの中　岩のたちめぐれる山中をいふ。岩窟の内をいふにはあらず。○かは　かは疑辭。はは添辭。

一首の意は、どのやうなる岩山の中に住むならまあ、この世間の憂い事が、聞えてこぬ事であらうぞとなり。

(評)作者は、一方ならぬ大なる憂き事ある人なるべし。世の常の山住などにては、猶聞えくべく心許なければ、いかならむいはほの中にと、思案にくれたるなり。山の中をいはほの中と轉義したるが面白く、後人の踏襲するところとなれり。

三句、この部の古本に、すまばかもとあり。又、結句、六帖に、たづねこざらむとあり。

○

あしひきの山のまに〳〵隠れなむうき世の中はあるかひもなし

(釋)一首の意は、山のあるについて、どこまでなりとも往つて、隠れてしまはうワイ、なぜなれば、このやうに憂い世の中は、住んで居る詮もないワイとなり。

○

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれるゆきやけなまし

(釋)○うけく　憂くの延言。○ゆきや　雪に、行きをかけたり。

一首の意は、もう〳〵、世の中の憂くあるのに飽きはてたワイ、いつそ、奥山の木の葉に降つてある雪が消ゆるやうに、自分も、其の奥山へ往つて、跡をかき消してしまはうとなり。

(評)厭世のあまり、まづ、奥山の隠處を思ひよせ、次に、木の葉の雪を聯想して、ゆきや消なましの一案を立てたり。秀句仕立ながら、思ひ入りたるところ見えて、あはれなり。消なましは、こゝにては、死に失する意にはあらず。戯説に、行倒となりてしまはむと解けるは、過ぎたり。

おなじもじなき歌

ものゝべのよしな

(八六五)

世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそ絆なりけれ　（八六六）

（釋）おなじもじ云々　一首のうちに、同字なき歌となり。歌の意によりて、こゝに序でたり。一首の意は、世の中の憂い事の見えも聞えもせぬ山の中に這入らうとするには、戀しう思ふ人がサ、存外、その邪魔立するきづなであつたワイとなり。

（評）恩愛の羈絆をいふは常套にして、陳腐なり。

山のほうしの許へつかはしける　　凡河内躬恒

世をすてて山に入る人山にてもなほうき時はいづちゆくらむ

（釋）山のほうし　山住の法師なり。或は、平安の京このかたのならひにて、山は、比叡山をいへるか。家集の詞書には「世を怨みて、山寺にまかる人につかはす」とあり。一首の意は、世の中が憂いとて、山へ引き込む人よ、その山にても、やはり憂い時は、どちらへ行くのであらうぞとなり。

（評）詩としての妙味あるにあらねど、好皮肉、巧語言として存すべき價値あり。家集に、初句、世をうしと、三四の句、山ながら又うき時はとあり。

物思ひける時、いときなきこを見てよめる。

今更に何おひづらむ竹の子のうきふし繁き世とは知らずや

（釋）○うきふし　憂き場合なり。竹の節をかけたり。

一首の意は、生えずともの事を、竹の子が、今更に、何とて生えて來たのであらうぞ、憂い事のある折節のおほい世の中とは知らぬのかどうかとなり。

（評）この稚き子は、わが兒か、人の兒か、いづれにてもあるべし。さて、これを、竹の子に擬へていひはてたり。ふしぎげきも、竹の緣語なり。世も、或は、竹の節を寄せたるか。物思ひける時は、五月の竹の子時分なりしならむ。輕儁にして、玄かも、人生の半面を說明し、人情の機微に接觸し、うたゝ、感愴を深からしむ。作者、時々、かゝる手柄あり。當代の歌仙たるにはぢず。

題しらず　　よみ人しらず

世にふれば言の葉しげき吳竹のうきふし毎にうぐひすぞなく

（釋）一首の意は、世にあれば、人に、何のかのといはるゝ事が多いが、繁つたる竹のふしぐに、怨がなくやうに、その人の言葉の憂い折節ごとに、自分も泣くワイとなり。

（評）譬喩と緣語の修飾とをまじへたる、巧緻に過ぎて、煩瑣に堪へず。

○

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべ　（八六七）

らなり

ある人のいはく、たかつのみこの歌なり。

（釋）○竹のよ　よは節と節との間なり。○はし　半とおなじ。何方へもつかぬにいふ。

一首の意は、木でもない、草でもない竹の節のやうに、どちらつかずの物に、自分の身は、なつてゐまひさうなワイとなり。

（評）上句は、晉の戴凱之の竹譜に、

植之中有名曰竹、不剛不柔、非木非草、云々。

とあるに據れるなるべし。木にも草にもと、兩端をたゝけるが、句法に、姿致あるのみならず、對映の妙ありて、竹のよのはしたなるを歎ずる意、いよ〳〵深し。さて、作者の境遇は、いかなりけむ、左註にいへる高津の皇女は、桓武帝の皇女にして、大同四年六月嵯峨帝の妃となり、幾ばくならずして廢められしこと、續紀に見えたり。後撰集に、この皇女の御歌とて、

なほき木にまがれる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなき

その本文をひかへて詠める歌ざま、相同じ。當時は、漢學隆盛の世なれば、わが國風も、おのづから、かゝるよみ口の行はれけるなるべし。さては、左註の說信ずべきか。密勘に、內親王の身、思ひかけぬ入內をして、又、その本意あるさまにもなかりければ、木にも草にもあらず、はしたなる身とよみ給へるなりといへる、或は然らむ。

（八六八）

○

わが身からうき世の中と歎きつゝ人の爲さへ悲しかるらむ

（釋）○わが身から　からは、よりの意。

一首の意は、自分の身から、憂い世の中ではあると、歎き〳〵して居れ、人は、さうもあるまいのに、何故に、人のうへまで、身につまされて、悲しくあるのであらうワイとなり。

（評）作者は、以て、自家の解嘲となさむとするものか。

おきの國に流されて侍りける時によめる。

たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれに衰へてあまの繩たぎいさりせむとは

（釋）おきの國云々　羈旅歌「わたの原八十島かけてこぎいでぬと」の條下を看よ。○ひな　ひろく、都の外なる國をいふ。田舍なり。○繩たぎ　たぎは手繰ること。○いさり　漁なり。

一首の意は、都にゐる時分に、思ひ寄つたことか、いや、思ひも寄らなかつたワイ、このやうに、遠い田舍に流されたる別の悲みにくづをれて、その日のたつきには、海人の釣繩をたぐつたり、魚など釣つたりせうとはサとなり。

（評）今昔、境遇の劇變は、たゞなるすら、無量の感にうたれぬべし。況や、これは敕勘なり、流人

（八六九）

なり。當時三十七八歳の元氣旺盛なる、さかも、硬骨野狂の名を負へる作者も、いかで、幾多の感慨なかるべき。殊に、名家の子弟として、弱冠より、順調の逕路をのみ踏み來りたれば、一旦、この逆境に臨みては、心膽、俄に沮喪したりしなるべし。下句、海人のさわざをせむとはといふべきを、具象的に轉義したるに、大に、詩味を生ず。原來、燈烟蜃雨、磯臭きあたりに住み馴れたることを、海人の所業を、みづからするやうにいひなせるも、誇張なり。萬葉卷一麻績王が、

うつそみの命ををしみ波にぬれ伊良古が島の玉藻刈りをす

と歌ひ給ひしと、同趣なるを思ふべし。

田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける。

在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ

（八七〇）

（釋）田村の御時云々　田村の御時は、文德帝の御世なること、すでにいへり。事にあたりては、敕勘を蒙るをいふ。津の國の須磨は、攝津國武庫郡の須磨なり。眞淵曰く、今は、いさゝか、御氣色のあしかりけるを、さばし避けて、須磨に籠り居られしなるべし。罪ありて流されしこと、文德

實錄に見えず。この天皇の御在位は、わづか十年が程にて、その間、官位昇進、年々にこそあらね、滯なく見えたりといひ、秋成は、更に、これを敷演して、須磨に避け給ふは、御父阿保親王、攝津守に任ぜられしこと見えたれば、そのよせなどの、猶かしこにありけるにや、業平も、津の國に遊びしことのあるも、いづれ、在原氏の領地ありし故なるべし、今も、菟原の郡打出の里に、御父親王の遺蹟と稱ふる寺院あるによりて、さかしき思はるゝなりといへり。○わくらばに　たまさかにの意。○藻鹽たれつゝ　藻鹽に、鹽垂るをよせたり。藻鹽は、海藻の鹽水より採る鹽なり。海藻を、簀の上に掻き集めて、鹽水を汲みかけて垂る。さて、その鹽の染みつきたる藻を燒きて、水に掻きたれ、上澄を、釜にて煮て、鹽とす。鹽垂るは、もと、その鹽水を垂らすことなるが、轉じて、こゝにいふ如く、淚に濡れそぼつにいひ、又、歎に沈むにいへり。

一首の意は、もし、たまさかにも、問うてくるゝ人もあるならば、その時、貴方は、私が、須磨の浦で、海士のする仕事をして、さほたれて、ひどく難儀をして居ると云うてくだされとなり。

（評）日陰のさすらへ人、今は、誰問ふべきにあらず。さかも、鍾情の昔を忘れぬ人、萬に一もありて問はば、云々と答へよとは、蓋し、假託の言なり。まことは、宮の內なりげる人に、わが現況を報じて、同情を求むるを、その本意とす。想ふに、その人は、わくらばにだに問はざりけるならむ。さるを、餘所げに、とふ人あらばといへる暗刺、わぶと答へよの冷語、骨に徹るを覺ゆ。その人、もし、たゞならぬ關係にてもありしならむには、いよいよ、慚愧に堪へで、天地縫なきをや恨みしならむ。藻鹽たれつゝは、上の歌のあまの繩たぎといへると、その趣、全く相同じき誇張な

（八七一）

り。唐の韋莊の、

若見二青雲舊相識一、爲言流落在二天涯一、

の詩に比して、更に、一段の感愴と、幾層の巧趣とをそなふ。

左近將監とけて侍りける時に、女の、とぶらひにおこせた
りける返事に、よみてつかはしける。

をの〳〵はるかぜ
あま彦の音づれじとぞ今は思ふわれか人かと身をたどる世に

（八七二）

（釋）左近將監とけて云々　左近は左近衞府、將監は、その　判官（三等官）に相當する役にて、從六位上に叙せらるゝを常とす。五位に進み、中には、殿上許さるゝもあり。とけては、解官せられしこと。女は妻。とぶらひには見舞になり。○あま彦の　天彦の字をあつべし。山彦とおなじにて、谺（コダマ）を神視したる名なり。こゝは、音といはむ序なり。集中、貫之の長歌にも、「あま彦の音羽の山と詠まれ、又、貫之集にも散見したり。宣長が、天上の人をいへり、物語どもに、これかれ見えたりといへるはいかが。物語なるは、天人（アマビト）とこそいへ、天びことあるは、なか〳〵誤なり。一首の意は、貴方へも、たよりはすまいとサ、もはや思ふワイ、この頃の不仕合に、當惑のあまり、心も空になつて、自分のからだを、人のか自分のかと、辨へかねて居る時節にサとなり。

（詳）妻女の消息には、久しく、音信なきことをば怨めるふしありしなるべし。さてなむ、その理由を具陳したるなる。蓋し、作者の解官せられしは、喪解（ゲ）にもあらず、病解（ゲ）にもあらず、藤原保則の奏議中に、

前左近將監小野春風、累代將家、驍勇軼レ人、前年、頻遭二讒謗一、免レ官家居、

と見えたれば、讒言の致すところなり。われか人かと、身をたどるまでに欺かれしぞ宜なる。當時のならひ、妻女は、親里に在りて、作者、獨家居せしなるべし。武辨の人にして、是等の言辭あり、歌は、よしとにはあらねど、ゆかしからざるにあらず。初句、新撰和歌に、山彦のとあり。

つかさのとけて侍りける時よめる　平さだぶん
うき世には門（カド）させりとも見えなくになどかわが身のいでがて
にする

（釋）つかさとけて　免官なり。

一首の意は、自分の家こそ、閉門して居れ、この憂い世には、門をさしてあつて、出入のならぬものとも見えもせぬに、なぜまあ、自分の身が、この憂世を遁れて、出家しにくうすることか、さても、合點の行かぬことワイとなり。

（八七三）

（評）失意の極、厭世の念をおこせるものの、とかく執着するところありて、いさぎよく、え思ひ立たざりけらし。さるを、憂世には門させりの一語を假構して、などかと疑問したるを、この詩趣のあるところとす。には、の助辭を味ふに、作者は、閉門して籠り居りしものなるべし。さらば、その司解けたるは、過失などありしならむ。諸註、多く、立身出世しがたきを歎く意とせるは、皮相の見なり。且すでに、上に、憂世とあるからは、出家遁世を願ふ意に見るぞ至當なるべき。後世の、無意味に、うき世をいふとは異れり。

拾遺集雜上に再出したるには、詞書「つかさとられて侍りける時、いもうとの女御の許につかはしける」とあり。げに、事實は、この詞書の如く、妹の女御に愁訴して、その救護を求めけるならむ。年代をおすに、光孝天皇の女御平等子は、この妹の女御か。

（八七四）

○

ありはてぬ命まつまの程ばかりうきごとしげく思はずもがな

（釋）一首の意は、とても、この世に生きどほしにはせられぬ、わづかなる命の終るのを待つあひだのその程ぐらゐ、何卒、憂い事を、多く思はぬやうにしたいワイとなり。

（評）浮生の須臾なること、電光石火の如し。されば、命まつまの程ばかりは、即ち、一生憂きことなしに暮したしと希へるなるべし。上と同時の詠なり。

三句、古本に、程だにもとあるぞよき。

みこの宮のたちはきに侍りけるを、宮仕つかうまつらずとて、とけて侍りける時に、　みやぢのきよき

筑波ねのこのもと毎にたちぞよる春のみやまの陰をこひつゝ

（釋）みこの宮の云々　みこの宮のたちはきは、東宮の帶刀なり。この東宮は、醍醐帝の皇子保明親王（文獻太子）を申す。延喜四年二月立太子、延長元年三月、廿一歳にして薨じ給ひき。帶刀のことは、春下「はる風は花のあたりを云々」の詞書の解を看よ。宮仕つかうまつらずは、帶刀の官にありながら、不奉公なるをいふ。○筑波ね　常陸國新治郡にある山。ねは嶺の上略。○このもと　木の下なり。○春のみやま　春の宮に、深山をかけたり。春の宮は、皇太子、又は、皇太子の座す御所をさしていふ。

一首の意は、筑波山の、ひどく茂つてあるやうに、惠深い方々へ、御わびを頼みにサ、たち寄ることワイ、春宮樣の御蔭を戀ひ慕ひ〳〵申してサとなり。

（評）集中、大歌所の東歌、

つくばねのこのもかのに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

によりて詠めるか。東宮の官人、又は、女房達へおくりて、復職を歎き願へるなるべし。

時なりける人の、にはかに、時なくなりて歎くを見て、みづ

（八七五）

からの、なげきもなく、よろこびもなきことを思ひて、よめる。

（八七六）

清原ふかやぶ

ひかりなき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思もなし

（釋）時なりける云々　時なりけるは、時を得て、權勢のあること。

一首の意は、日の光の當らぬ谷では、春も、餘所の事であるから、花の咲く事もなく、そのかはりに、又、早く、花が散つて、悲しい思もしないワイ、といふが表面の意にて、自分のやうに、本から、御見出しにも與からず、花も咲かぬ身は、あの人の、今度のやうなる歎も無いワイ、といふが裏面の意なり。

（評）結句、これも增しならむと、時を得で沈めるを、みづから慰藉したるなり。官位高きは、日の惠よくあたる高嶺の如し、數ならぬ身は、日影もさゝぬ谷の如し。表裏の二面、各、よく聞えて、諷喩明白なり。巧手。

初句、六帖に、光まつとあり。

かつらに侍りける時に、七條の中宮とはせ給へりける御返りごとに、奉れりける。

伊勢

久方のなかにおひたる里なればひかりをのみぞ頼むべらなる

（釋）かつらに侍りける云々　かつらは、山城國葛野郡桂の里なり。七條の中宮は、昭宣公藤原基經の女にして、溫子と申す。宇多帝の女御なり。醍醐帝卽位の後、尊んで、皇太夫人と爲し、中宮と稱し奉りぬ、延喜七年六月三十六歳にて崩じ給ひき。家集の詞書には、「この女は、これかれいへどきかず、宮仕をのみしてけるに、時のみかど召し仕ひ給ひけり。ようぞ、人の言をきかざりけると、心にも、親なども思ひ渡りけるうちに、孕みにけり。さて、男みこをぞ生み奉りける。わが親みづからも、嬉しと思ひけり。仕うまつりし御息所も、后になり給ひにけり。生みたりける男みこは、桂の宮といふ所におきて、みづからは、后の宮に侍ひけるに、雨のふる日、打詠めてゐたりければ、后の宮のよみて給へりける。

月のうちの桂の人を思ふとて雨に涙のそひてふるらむ

御返しとて、今の歌あり。さて、歌の次に「かくて、みかどおりゐさせ給ひて云々」とあり。文體を案ずるに、勢語に倣ひて作りたるものと見ゆ。事實は、いまだ信ずべからず。○久方の中におひたる里　月中に生ひたる桂といふ名の里の意なり。月桂の故事は、秋上、「久方の月の桂も云々」の條に既出。但、久方は、天象に關する多くのものに冠する枕詞なれば、久方の中にを、必ず、月の中にの意とせむこと覺束なし。眞淵は、中は、月の誤寫ならむといへり。この說に從ふべきが如し。

一首の意は、この里は、月の中に生えてあるといふ桂の里であるから、月の光ばかりをサ、一圖に頼むべきであつたワイ、といふが表面の意にて、自分は、中宮様の御内に成りいでたる者なれ

（八七七）

ば、中樣宮の御餘光を、ひたすら、賴には致しませうと存じますワイ、といふが裏面の意なり。

（八七八）

（評）地名より着想したる諷喩なり。中宮を、月に喩へたるも、桂の緣なめれど、又思ふに、后宮を長秋宮と稱ふること、漢土の故事にて、此方にも、文辭の上にはいふことなれば、これをも、下に思へるか。假令、偶合とせむも、猶妙ならざるにあらず。桂の語をつけずして、廻護し得たるも巧なり。上の歌は、感慨を主とし、これは、當意の巧を主としたれば、詩味に、多少の深淺こそあれ、作者の伎倆に至りては、甲乙を見ず。

二句、六帖に、月のかつらのとあり。意は明らかなり。景樹は、これを執して、本文は、土佐日記に、「久方の月におひたる桂川底なる影もかはらざりけり」とあるを、後人の取入れたるなるべし、紀氏の、いと近く名高き、伊勢の御の歌をとりて詠まれむも、いかゞなりといへり。然れども、里なればと、婉にいへると、桂川と、あらはにいへるとは、既に、相違あり。況や、これは、生ひたるといへるに、多樣の意趣を生ずるをや。意釋を味ひて、この分寸を曉るべし。

きのとしさだが、あはの介にまかりける時に、うまのはなむけせむとて、けふといひおくれりける時に、こゝかしこにまかりありきて、夜ふくるまで見えざりければ、つかはしける。

なりひらの朝臣

今ぞしる苦しきものと人またむ里をばかれずとふべかりけり

（釋）きのとしさだ云々　紀利貞が、阿波の國の介となりて、赴任するにつき、餞別すべければ、今日來れといひやりたるに、利貞は、あちこちあるきまはりて、その日、夜ふけまで待ちたれど、顏出しせざりければ、歌をよみてやれるとなり。利貞の、阿波介に任ぜられたるは、元慶五年二月なり。○かれず　離れずなり。

一首の意は、人を待つは苦しいものといふことを、貴方の、待てども〳〵來ぬにつけて、今サ、始めて知つたワイ、これでは、總体、人を待つであらう所をば、不沙汰をせずに、早く往つて遣るべきであつたワイとなり。

（評）諷刺の妙、殆ど、人をして羞死せしむ。今ぞの一語、實に、骨に徹する冷語なり。

惟喬のみこの許にまかりかよひけるを、かしらおろして、小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとて、まかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。をひて、かのむろにまかりいたりて、をがみけるに、つれ〴〵として、いと物悲しくて、歸りまうできて、よみておく

（八七九）

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは　（八八〇）

（釋）惟喬のみこのもとに云々　かしらおろしては、三代實錄に、「貞觀十四年七月十一日、四品彈正尹惟喬親王、寢ゝ病、頓出家、爲ニ沙門一」とあり。小野は、山城國葛野郡小野郷。むろは庵室なり。この詞書、勢語に、「かくしつゝまうでて仕うまつりけるを、思の外に、御ぐしおろし給ひてけり。む月に、拜み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪、いと高し。しひて、御室にまうでて拜み奉るに、徒然と、いと物悲しくおはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など思ひ聞えけり。さても、侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、えさぶらはで、夕暮に歸るとて」とありて、この歌を擧げたるが、文辭、高妙を極めたり。相比すれば、この集の文の拙處、病處、歷々として數ふべし。想ふに、後人、勢語の文をいろひて、これを書き入れしならむ。景樹も、さなりと論へり。

一首の意は、あまりのことに、ふと忘れては、これは、夢ではないかと思ひますワイ、この深い雪を踏みわけて、かやうの山里にきて、君にお目にかゝらうとは、ほんに思ひも寄つたことか、いや、思ひも寄らぬことでありましたワイとなり。

（評）ふみわけてといへるに、その雪の淺からぬこと暗示せられ、從ひて、その、山里ならむことも推想せらる。さては、これ、賤山かつの住處に堪へたり。なま貴人も、更に立ち舞ひがたき處なるべし。然るに、こゝにして、先帝第一の皇子、あはよくは、儲貳の位にそなはり、遂に、天位をも踐ませ給ふべき君惟喬を、御年二十九の一若冠として見え奉らむこと、人生の有爲轉變のあるが中にも、餘に甚しき出來事ならずや。況や、時はいつぞや、正月なり。世にありし時は、年頭拜賀の賑しさもありけるを、徒然として、雪の中におはします。こゝに、多感なる近臣の士臣業平、參りあはせては、いかに、斷腸に堪へざるべき。その、夢か現かとたどられけむこと、うべなり。要するに、親王が境遇上の變化に着想して、今昔二面の極端を、暗に對映せしめたるが、無量の感慨ある所以なり。二三の句のうつり、思ふ思ひきやの疊語、藕斷えて絲斷えざる趣あり。さはいへ、この種の作は、技巧の、よくするところにあらず。眞情流露、詩美の極處に到達せり。單に、この作者の歌中において、白眉たるのみならず、眞に、千古の絕唱なり。

深草の里にすみ侍りて、京へまうでくとて、そこなりける人に、よみておくりける。

年をへてすみこし里をいでていなばいとど深草野とやなりなむ

（釋）○いとゞ深草　里の名の深草をよせたり。

一首の意は、今、自分が、年久しう住み來つたる、この里を出て去なうならば、たゞさへ、深草の里が、いよ〳〵草深くなつて、野となるであらうかとなり。

（評）あとに住み殘りて居らるゝ貴方のさびしさを、御推察申すの餘意あり。蓋し、官途などに就きての京住居となれるより、しばらく、閑居の軒を並べし深草の里人を驚しゝなるべし。初二の

（八八一）

句、下句の槻染なり。いとゞの一語を、眼目とす。これによりて、もとより、草深く住みなしたりしことも明らかに、野とやなりなむの誇張も、唐突ならず。

二句、伊勢物語塗籠本に、宿をとあり。

かへし　　よみ人しらず

野とならばうづらと鳴きて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

（八八二）

（釋）○うづらと鳴きて　鶉と共に鳴きての意。このとの助辭、雪と散る花などのとの意と見むはおだしからず。○かりに　狩に、假初をよせたり。

一首の意は、貴方のお詞によれば、この里が、野となるまでも、わざ〳〵尋ねて來ては下さらぬ思召と見ゆるが、まこと、野となつたらば、私は、その野に住む鶉と一所に、怨泣に泣いて、月日を送つて待ちませう、さすれば、せめて、狩ぐらゐには、一寸なりとも、貴方はお出でなさらなからうか、いや、お出でなされうと思へばサとなり。

（評）野とやなりなむの一語、料らず、この奇怨を釀す。隣人の口舌、げに縱横なり。在五の君が詩敵たるに愧ぢずと稱すべし。さて、鷹狩は、當時流行の遊伎にして、百敷の大宮人、休沐の暇あれば、卽ち、肥馬輕裘に、郊野をあさり、遂には、雉の產地を味ひわくる人すらありき。されば、こそ、かりにだにやは來ざらむと下待てるなり。うづらを、契沖が、憂を寄せたりといひ、廣

蔭が、憂辛を寄せたりといへるは、共に鑿說なり。又、この贈答を、勢語に、「深草に住みける女を、やう〳〵、飽き方にや思ひけむ、かゝる歌をよみける」として、色めきたる男女の贈答に作りなしたり。例の拘るべからず。

二句、勢語、六帖、ともに、鶉となりてとあり。聞えやすけれど、今は、本文のまゝに據りつ。

結句、六帖、業平集には、人のとあり。

題しらず

我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき

この歌は、ある人、昔、をとこありけるをうなの、をとことはずなりにければ、難波の三津の寺にまかりて、尼になりて、よみて、をとこにつかはせりけるとなむいへる。

（釋）○なには　何に、難波をかく。○うきめ　憂き目に、浮海布（ウキメ）をよす。○みつ　見つに、三津をかく。三津は、難波の御津の名によりたる三津寺をいへり。大福院と號して、今に、大阪にあり。○あま　海人に、尼をよす。

一首の意は、貴方は、私を、何のと、あるかなしになされたことゆゑ、私は、憂い目を見まして、かやうに、難波の三津寺の尼とまでなつてしまひましたワイとなり。

（評）この贈答の口氣を味ひて、事相を斷すれば、げに、左註にいへる如くならむ。眞淵は、いもせ

（八八三）

のことによりてならば、戀の部に入るべしとて、これを否認したれど、この前後、みな、閑居隱遁の詠を擧げたれば、これも、出家遁世のおもき方につきて、こゝに收めしのみ。歌は、緣語仕立の煩しけれど、全體を、過去にいひなしたるが、悔恨の追懷を促すに由ありて、感哀あり。

（八八四）

かへし

難波潟うらむべきまもおもほえずいづくをみつのあまとかはなる

（釋）○うらむ　恨むに、浦見るをよす。○みつ　見つに、三津をかく。○あま　海人に、尼をかく。○かは　かは疑辭、はは嘆辭。

一首の意は、自分は、貴方に、そのやうに恨まれさうなる、夜離（ヨガレ）した事も覺えないワイ、それに、自分の心の、どのやうなる所を見つけて、愛想をつかして、三津寺の尼となつたのか知らぬとなり。

（評）浦を見るべき問もなきに、いづれの所を見るぞといへるをもて、仕立てたるなり。この贈歌に對しては、かく、細やかにいひなすより外なかるべし。

○

いまさらにとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

（釋）○八重葎して　八重葎を以ての意、八重は、多數を意味す。葎は雜草にして、今いふ「カナムグラ」なり。○門させりてへ　てへは、といへの約。

一首の意は、今になつてから、尋ねて下されさうな人があらうとも思はれませぬ、この方は、八重に生え茂つた葎で、門口もさしこめてあるというてくれいとなり。

（評）殆ど忘るばかりにうち絶えたる人の、訪ふべき由の使おこせたるか、或は、言傳などしたらむ返しに、いひやれるならむ。八重葎して門させる誇張は、いよ〳〵、人の、久しく訪はざりしことを反映して、諷刺の妙を見る。

この歌拾遺集戀二に、再出したり。

友だちの久しくまうでこざりけるもとに、よみてつかはしける。　みつね

水の面におふるさ月の浮草のうき事あれやねをたえてこぬ

（釋）○浮草　萍なり。根はあれども、水面に漂へる故に、根のなきやうに、歌にはいひならへり。○あれや　あればやなり。○根を　をは嘆辭。

一首の意は、貴方は、何ぞ、私に對して、浮草の憂いと思し召すことがあるかして、浮草の根の絶えてあるやうに、うち絶えて、近頃は、トントお出がないワイとなり。

（評）さもなくば來給ふべきものをの餘意ありて、人の久濶を諷したるなり。五月の浮草は、折から

（八八五）

の景物を借りたるにて、三句までは、うきといはむ序なること、すでに、萬葉に、

時鳥なくをのうへの卯花のうきことあれや君がきまさぬ（巻八）

怨のかよふ垣根のうの花のうき事あれや君がきまさぬ（巻十）

とあるに同じ。さるを、今一きざみ、根を絶えての比喩を用ゐて、序の道具を取りはやしたるは、蓋し、この時代の風調の異なり。たゞし、内容の主想、既に、作者の物にあらざるを、いかにせむ。

（八八六）

人をとはで、久しうありけるをりに、あひて怨みければ、よめる。

身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

（釋）あひて怨みければ　面曾して、その疎遠を咎めたるなり。て文字、一本によりて補ひつ。

一首の意は、自分は、不斷お尋したいとばかり思うてをるが、今に、御無沙汰してをるところを見れば、あの心奴が、ゝかく、餘所事に紛れて、この身を打捨てて、わきへ往つたのであらうか知らぬ、まことに、思の外のものは、あの心奴でありましたワイとなり。

（評）作者狡猾、心外なる奴は心と空恍けて、心と、思ふとの體用を、しばらく、別箇の物に取成したる沒理想を、この詩味のあるところとす。

二句、古本に、いにやとある、妥貼にしてよろし。

むねをかのおほよりが越の國よりまうできたりける時に、雪のふりけるを見て、おのが思は、この雪の如くなむつもれるといひけるをりによめる。

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば

（釋）おのが思は　わが、君を思ふ思はの意。宗頼の言なり。

一首の意は、お詞のほとり、貴方の思が、この雪のやうに積ることならば、それは、とても、頼みにはなりませぬワイ、その故は、貴方の思も、やはり、この雪のやうに、春からのちは、もうあるまいと存ずればサとなり。

（評）かやうの座興的の歌は、永久不變の味をかけども、その場においては、出で榮えするものなり。

後撰集戀六に、兼輔朝臣の契りける女の歌とて、

白雪のつもる思も頼まれず春よりのちはあらじと思へば

とあるは、この歌を、すこし變へたるにや。初二の句、おのづから、剛柔の差ありて、男女の性格あらはれたり。

かへし

宗岳大頼

（八八七）

君をのみ思ひこし路の白山はいつかは雪のきゆるときある　（八八八）

（釋）○思ひこし路　思ひ來しに、越路をかく。

一首の意は、いや〳〵、雪も雪によること、貴方の事ばかり思うて、はる〴〵と來る北國街道の白山は、何時まあ、雪の消ゆる時があるか、あの雪は、春でも何時でも、消えは致さぬとなり。

（評）わが思も、かくの如しの餘意あり。

結句、古本にきゆる時のあるとあり。

こしなりける人につかはしける　きのつらゆき

思ひやる越のしら山しらねどもひと夜も夢にこえぬ夜ぞなき

（釋）○思ひやる　想像すること、こゝは、排悶の意にあらず。

一首の意は、貴方の事を、不斷、都から思ひやつて居る故に、かの北國の白山は、どのやうなる山かは知らぬが、一夜さたりとも、夢に越えぬ夜はサないワイとなり。

（評）夢中の山川をいふことは、詩に、あまた、例ありて、あながち、作者の物にあらず。たゞ、筆路の暢達自在なるを、多とすべし。しら山しらねども、一夜も、夜ぞなどの疊語、聲調の圓滑なる所以なるべし。

古本に、二句、越の白嶺の、四句、夢のとあり。

題しらず　よみ人しらず

いざこゝにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

（釋）○菅原や伏見の里　大和國添下郡。山城の紀伊郡にも、伏見の里あれど、この歌には關はらず。

一首の意は、どれ、料簡をきめて、こゝに、自分の一生は、住んでくらさうぞ、この菅原の伏見の里は、よい所であるに、今もし、自分まで、餘所へ移つて行けば、荒れてしまうであらう事がまあ、をしいワイとなり。

（評）菅原の里は、萬葉に、

大きうみの水底ふかく思ひつゝ裳ひきならしゝ菅原の里（卷二十）

と詠みて、奈良時代には、西の京なれば、宮人等の、常に立馴らしゝ所なり。一旦、延曆に、遷都の擧あるや、世にある人、又は、その蔭を慕むほどの人は、皆、われ勝に、新都に移り住みて、故里は、見るがうちに、淺茅が原とぞ荒れ行くなる。されば、せめて、我なりとも殘りとゞまりて、殘年を、こゝにして終へむとなり。その實は、作者が、宮仕など辭して、年老い、世に餘された る憤を託せるものならむ。格調蒼古にして、神韻悠長なり。春上「故里となりにし奈良の都にも」の詠と共に、この舊都に寄懷せるものの双璧なり。

○

わが庵は三輪の山本こひしくばとぶらひきませ杉たてる門　（八八九）

（釋）○三輪の山　大和國城上郡。麓に、大物主神を祀れる大神神社あり。

一首の意は、自分の家は、三輪の山の麓である、逢ひたくば、尋ねてお出でなされ、杉の立つてをる門が、それであるワイとなり。

（八九〇）

（評）三輪山のほとりに、跡を晦まし、世を避けたる人の、流石に思ひ戀しきことありて、親しき友遂にいひおくりし詠なるべし。そも、三輪の神山は、林木鬱蒼として、檜杉など多かるところ、その老杉を利用して、「わが門のしるしの杉と取做したるを、趣向とす。造句簡勁にして、格調、また高し。景樹が、上句は、いまだ、所も知らぬ人に示したるなり、されば、友達の交にあらずといへるは、事體を、よく察せざる僻論のみ、隱逸、みづから喜ぶの士、豈に、一々、住處を報知する恐をなさむや。思ふべし。六帖に、三輪の大神の詠とあるは、もとより妄なり。初句、古來風體抄に、わが宿はとあり。俊頼口傳に、「こひしくばとぶらひきませ千早ぶる三輪の山本杉たてたる門」とあるは、こを誤り傳へたるならむ。

わがいほは都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

きせん法師

（釋）○たつみ　辰巳にて、東南の方位。○しかぞ　然ぞの意。○世をうぢ山　世を憂といふに、宇治山をかく。山は、山城國宇治郡、今、喜撰が嶽といふ。鴨長明の無名抄に、「喜撰が住みける迹あり。堂はなけれど、礎など定かにあり」といへるこれなり。

一首の意は、自分の庵室は、京から、辰巳に當る所で、世が憂いとて籠る宇治山であると、人はいふのである、しかも、自分は、かくの通りサ、憂いとも思はず、氣樂に住んで居るワイとなり。

（評）厭世敎の眞言僧が、却つて、樂天觀を述べたるは、大に詩的なり。されど、續けがら、更にをかしからず。貫之が、これを評して、「詞かすかにして、はじめをはりたしかならず。いはば、秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し」といへるは、古來、諸家の首肯するところなり。

六帖に、初句、わが宿は、結句、いふらむとあり。又、二條關白記に、人毛とあるを、近藤芳樹は執したれど、なほ、本文のまゝをよしとす。

あれにけりあはれ幾世の宿なれやすみけむ人の音づれもせぬ

よみ人しらず

（釋）○宿なれや　宿なればやの意。

一首の意は、あゝ、この家は荒れはてたワイ、一體、このやうにして、何年になる家であればかして、昔住んだであらう人の、たえて、訪ひ音づれもせぬことぞとなり。

（評）廢宅を詠せしなり。住み捨てたれども、程經へざるは、その人の訪ひ音づれ、或は、預りのをのこなどありて、いたくは荒さぬものなれば、これは、數多の星霜を閱したる宿ならむと思ひやれるなり。初句にて切れたるは、この集にはじまれる體製なり。

六帖に、作者を、伊勢とあり。この歌、伊勢物語にも、詞を作りて出したれば、勢語を、伊勢の作と思へる人の、六帖のにも、その名を掲げしならむ。伊勢集にも出でたり。

（八九一）

奈良へまかりける時に、あれたる家に、女の、琴ひきけるを
きゝて、よみて入れたりける。　よしみねのむねさだ

わび人の住むべき宿と見るなべになげき加はる琴の音ぞする　（八九二）

（釋）よみて入れたりける　歌を詠みて、その家のうちにいひ入れたるなり。
一首の意は、世にありわびたる人の住みさうなる家であるがと見れば、それにつれてまた、その歎きの添ふ琴の音がサするワイとなり。
（評）御境遇は、深くお察し申すと、同情したるなり。琴の音に、歎きの加はることは、いにしへよりいふことにて、萬葉にも、
琴とればなげき先だつけだしくも琴の下樋（シタヒ）に妻やこもれる（卷七）
わがせこが琴とるなべに常人のいふなげきしもいやしきますも（卷十八）
と詠めり。

初瀬にまうづる道に、奈良の京（ミヤコ）にやどれりける時よめる　二條

人ふるす里をいとひてこしかども奈良の都もうき名なりけり

（釋）初瀬にまうづる　大和の長谷寺に詣づるなり。

一首の意は、珍しい人ばかりもてはやして、自分などは飽かれて、古物にされる所を、いやに思うて出てはきたれども、この奈良の京も、古里といふによつて、自分の爲には、憂い名であつたワイとなり。
（評）思ある身には、聯想の惹かるゝものは、名を聞くも厭はしきは常なり。想ふに、作者、人にふるされたる事ありて、その憂さ晴しに、初瀬詣を企てたりしならむ。下句の措辭、簡約を極む。

だいきらず　よみ人しらず

世の中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞ宿と定む

（釋）○わがならむ　わが物ならむの略。
一首の意は、この世の中は、假の世であるゆゑ、どれが一つ、これぞというて、自分の物であらうぞ、自分の物とては無いワイ、それ故、住居も、何處であらうが、行きとまつた所をサ、自分は、宿ときめて居るワイとなり。
（評）行雲流水、行脚の覺悟を述べたるにて、佛者が常套の文句なり。作者は僧侶なるべし。

○

逢坂のあらしの風は寒けれどゆくへ知らねばわびつゝぞぬる　（八九三）

(釋)○ゆくへ　行方なり。

一首の意は、この逢坂山の嵐の風は、ひどく寒いけれど、さればとて、さして、外に行くべき方も知らぬゆゑ、難儀しながらもサ、辛棒して、こゝに寢るワイとなり。

(評)逢坂山に住み初めたる人の詠めるなるべし。馴れぬ夜嵐の、肩に寒くして、夢も成りがたきさまなり。今昔物語に、蟬丸の歌とて、

逢坂の關のあらしのはけしきにしひてぞねたる世をすぐすとて

とあるは、或は、この下句を作りかへて、しか傳へしならむか。たゞし、本文のは、理をいふこと、餘にきはやかにして、今昔のに及はず。

六帖に、三句、はやけれど、結句、わびつゝぞふるとあり。

○

風のうへにありか定めぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべらなり

(八九四)

(釋)一首の意は、風にふき上げられて、居所の定まらぬ塵のやうに、輕々しいこの身は、丁度、その塵のやうに、何處へ、どうなつて行くか、行先もわからずなつてしまひさうな樣子だワイとなり。

(評)想はさのみならねど、風前の塵のいひなし、極めて雅馴なり。

家をうりてよめる　伊勢

あすか川淵にもあらぬわが宿もせに變りゆく物にぞありける

(釋)○せに　瀬ににに、錢をよす。

一首の意は、飛鳥川の淵こそ、淺瀬に變る物とは聞き及んで居れ、その飛鳥川の淵でもない自分のこの家も、思ひ寄らず、瀬にかはつて行く物でサあつたワイ、その瀬にといふのは、實は、錢のことサとなり。

(評)有爲の轉變を嘆ずる際にも、猶、錢に代るの洒落あるは、蓋し、この御の持前なり。古來の註家、皆、この御の零落のきはみ、家を賣りたるものとせり。されど、當時、この御を寵幸ありし宇多上皇もましましに、さばかりに衰へたるをも知らず顏に過し給はむことといかゞ。況や、勅撰の集に、その名を署して擧げむこと、且は、君の過ちを擧げ、且は、作者が辱をあらはすに似たらずや。よりて想ふに、こは、他に、さるべき理由ありて、家を讓りしなるべし。

初句、古本に、わが宿はとあり。

つくしに侍りける時にまかり通ひつゝ、碁うちける人の許に、京に歸りまうできてつかはしける。　きの友のり

故里は見しごともあらず斧の柄のくちし處ぞ戀しかりける

(八九五)

（釋）○見しごと　ごとは如くなり。碁をいふ。○斧の柄のくちし　爛柯の故事なり。書言故事に、「晉王質、代木到信安石室山、見二老叟圍棋、與質一物、如棗核、含之不覺飢、看棋未終、視斧柯已爛、歸無復舊時人」とあり。述異記には、老叟を、童子とせり。

（八九六）

一首の意は、久しぶりに歸つて見れば、京の故郷は、何もかも、模樣が變つて、以前見たやうにもなく、知らぬ土地に來たやうであるワイ、それ故、却つて、故郷でも無い、貴方と碁を打つて、何事も忘れて、面白く暮した所がサ、戀しうあつたワイとなり。

（評）王質の境遇を、われに利用して、今の感想を詠めり。作者の、筑紫にありしは、國衙の小吏たりし折なるべし。さては、歸期、限あり。見しごともあらずとまで、故郷の變りはてむことあるべくもなし。蓋し、しか誇張して、斧の柄を取出でたるが、その碁客に對する挨拶なり。見しごとといひて、爛柯の故事を含ませるは、この頃行はれたりしことと見えて、貫之も、

見しごともあらずもある哉故郷は花の色のみあせずぞありける

と詠めり。

女ともだちと物語して、わかれてのちに、つかはしける。

みちのく

あかざりし袖の中にや入りにけむわがたましひのなき心ちする

（釋）一首の意は、私の魂は、殘り多く思うて別れたる、貴方の袖の中に這入つてしまうたのであらうか、貴方に別れてから、うか〳〵として、魂が、こゝに無いやうな心持がしますワイとなり。

（評）想は、萬葉集卷四に、

わがせこが著せる衣の針目おちず入りにけらしなわがこゝろさへ

とあるに同じくて、これはいひ過ぎたれば、含蓄の味、やゝ乏し。

寛平の御時に、もろこしのはうぐわんに召されて侍りける時に、東宮のさぶらひにて、をのこども、酒たうべけるついでに、よみ侍りける。

ふぢはらのたゞふさ

なよ竹のよ長きうへに初霜のおきゐて物をおもふ頃かな

（釋）寛平の御時云々　扶桑略記に、寛平六年八月二十一日、遣唐使の詔ありしこと見えたり。但、こは、派遣のあらましのみにてやみたりき。もろこしのはうぐわんは、遣唐使の判官なり。遣唐使には、大使、副使、判官、主典あり。東宮のさぶらひは春宮坊の侍所なり。○なよ竹の　なよ竹は、長節（ナガヨ）竹の義ならむ。和名抄に、長間笋を、長きを寄せたりゝ。○おき　置きにゝ起きをかく。一首の意は、嫋竹の節の長いうへに、初霜がおくこの頃、夜の長いうへに、寢もせずに起きて居て、遠方へ行く別のことについて、物思をすることよとなり。

（八九七）

（評）今昔物語に、敦忠の中納言が「殿守の伴の御奴心あらばこの春ばかり朝清めすな」の名歌詠まれたる時、小野宮の實頼の大臣が、そのあへしらひに、この歌を誦せられたること見えたり。さばかり宜しとも思はれぬを、いかなる故かありけむ。

題しらず　　よみ人しらず

（八九八）

風ふけばおきつ白浪たつ田山よはにや君がひとり越ゆらむ

ある人、この歌は、むかし、やまとの國なりける人のむすめに、ある人すみわたりける。この女、おやもなくなりて、家もわろくなりゆくあひだ、この男かふちのくにに、人をあひしりて、かよひつゝ、かれやうになりゆきけり。さりけれども、つらげなるけしきも見えで、かふちへいくごとに、をとこの心のごとくにしつゝ、いだしやりければ、あやしと思ひて、もし、なきまに、ことごころもやあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜、かふちへいくまねにて、せんざいのなかにかくれて見ければ、夜ふくるまで、琴をかきならしつゝ、うちなげきて、この歌をよみてねにければ、これをきゝて、それよりまた、ほかへもまからずなりにけり、となむいひつたへたる。

（釋）○立田山　大和國平群郡大和川の上流に沿ひたる龍瀬越なり。そこなる立野といふに、立田彦立田姫の神祠あり。○左註、かれやうは、離れ方。せんざいは前栽にて、庭前の植込なり。一首の意は、風がふけば、沖の白浪は立つ事であるが、その立つといふ名の立田山を、時もあらうに、よる夜中に、君が、只一人、越えてお出でなさるであらうかとなり。

（評）さても案ぜらるゝことかなの餘意あり。元來、立田山は、神武紀に、

赴龍田而其路狹嶮、人不得並行、

とあれば、嶮岨にして、豈だに歩み苦しく、心細かりぬべき山越なるべし。さるを、いかで夜はと思ひやれる、婦人のやさしき情致見えたり。初二句の序は、

わたの底沖つしら浪たつ田山いつか越えなむ妹があたり見む（萬葉二）

と同一に、構想はまた、

二人行けどゆき過ぎがたき秋山をいかでか君が獨こゆらむ（萬葉二）

朝霧にぬれにしころもほさずして一人や君が山路こゆらむ（同九）

玉かつま島くま山の夕ぐれにひとりか君が山路こゆらむ（同十二）

と符合す。いづれ、これらを撮合して作れるならむも、おのづから、別趣をそなへて、千古不磨の調を成せるは、老手と稱すべし。又、白波を、白波綠林の意として、立田山に、盜人を出したる俗解あり。滑稽といふべし。

結句、六帖、新撰和歌、金玉集等に、ゆくらむとあるは、味あさし。又、六帖に、作者、かぐ山の花の子とあり。據あるにや。

○

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつ田の山にをりはへてなく

（八九九）

(釋)○たがみそぎ云々　誰が禊して放したるゆふつけ鳥かの意。ゆふつけ鳥の、鶏なることは、戀一「あふ坂のゆふつけ鳥はわが如く云々」の條にいへるが如し。但、この歌に、たがみそぎとあるを、思へば、あながち、世の中騒しき時の公の祓のみにはあらざるべし。箇人と雖も、おのが罪科をこのものに負せて、禊祓をなし、さて、神に奉りしにや。社頭に、鳥居のあるも、この習より出でたるなめり。○から衣　たつといはむ枕詞。

一首の意は、たれが祓をして、放したる庭鳥であるかしらぬ、この立田山に、長く續けて、頻に鳴くワイとなり。

(評)立田山に、鶏の鳴くことのふさはしからぬを咎むる勿れ。作者も、はやく、これをいぶかしみて、一度は聞き咎めつるなり。しかし、立田の神垣あることに心付きて、たがみそぎゆふつけ鳥かと思ひやれるものぞ。

結句、六帖に、たちかへり鳴く、猿丸集に、うちはぶきなくとあり。

忘られむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへも知らぬ迹をとゞむる

(釋)○迹をとゞむる　濱千鳥の迹は、文字をいへり。昔、支那に、黄帝の時、蒼頡、鳥迹の文を見て、字を作りし事、淮南子、呂氏春秋、史記等に見えたり。

一首の意は、のち〳〵、人に忘られう時に、これを見て思ひ出してもらはうと思うてサ、丁度、濱千鳥が、飛んで行き方も知らぬのに、砂に、足迹を殘すやうに、鳥の迹と、世にいふ手迹を、ろくに書き方も知らぬのに　きとめておくワイとなり。

(評)身後の爲に、何か書きおく時の詠なるべし。ゆくへも知らぬ跡は、文字の拙くて、筆の行き方も知らぬ意を、千鳥のうへにていひはてたるなり。

貞觀の御時、萬葉集は、いつばかり作れるぞと問はせ給ひければ、よみて奉りける。　ふんやのありすゑ

神無月時雨ふりおける楢の葉の名におふ宮のふることぞこれ

(釋)貞觀は、清和帝の年號、その御時、萬葉集は、何時頃作れるぞとの御尋ありしなり。萬葉集のことは、序文のところにていへり。○ふることぞ　古言なり。○ならの葉の名におふ宮　楢(ナラ)といふ名を負ひ持てる宮の意。

一首の意は、十月頃の時雨が降りたまる楢の葉の、その奈良といふ名のついたる宮の御時代に出來ましたる、舊い調の集がサ、これ、この萬葉集で御座りますとなり。

(評)奈良時代の詞藻は、早くも、世に忘られて、清和帝の頃は、その出來の時代すら覺束なくなれるは、蓋し、弘仁、天長の厄運に際會したるが故ならむ。もとより、萬葉集は、平城帝以前のものなれども、撰者貫之が、この集の序文に書ける趣を以て推せば、この奈良の宮も、平城帝の代の意にて採りたるものなること必せり。時代の如何はとにかく、筆鋒犀利にして、叙述の詩的なるは喜ぶべし。上句の序、時雨の名殘の、楢の枯葉にたまれる、神無月の即景見るが如く、得易からざる好句なり。

寛平の御時、歌奉りけるついでに奉りける。　　大江千里

蘆たづのひとりおくれてなく聲は雲のうへまで聞えつがなむ

（九〇二）

（釋）○聞えつがなむ　段々に、先へと聞えゆくを、聞え繼ぐといふなり。

一首の意は、芦邊の友鶴が、皆立つたる中に、一羽おくれて鳴く聲は、雲のうへまで聞えてほしい、といふが表面の意にて、他人は、皆、官位昇進せらるゝに、われ一人後れて歎いて居る聲は、お上のお耳にまで達してほしいワイ、といふが裏面の意なり。

（評）詠歌を召されたる折ならむ、その序に、歌もて愁へ申ししなり。諷喩を用ゐたるは、かゝる場合に、最も適當したる裁製ならむ。下句は、詩經に、

鶴鳴二于九皐一、聲聽二于天一、

とあるによりて、詠めり。作者は、流石に、家の子なり、その句、多く來歷あり。

六帖には、作者、千古とあり、

人しれず思ふこゝろははる霞たち出て君が目にも見えなむ　　ふぢはらのかちおん

（釋）○春霞　たちといはむ序。

一首の意は、人には知られず、ひそかに、わが望み願ふこの心は、春霞のやうに立ちあらはれて、お上のお目にもとまつてほしいワイとなり。

歌めしける時に、奉るとて、よみて、奥にかきつけて奉りける。　　伊勢

山川のおとにのみきく百敷をみをはやながら見る由もがな

（釋）○百敷を　百敷は百磯城にて、宮の枕詞なり。大宮所は、あまたの石垣築き固めたればいふ。

然るに、こゝは、百敷を、直に、宮のことに轉用したり。○みをはやながら　身を、以前のまゝながらにしての意。はやは早くなり。水脈早を寄せたり。

一首の意は、山川は、音が高くて、水脈の早いものである、その山川のやうに、音にばかり、只今は承つて居る御所の御有樣を、私が、宮仕を致して居りましたる以前の身で、今も參つて、拜見したいと存じますとなり。

（評）この御、七條の后の宮の女房として、はた、寵幸渥き更衣として、宇多帝の後宮にありし間は、何の思ふ事もなくてのみありけらし。今は、代も移り、時もなくなりて、わびしげにかき籠れる里居の徒然には、昔の榮華の夢を追想せざらむやは。みをはやながらの感ある、偶然ならず。しかし、詞は、例の刻琢に過ぐ。

（九〇三）

古今和歌集卷第十九

雜體

長歌

題しらず　よみ人しらず

あふことの、まれなる色に、おもひそめ、わが身はつねに、
あまぐもの、晴るゝ時なく、富士のねの、燃えつゝとはに、
おもへども、逢ふ事かたし、なにしかも、人をうらみむ、
わたつみの、沖をふかめて、おもひてし、おもひは今は、
いたづらに、なりぬべらなり、ゆく水の、絶ゆる時なく、
かくなわに、おもひみだれて、ふるゆきの、けなばけぬべく、
おもへども、えぶの身なれば、なほやまず、おもひはふかし、
あしひきの、山したみづの、こがくれて、たぎつこゝろを、

たれにかも、相かたらはむ、色にいでば、人ありぬべみ、
すみぞめの、ゆふべになれば、ひとりゐて、あはれ〳〵と、
歎きあまり、せむすべなみに、庭に出でて、たちやすらへば、
ゐろたへの、ころもの袖に、おく露の、けなばけぬべく、
おもへども、なほ歎かれぬ、春がすみ、よそにも人に、
あはれと思へば、

（九〇六）

（釋）雜體　ザッテイと讀む。この卷には、長歌、旋頭歌、及び、短歌の一部なる誹諧歌の諸體を收めたれば、くさ〴〵の體と題せるなり。上なる雜歌と混すべからず。又、本卷の歌は、本集中の糟粕ともいふべく、殆ど、細評に値せず。故に煩をはぶきて、多くは略しつ。○長歌　古本、短歌とあれど、その歌は長歌なれば、誤なることうつなし。

○稀なる色　色は色彩の意と、色情とをかねたり。○思ひそめ　思ひ初めしことを、染むるにより。○天雲の○富士の根の　ともに枕詞。○とはに　常になり。○わたつみの　渡津海の如くの意。○沖を深めて　心の奥を深めての譬喩。○行く水の○かくなわに　ともに枕詞。かくなわは、いにしへの唐果子（カラクダモノ）なり。和名抄に、「結果。形如結緒（ムスビコヽニモ）、此間亦有之、和名、加久之阿和」と見えたり。顯註に、「唐果子の中に、とかくちがへたる物の透垣（スイガキ）などのやうに亂れて製りたる油物なり」

とあり。されば、かく繩の如くに亂るゝ意なり。○ふる雪の　枕詞。○えぶの身　閻浮（エンブ）の身なり。閻浮は、佛語にて、人界をいふ。この世の人間の身なれば、思はじと思へどもかなはずなとり。えぶを、崇德院の御本に、てふとあるに據る說は采らず。○あしひきの山下水の木がくれてたぎつ　ひそかに、思にたぎるといはむ譬喩。戀一、「足引の山下水の木隱れてたぎつ心をせきぞかねつる」に據れるか。○墨染の　枕詞。○立休らへば　躊躇すること。○白たへの○おく露の○春がすみ　ともに枕詞。

（評）人を恨みむの句、上下に續かず。思といふ語九箇所、思へどもと續きたるが三箇所、あふことと續きたるが二箇所、その他、同意の重複もあり、ふる雪の消なば消ぬべく、おく露の消なば消ぬべくは、わざとの疊句にして、對揚せしめたるならむとも思はるれども、それも覺束なく、殆ど、蕪雜、章を成さず。景樹は、或は、二首混同したるならむ、足引の山下水云々より切離して見れば、めでたき長歌なりといへり。六帖には、古き長歌とて、これを擧げたり。誠に、平安の京となりての古製なるべく、その五七の格調の亂れは、僅に二箇所あるのみにして、しかも、語句の今調なるは、仁明帝の代に奉れる興福寺の僧徒等の長歌のさしつぎと見べきなり。

ふる歌奉りし時のもくろくのながうた　つらゆき

ちはやぶる、神のみよより、くれ竹の、よゝにも絶えず、
あま彦の、音羽のやまの、春がすみ、思ひみだれて、

（九〇七）

さみだれの、そらもとゞろに、きよふけて、山ほとゝぎす、
鳴くごとに、たれも寢覺めて、からにしき、たつたの山の、
もみぢばを、見てのみしのぶ、かみなづき、しぐれ〳〵て、
冬の夜の、庭もはだれに、ふる雪の、なほ消えかへり、
としごとに、ときにつけつゝ、あはれてふ、ことをいひつゝ、
君をめみ、千代にといはふ、世の人の、思ひするがの、
ふじのねの、もゆるおもひを、あかずして、わかるゝなみだ、
藤ごろも、おれるこゝろも、やちくさの、言の葉ごとに、
すべらぎの、おほせかしこみ、まき〳〵の、中につくすと、
いせの海の、浦のあほがひ、ひろひ集め、とれりとすれど、
たまのをの、みじかきこゝろ、思ひあへず、なほあらたまの、
年をへて、大宮にのみ、ひさかたの、ひるよるわかず、
つかふとて、かへりみもせぬ、わが宿の、あのぶ草おふる、

板間あらみ、ふる春雨の、もりやしぬらむ、

（釋）ふる歌奉りし時　序に、「萬葉集に入らぬ古き歌を奉らしめ給ふ」とあり。もくろくは目錄にて、その目じるしなる詞をよみつらぬたる長歌なり。○ちはやぶる○くれ竹の○あま彦の　ともに枕詞。○音羽の山の春がすみ　思ひ亂れての亂れへかゝる序にて、春上、「春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ亂るべらなれ」に據る。○さみだれの云々　夏、「五月雨の空もとゞろに時鳥何をうしとか夜たゞ鳴くらむ」に據る。○唐にしき云々　唐にしきは、立田の枕詞。秋下「立田川紅葉亂れて流るめり」、又、同、「戀しくば見てもしのばむもみぢ葉を」などに據る。○神無月しぐれ〳〵て　冬、「龍田川錦おりかく神無月時雨のあめを經緯にして」による。○冬の夜の庭もはたれに云々　冬、「今よりはつぎて降らなむわが宿の薄おしなみふれる白雪」、同、「白雪のふりて積れる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ」などを思へるか。○君をのみ云々　賀、「君が代は千代に八千代にさゞれ石の」、同、「鹽の山さし出の磯になく千鳥君が御代をば八千代とぞなく」に據る。○思するがの云々　戀一、「人しれぬ思を常にするがなる富士の山こそ」に據る。○あかずして云々　離別、「あかずして別るゝ涙瀧にそふ」に據る。○ふち衣おれる心　哀傷、「藤衣はつるゝ糸は」に據る。○やちぐさ　八千種なり。○つくすと　盡くすとての意。○伊勢の海の浦の汐貝　ひろひ集めの序。汐貝は、汐海の貝どもをいふ。○玉の緒の　みじかきの枕詞。○みじかき心　才の足らざる心の意。○思ひあへず　わきまへがたきをいふ。○あら玉の　年の枕詞。○ひさかたの

畫、よるの枕に用ゐたり。顯註に、日の出づるも暮るゝも、空を離れぬことの由にてよめりといへり。○しのぶ草　垣衣なり。○板間あらみ　板間疎みなり。板は、屋を葺きたる板なり。○もりやしぬらむ　雨の漏るに、よき歌のもるゝを寄す。

（評）千早振云々は、まづ、歌の來歴をいひ、あま彦の云々は春、さみだれの云々は夏、唐にしき云々は秋、神無月云々は冬と、四季を擧げて、時につけつゝ云々の句にて一括し、君をのみ云々は賀、世の人の云々は悲、あかずして別るゝは、離別に羈旅をかね、ふぢ衣は哀傷、やちぐさの言の葉に物名、雜、雜體、大歌所の歌などをかね、すべらきの云々よりは、勅命を畏みて、撰著に從事し、つとめて、よき歌を網羅する積りなれど、われ等が短才にては、良否を思ひあへずして、洩れたるやあらむといひて、年を越えて、宮中の昭陽舍に詰め切りにて撰びたるが、春雨のふる頃にまで及べる由を含めたり。序に、延喜五年四月とあるは、最後の完成にて、脫稿のうへ、目錄をそへて奉れるは、その年の二三月の交なりけむ。

ふるうたにくはへてたてまつれるながうた　壬生忠岑

くれたけの、よゝのふること、なかりせば、伊香保のぬまの、いかにして、おもふこゝろを、のばへまし、あはれむかしへ、ありきてふ、人まろこそは、うれしけれ、身はしもながら、ことのはを、あまつそらまで、きこえあげ、するの世までの、あととなし、今もおほせの、ちりの身に、つもれることを、くだれるは、ちりにつげとや、とはるらむ、これをおもへば、けだものの、雲にほえけむ、おもほえず、ひとつこゝろぞ、こゝちして、ちゞのなさけも、かくはあれども、てるひかり、ちかきまもりの、ほこらしき　いにしへも、くすりけがせる　身なりしを、たれかは秋の、くるかたに、あざむきいでて、みかきもり、とのへもる身の、みかきもり、をさ〳〵しくも、おもほえず、こゝのかさねの、中にては、あらしの風も、きかざりき、今は野山し、ちかければ、春はかすみに、たなびかれ、夏はうつせみ、なきくらし、あきはしぐれに、袖をかし、冬は霜にぞ、せめらるゝ、かゝるわびしき、身ながらに、つもれる年を、しるせれば、いつゝのむつに、なりにけり、これにそはれる、わたくしの、老のかずさへ、

やよければ、身はいやしくて、年がたき、ことのくるしさ、
かくしつゝ、ながらの橋の、ながらへて、難波のうらに、
立つなみの、波のゑわにや、おほゝれむ、さすがにいのち、
をしければ、こしの國なる、ゑら山の、かしらは白く、
なりぬとも、おとはの瀧の、おとに聞く、老いず死なずの、
くすりもが、君が八千代を、若えつゝ見む、

（九二二）

君が代にあふ阪山のいはし水木がくれたりと思ひけるかな

（釋）ふる歌云々　これも、上のとおなじ時にて、添へて奉れるなり。○くれ竹の　枕詞。○ふること　古言なり。○伊香保の沼　上野國群馬郡、今の榛名湖それなるべし。こゝは、いかにしての枕詞。○のばへ　述べの延言。○むかしへ　昔方なり。いにしへと同じ。○人麻呂　柿本人麻呂、飛鳥藤原の宮の代の人にして、官五位に至らず。○玄もながら　下官ながらの意。○あまつ空　大宮の内を譬ふ。○あと　例なり。○今もおほせの云々　いにしへ、人麻呂の歌を召しけるにつきて、今も、我が徒に、歌奉れの仰言の下れるは、かの人麻呂の例に繼げとやとなり。塵につぐは、文選に、「遙々播清塵清塵竟誰嗣」とありて、古き迹をまなぶを、繼塵といふなり。但、人丸の歌召しけること物に見えず。○塵の身　塵の如き身にて、輕きいやしき身なるをいふ。○つ

もれること　積れる言にて、塵の寄せなり。○いにしへも藥けがせる　この二句、もとのになし。六帖、及び、忠岑集によりて補ひつ。神仙傳に、淮南王劉安が、仙藥を服して登仙せし事をいへるところに、「安、臨去時、餘藥器還在中庭、鷄犬舐啄之、盡得昇天、故鷄鳴天上、犬吠雲中」とあり。獸などの仙藥を舐めたるなれば、けがせるといへり。○ひとつ心ぞ云々　俗に一心にといふに似たり。こゝは、撰者の數に入りしを喜び誇らへるなり。○てるひかり　天子を譬へ奉る。○近きまもり　近衛なり。作者は、左近衛の番長なりき。○秋のくる方に云々　秋のくる方は、西なり。作者、この時、左近衛の番長より、右衛門の府生に轉任したりき。而して、衛府の陣屋は、すべて、左は東、右は西なるより、東西の方位を以ていへり。さて、こは順任にして、左遷にはあらねど、大御身に近づき奉る近衛の職を去りたるを、不本意のやうにいひなして、あざむきいでてといへり。○みかきもり云々　元來宮城の警衛は、その禁内を近衛　中郭を兵衛、外郭を衛門府とやうに分擔せり。されば、右衛門の府生たる作者は、外郭の御垣を守るを職とす。故に、とのへもる身の御垣守といへり。とのへは外の重にて、外郭のこと。○をさ〳〵しく　長々しにて、立優りたる意。○ここのがさね　九重なり。文選に、「君門多九重」とあるより、宮城、又は、禁内をいへり。○今は野山しちかければ　衛門は、外郭を守れば、野山近しといひ、さて、近衛に對へて、外衛のあしきをいひ並べたり。○霞にたなびかれ　心の晴れやらぬをいへり。○時雨に袖をかし　涙に濡るゝをいへり。○しるせれば　かき記したればなり。○いつゝのむつ　五六三十年に及べりとて、わが公務の勤勞を陳べたり。○やよれば　やは彌なり、よは愈なり、數多き意

（九二三）

なり。佛足石の歌に、「やよつ光を放ち」とあるも、これなり。○長柄のはしの　○難波のうらに　たつ浪の序なり。○波の玄わにや云々　波の重り寄するを、面の皺に譬へたり。おほほれは溺れなり。卽ち、皺だらけに老いくちなむの意。○玄ら山の○おとはの瀧の　の文字、いつれも、の如くにの意にて序なり。○藥もが　もがは願望の助辭にて、不老不死の藥を欲しの意。○わかえ若くなること。○君が代に云々　かく、古き事を興じ給ふ御代に逢はむとも知らで、逢坂山の石清水の木隱れたる如く、人しれず沈める身と歎きしことを悔ゆとなり。

（評）長歌には、まづ、御時にあへるを悅び、次には、身のわびしきをかこち、次には、君をいはひ、終に、我命の長からむを願ひ、短歌には、いよ〳〵、御時にあへる悅をいひかへせり。貫之の目錄歌よりは、やゝ一ふしありて、優れるなれど、冗長に堪へず。また、貫之は、流石に、萬葉集を知りたるものと見えて、五七調の流れて、ところ〴〵七五となれりと覺しきを、これ、及び、次なる二首は、却て、七五調が、五七に流れたるが如き觀あり。時代の風潮とはいひながら、いづれにせよ、劃然たる體形をそなへざる以上は、邯鄲に、歩を失ひし燕人の類なるべし。君が代にの短歌は、長歌の反歌なり。反歌は、長歌の意を反復し、又は、いひ洩したるを歌ふものなり。聞えあげは、家集、聞えあげて。いにしへには、一本、いにしへも。かくはあれのどもは、家集、かくはほこれどとあり。とのへもる身のみかきもりは、家集になし。身ながらには、一本、身ながらも。しるせれば、家集、數ふれば。やよければ、一本、せめくれば。ながらへば。浪のは、家集、老の。瀧のは、家集、山のとあり。

（九一四）

冬のながうた

ちはやぶる、かみな月とや、けさよりは、くもりもあへず、
うちしぐれ、紅葉とともに、ふるさとの、よしのの山の、
山あらしも、寒く日ごとに、なりゆけば、玉の緒とけて、
こきちらし、あられみだれて、霜こほり、いやかたまれる、
庭の面に、むら〳〵見ゆる、冬くさの、うへにふりしく、
ゑらゆきの、つもり〳〵て、あらたまの、年をあまたも、
すぐしつるかな、

（釋）○ちはやぶる　枕詞。○神無月とや　神無月といふことにやの意。○紅葉とともにふる里の時雨が、紅葉と共に零るといふに、古里をかく。吉野の古里なることは、冬、「ふるさとは吉野の山し云々」の評にいへるを見よ。

（評）平凡の二字、これを悉す。しかも、玉の緒とけてとこきちらしとは、自他うち合はず。又、こきちらしたる如くと解かねば、その意通せざれど、それも無理にて、元來、詞の足らざるなり。けさよりばは、家集、はつ時雨。うちしぐれは、六帖、初時雨。山あらしは、家集、山おろし。年をあ

（九一五）

またもは、家集、年をおほくもとあり。

七條の后うせ給ひけるのちによみける　伊勢

おきつなみ、あれのみまさる、宮のうちは、年へてすみし、
いせの蜑も、船ながしたる、こゝちして、よらむかたなく、
かなしきに、なみだの色の、くれなゐは、われらがなかの、
時雨にて、秋のもみぢと、ひとゞは、おのがちりゞ、
わかれなば、たのむかげなく、なりはてて、とまるものとは、
花すゝき、君なきにはに、むれたちて、空をまねかば、
はつかりの、なきわたりつゝ、よそにこそみめ、

(釋)七條后　藤原温子。宇多帝の中宮なり。前後の詞書に、寛平の御時后の宮の歌合の歌、とあるその后の宮の御事なり。延喜七年六月御年三十六にてかくれさせ給ふ。○おきつ波　沖の波にて、あれといはむ序。○年へてすみし　作者は、この后宮の女房として侍ひし人にて、さて、宇多帝の寵をも受けしなり。○いせのあま　伊勢の海の海人なり。わが名の伊勢を寄す。○よらむ　頼るに、寄るをよす。○かなしきに　悲しきによりての意。○われらがなか　宮のうちの女房達にかけていふ。○おのかちりぢり云々　一周の年月を經て、宮の中の人々も、御墓づかへするものも、

悉く離散するをいふ。○とまるものとは　ものとてはの意、○はつかりの　初雁の如くにの意。

(評)草木こそ多けれ、薄をもて詞とするは、彼が、穂に出でて招くさまの、心ありげに見ゆるを思へるなり。しかも、哀傷にも、君がうゑし一村薄、など詠めるをもて思ふに、この頃、薄などを、前栽に移して、秋の野らのさまをまねぶこと、專ら行はれたりしならむ。后の薨じ給ひし年の秋の頃、御忌はてて、宮の内の人々、あらけまからむ行末を思ひやりて、目前の景物を詩材として詠めるなり。故宮、人空うして、殘草、風雨に摧け、天邊、雁聲を聞かむ時、いかで、懐舊の情、斷腸の思に堪へざるべき。長歌五首のうち、これひとり見つべし。

たのむかげは、六帖、及び、家集に、たのむかたとあり。

旋頭歌

題しらず　　よみ人しらず

うちわたすをちかた人に物まをすわれ
そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも

（九一八）

（釋）旋頭歌　セドウカと讀む。六帖には、センドウカとかけり。漢字序には、旋頭、混本と並べ舉けたれど、一つ物なり。混本、また、双本ともいふ。旋頭は、かみにめぐらす、混本は、本にまじふる、双本は、本にならぶるの意にて、本の句五七七に對するに、末句もまた、五七七を以て仕立てたる一體なり。そのはじめは、本末相互の問答を旨とせしこと、紀記に見えたるが如し。かくて、本にまれ、末にまれ、その五七七の一句をさして、片歌といへり。奈良時代に至りて、大に行はれたりしかども、猶、他の長短歌の盛なるには及かざりき。しかも、あながち、問答體によらず、自在に、その詩想を發揮したりき。いかにせむ、五七につぐに、七字を以てしたれば、下の方、いよ〳〵重く、頭勝なる七五調時代となりては、その調、氷炭相容れざるものあり。況や、字句ともに少くして、融通出入の自在を缺けるをや。これ、平安朝において、やうやく、廢絶に近づきし所以なり。されば、後には、五七五とつらねたる、短歌の半截の如きものも現れたれど、畢竟異體なり。

○うち渡す　此方より彼方へかくる意。されば、場處には、距離あるにいふ。宣長が、見渡すことなりといへど、古歌を案ずるに、その意差へり。○をちかた人　遠方なる人。

一首の意は、かけ離れたる、はるか向ふの方の人に、私は、物を問ひませう、それ其處に、白く咲いてある花は、何の花でありますぞ、まあ、大層見事な花ですがとなり。

（評）詩形をそなへたる平語のみ。われ物申すとあるべきを、倒置したるは、その二音五音の組織、あまりに、緩調に流るゝを以て、促調として、その失をすくへるなり。

かへし

春されば野べにまづさく見れどあかぬ花
まひなしにたゞ名のるべき花の名なれや

（釋）○まひ　禮物なり。されば、古來、幣の字を訓めり。まひなひといふもこれにて、賄賂をのみいふは、後の事なり。萬葉集六、「天にます月讀男幣はせむこよひの長さ五百夜（イホヨ）繼ぎこそ」、同九、霍公鳥の歌に「幣（マヒ）はせむ遠くなゆきそ」などの例を見て、推し知るべし。○名のる　名告るなり。

一首の意は、これは、春になれば、野邊に、まづ一番がけに咲く、見ても〳〵見飽かぬ花で、その名は、御禮の物なしに、つい云うてしまふやうな、輕々しい花の名であるか、いや、さうではござらぬとなり。

（評）詼諧を弄せる狂言面白し。この集における如き狹義の見解よりすれば、これも、俳諧の部のも

（九一九）

のなるべきを、體製につきて、姑く、こゝに收めけるならし。

だいたらず

はつせ川ふるかはのへにふた本ある杉
年をへてまたもあひ見むふた本ある杉

(釋)○はつせ川　大和國式上郡を流る。○ふるかはのへ　古川の邊なり。初瀬川は、古代よりいひはやされたる川なれば、古川といへり。よに、廢川を、古川といへるとは異なり。

一首の意は、初瀬川の古川のあたりにある二本杉、私は、あの、杉の年久しいやうに、年がたつて後、あの杉の並んで向ひ合うて居るやうに、またも、お目にかゝつて、對座致しませうとなり。

(評)諸註解き得す。意釋の如く見るべし。稻掛太平が、上は、またといはむ序なりとて、二本杉を、二股杉と同樣に思へるは、いよ〳〵非なり。この二本杉は、そのわたりに著名なる物なりしより、譬喩に用ゐたるならむ。本の三句を、再び、末句において歌ひかへしたる、詠歎の味永し。その風調によりて想ふに、奈良時代の遺製なるべし。作者の大和人ならむことは、もとよりなり。

末の結句、躬恒集に、おもがはりせでとあるは、この特色を抹殺したるものにして、神意索然たり。

君がさすみかさ山のもみぢばの色　つらゆき

神無月ちぐれの雨のそめるなりけり

(釋)○君がさす　御笠(ミカサ)といはむ序。○みかさの山　御笠、又、三笠とかく。大和の春日の東方にある山。○そめる　染みてあるの約。但、かく自動にいひては、上なるのの助辭に應せず。染むるの誤寫ならむ。

一首の意は、三笠山の紅葉の色、これは、大層見事であるが、何が染めたかと思へば、神無月の時雨の雨が染めたのであつたワイ、人間業ではないはサとなり。

(評)萬葉に、「君が着るみかさ」と續けたるは、冠り笠なり。これは、さすとあれば、唐傘、大傘の類ならむ。そはいづれにまれ、ちぐれの雨をかけ合はせたること、

大君の三笠の山のもみぢ葉はけふの時雨にちりかすぎなむ(卷八)

と同巧なり。末の結句、助辭が、その大部分を占めたるは、輕くして、更に力なし。五七七の體を成す所以の調に背けり。

末の第二句、躬恒集に、時雨のあめにとあり。さらば、下のそめるなりけりに打合ふべけれど、時雨を主として、そむると、他動にいひたる方面白ければ、意釋は、その意にて解きなしつ。少しにても、証本ある方に從ふべき定めにそむけば、こゝに一言しつ。

誹諧歌

題しらず

梅のはな見にこそ來つれうぐひすの人くとといとひしもをる　よみ人しらず

（釋）誹諧歌　史記の註に、「滑稽俳諧也」とありて、をかしきたはれ言を、俳諧といふ。唐の杜甫の詩にも、俳諧體あり。こゝに、誹諧と書けるは、下の諧の字の偏によりて、上なる俳の字の言偏に作れるのみ。かゝる例、熟語には、よくあることなり。惑ふべからず。

一首の意は、自分は、梅の花を愛して、見にサ來たのである、されば、梅に寢ぐらを占めて居る鶯は、喜ぶべき筈なるに、何故か、鶯が、人が來る人が來ると鳴いて、自分の近寄るのを厭つてサまあ居るワイとなり。

（評）撰者等が、俳諧とせる標準は、きはめて曖昧にして、今より推するに、殆ど困難なり。同じ構想、同じ叙述のものにても、一は本歌に入り、一は俳諧に入り、人をして、その定見なきかを疑はしむるものあり。想ふに、詩學上の智識乏しきが爲に、確たる認識なくして、時代の思潮に眩惑せられたる結果ならむと信ず。されど、この部中なるは、流石に、多少、滑稽の狂味なきはあらず。

素性法師

山ぶきの花色ごろもぬしやたれ問へど答へずくちなしにして

（釋）○山吹の花色ごろも　山吹の花は黃色なり。その色したる衣をいふ。○くちなし　口無しに、梔子（クチナシ）をよす、梔子は、その實の外殼、口を開くことなきが故に、この名あり。黃色の染料とす。

一首の意は、この山吹の花の衣は、主は誰であらうか、いか程問へども、更に、返事せぬワイ、をゝ、それもその筈、山吹は、口の無いといふ梔子色であるによつてサとなり。

藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくればか時鳥ゐでの田長を朝な〳〵よぶ

（釋）○ゐでの田長（タヲサ）　催馬樂に、「雨やどり、笠やどり、宿りてまからむ、ゐで田長」とあり。田長は、田をつかさどる人にて、卽ち、農夫なり。時鳥の鳴くは、梅雨頃を盛として、農時に際したれば、その聲を、賤田長（シヅ）と聞きなし、轉りては、ゐで田長といへるならむ。その ゐでの音に就きて、死出の山を越えたる冥土に、時鳥のあるやうに、僞經十王經に作れるより、死出田長の意にも取做して、詠みもせしなり。十王經のことは、哀傷「なき人の宿に通はば時鳥云々」の條にいへり。

さて、今は、姑く、調につきて、しでのと、の文字を入れたり。

一首の意は、どれ程の田を作るのであればか、時鳥は、あのやうに、いそがしさうに、賤の田長を、毎朝毎朝呼ぶことぞとなり。

七月六日たなばたの心をよみける　　藤原かねすけ　　（九二四）

いつしかとまたく心をはぎにあげて天の川原をけふや渡らむ

（釋）たなばたの心を　たなばたは、牽牛星に對して、棚機といへるにあらず。ひろく、二星にかけていひたるなり。歌は、牽牛星の心をよめり。○またく　待つのつの延言。○はぎにあげて　宣長いふ、人に、物を、かくと顯し見することを、古の語に、脛に擧ぐ、といふことのありしなるべし。土佐日記なるも、その意なり、といへり。土佐日記に、ほやのつまのいずし鮨鮑をぞ、心にもあらぬ脛にあげて見せけるとあり。

一首の意は、今日は六日なれば、逢ふ日は明日なれども、いつかくと待ちかぬる心を見せて、高股立を取つて、今日渡らうかとなり。

題しらず　　凡河内躬恒

むつ言もまだつきなくにあけぬめりいづらは秋の長してふ夜は

（釋）○むつ言　睦び言にて、男女の情語をいふ。

一首の意は、睦言も、まだ澤山あるのに、はや、この秋の夜があけた樣子だワイ、一體、どこにあるぞ、よく、人のいふ秋の長いといふ夜はサテとなり。

（評）逢ふ夜の短きを怨みかこてるなり。二星の心を詠めりとも見らるべく、又、作者の實情とも見らるべし。いづらはの語眼目なり。これら、有數の佳吟にして、更に、俳諧の氣味にあらず。

あきの野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時　　僧正遍昭

（釋）一首の意は、秋の野に、嬌態をして立つて居る女郎花、これを、世の人は、大層にいひはやすが、あゝ喧しいワイ、その花も、ほんの一盛のわづかの間のものぞ、といふが表面の意にて、あすこに、美しい女が居るくといひはやすが、あゝ喧しいワイ、何の、美人の色も、ほんの一時の間のものぞ、といふのが裏面の意なり。

（評）諸註、女郎花の喧しかるやうに解きなしたるは、理り聞えず、詞の上にも見えぬことなり。趣意は、朝には紅顏、夕には白骨の無常を說きて、好色家を警醒したるなり。

四句、一本、あなことごとしとあり。

秋くれば野べにたはるゝ女郎花いづれの人かつまで見るべき　　よみ人しらず

（釋）○つまで　摘までに、折までをよす。

一首の意は、秋になれば、野邊に色めいて居る女郎花を來て見る人は、どの人でも、つまずに見ようか、いや、皆摘んで見るワイ、丁度、花の名によぶ女のじやらくらしたのには、誰も、一寸、

（九二五）

手を出して、抓つて見るやうにサとなり。
結句、一本、つてに見るべきとある、わろし。

○

秋霧のはれてくもれば をみなへし花の姿ぞ見えかくれする

（釋）一首の意は、霧が晴れたり曇つたりすると、女郎花の花の姿サ、見えたり隠れたりするワイとなり。

○

花と見て折らむとすれば女郎花うた〳〵あるさまの名にこそありけれ

一首の意は、つい一とほりの花と思うて折らうとすれば、女郎花の女といふ名は、生憎な譯合のある名でサあつたワイ、女には、どうも、手がさしにくいワイとなり。

（評）作者は法師なるべし。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぐす鳴く

（釋）つゞりさせ　綴り刺せなり。今も、ホロヒ蛬の聲を、「肩させ裾させ」と聞きなすなり。

一首の意は、藤袴が、秋風で、大分綻びたらしいワイ、その証據には、その綻をつゞくりさせといふ蛬が鳴くワイとなり。

二句、一本、綻びぬらむとあり。

あす、春立たむとしける日、隣の家の方より、風の、雪をふきこしけるを見て、その隣へ、よみてつかはしける。

きよはらの深やぶ

冬ながら春のとなりのちかければ中垣よりぞ花はちりける

（釋）一首の意は、まだ冬なれど、もう明日、春が立つ今日で、春の近隣であるによつて、冬と春との界目の中垣からサ、その春の花が散つて來たワイとなり。

（評）わが宿を卑下して冬、隣家を春に喩へたるより、隣家の雪をも、花に見立てたるなり。

結句、六帖に、花ぞ咲きけるとあり。又、拾遺集戀四に再出したり。

題しらず

よみ人しらず

石の上ふりにし戀の神さびてたゝるにわれはいぞ寢かねつる

（釋）○石の上　舊りといはむ枕詞。○たゝる　祟るなり。

一首の意は、あまりに、年久しうなつたる自分の戀は、性が入つて、祟りをする爲に、自分は、

夜も寢ることがサ、えう出來ぬワイとなり。

（評）すべて、年舊りたる物の化けて、怪を爲すといふことは、太古よりの迷信なりけらし。久しき戀に、心の焦られて、いよ〳〵安寢もせざるを、戀の祟りといひなせるは、面　き滑稽なり。

結句、一本、いねぞかねつるとあり。又、拾遺集戀四に再出したるには、ねぎぞかねつるとあり。

○

枕よりあとより戀のせめくれば　せむかたなみぞ床なかにをる

（釋）○枕よりあとより　神代紀に、頭邊（マクラベ）脚邊（アトベ）とあり。○なみ　無さになり。

一首の意は、夜寢て居ると、枕の方からも、脚の方からも、戀といふ奴めが、ぎきりに攻め立てくる故に、仕樣がなさにサ、床の眞中にうづくまつて、ぢつと起きて居るワイとなり。

戀しきがかたもかたこそありと聞け立てれをれどもなき心ちする

（釋）○かたもかたこそ　舊註に、兩說あり。いかに戀すとて、心の方角は方角にて、あるものと聞くといふ說と、いかに戀すとて、その人の形は形にてあるものと聞くといふ說となり。姑く、下句とのかけ合と、狂味の如何とを思ひて、後說に從ひつ。○立てれ居れども　立てれども、居れどもなり。

一首の意は、どのやうに、戀をする人でも、形は窶れ細りながらもサ、あるものと聞くワイ、それに、自分は、戀に、心が空になつて、立つて居ても、すわつて居ても、この身體の形が、どうやら無い心持がするとなり。

○

ありぬやと心見がてらあひみねばたはぶれにくきまでぞ戀しき

（釋）○ありぬや　逢はでもありぬやといふを略けるなり。

一首の意は、思ふ人に逢はずにも居遂げらるゝものかと、ためしがてらに、逢はずに居れば、もう〳〵、さやうの冗談事もして居られぬ程にサ、戀しいワイとなり。

○

耳無の山のくちなし得てしがなおもひの色の下ぞめにせむ

（釋）○耳無の山　大和志に、「大和國在十市郡木原村上方、四面田野、孤峰森然、山中梔樹多矣、因又呼梔子山（クチナシ）」とあり。○おもひ　思に、緋をよす。

一首の意は、あゝ、耳無山の梔子が得たいものであるワイ、それがあらば、世間のきこえを忍ぶ戀の思の緋色の下染にせうワイ、さすれば、耳なしなれば人が聞かず、口なしなれば人がいはず、思を忍ぶには、好都合であるによつてサとなり。

○

足引の山田のそぼつおのれさへ我をほしいといふ憂はしきこと

（九三〇）

（釋）○そほづ　案山子なり。古言そほど。○おのれ　こゝは、二人稱に用ゐたれば、罵れる語なり。一首の意は、山田の案山子を見るやうなる汝さへ、自分を望んで逢ひたいといふ、さても、厄介なことやとなり。

（評）萬葉集十一なる、左の歌の倣なり。

山城の久世のわく子がほしといふ我を、あふさわに我をほしといふ山城の久世。

富士のねのならぬおもひに燃えば燃え神だに消たぬ空し煙を　きのめのと

（釋）○ならぬ　成就せぬなり。○おもひ　思に、火をかく、○燃えば燃え　下の燃えは、命令格なり、○神だに　富士の神は、木花開耶姫命なり。富士の烟のことは、既に、序文の中に釋せり。一首の意は、富士の山が、出來ぬ戀の思の火で燃ゆるやうに、自分の、出來ぬ戀の思の火も、燃ゆるなら燃えよサ、富士の山の神樣でさへも、昔から、思の火から立つ、益にも立たぬ煙を、お消しなさらぬものをサとなり。

（評）後撰集戀二に、平貞文、

われのみやもえて消えなむ夜と共におもひもならぬ富士のねのごと

紀のめのとのかへし、

富士の根のもえ渡るともいかゞせむけちこそしらね水ならぬ身は

とあると、同時の返歌か。撰者は、神だに消たぬを、俳意と見たるならむも、かやうの空想は、詩歌の要素なり。

あひ見まくほしは數なくありながら人につきなみ惑ひこそすれ　きのありとも

（釋）○ほしは　欲しに、星を寄す。○つきなみ　手著がなさにの意、手著は便宜なり。月を寄す。一首の意は、星があつても、月のない晩は、道を惑ふやうに、逢うてほしい思は、數限もなくありながらも、その人に逢ふ便宜がなさに、心もかきくれて、惑ふことでサあるワイとなり。

人にあはむつきのなきには思ひおきて胸はしり火に心やけをり　小野小町

（釋）○つき　便宜に、月をよす。○思ひおきて　思ひ起きに、熾を寄す。熾は、盛におこりたる火。○胸はしり火　胸の走るに、走火をかく。胸の走るは、心の騷くこと、走火は、火の、外へ刎ね

（九三一）

飛ぶをいふ。○第二句、一本、なきよはとあるよろし。には、よの誤寫なり。

一首の意は、思ふ人に逢はう便宜の無い夜は、そのことを思ひながら起きて、火の走るやうに、胸が走つて、心が焦れて居るワイとなり。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原おきかぜ

春霞たなびく野べの若菜にもなり見てしがな人もつむやと

（釋）○つむや　摘むに、抓むを寄す。

一首の意は、春霞の立つ野べの若菜にもなつて見たいものであるワイ、自分のやうなる者でも、もしや、若菜の摘まるゝやうに、思ふ人に抓めらるゝか、どうかと思へばサとなり。

二句、新撰萬葉には、たちいづる野べの、四句、一本、なりもしてしがとあり。

題しらず　よみ人しらず

思へどもなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじと思へば

（釋）一首の意は、自分は、かの人を、隨分思うては居れども、やはり頼みがたうて、疎々しい心持がするワイ、その故は、丁度、春の霞の、こゝの山へも、かしこの山へもかゝらぬ所はあるまいやうに、かの人の、氣が多くて、かゝりあるかぬ所はあるまいと思ふによつてサとなり。

（評）著想は、左の歌どもと相同じきに、これのみ俳諧なるはいぶかし。

時鳥ながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから（夏）

かつ見れどうとくもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば（雜上）

たゞし、人にかゝつらふを、かゝるといふは、當時の俗語、或は鄙語なるより、雅馴なる春霞かゝらぬ山の取做し、却りて、滑稽に聞えしならむか。

春の野のあげき草葉の妻ごひにとびたつ雉のほろ〳〵とぞ鳴く　平貞文

（釋）○しげき草葉の妻戀に　草葉のしげき妻戀にといふべきを、調につきて倒裝したり。春上「若草の妻もこもれり」の續きとは同じからず。○ほろ〳〵　ほろうつなどもいひて、雉の羽音なり。涙のおつる形容のほろ〳〵をかけたり。

一首の意は、自分は、春の野の草葉のやうに、妻を戀ふる思がしげきによつて、その春の野に、妻戀して飛び立つ雉子の羽音の、ほろ〳〵といふやうに、ほろほろとサ泣くワイとなり。

（評）ほろ〳〵の口合が俳諧なり。それを心付かずして、雉子のほろ〳〵と鳴くと思ひて、後の歌どもにも詠めるは誤なり。

あきの野に妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞなく　きのよしひと

（釋）○かひよ　鹿の鳴聲なり。甲斐よをかく。○なぞ　この語にて、句を切りて見るべし。

（九三三）

一首の意は、秋の野で、妻のない鹿が、何年も何年も、あのやうに、かひよ〳〵と鳴くが、何の妻戀の甲斐があるぞ、鹿の料簡がわからぬワイとなり。

(評)六帖に、伊勢、

秋山に妻なき鹿の年をへてなぞやいきてのかひよとぞなく

いきてのといへるに、年をへての句いたづらならず。初句も、山の方、なほよろしきか。

五句、一本に、かひよとはとあり。

(九三四)

蟬の羽のひとへに薄き夏ごろもなればよりなむ物にやはあらぬ　みつね

(釋)○ひとへ　一重に、偏にをかく。○なればよりなむ　馴れば紕りなむにて、着馴らせば萎えばみて、皺づくをいふ。

一首の意は、自分の思ふ人は、蟬の羽の衣のやうに、一向に薄い心なれど、こちらから、實を盡して馴れたらば、着馴らすと、夏衣の紕るゝやうに、ゆく〳〵は、自分に思ひ寄つてきさうな物ではないか、寄つて來ぬことは、ありさうもないものに思はるゝワイとなり。

隱沼のあたよりおふる根沼縄の寝ぬ名はたゝじくるないとひ　たゞみね

そ

(釋)○隱沼(カクレヌ)のしたよりおふる根沼縄(ネヌナハ)の　譬喩をかねたる序なり。根沼縄は、蓴菜をいふ。○くる來るに、繰るをよす。繰るは、縄の縁語なり。

一首の意は、私が、このやうに通うて來ても、貴方がつれなくて、一所に寝てくれぬ故、根蓴(ネヌナハ)の名のやうに、寝ぬ名は立ちはすまいと思ふ、それ故、草隱の沼の底から生ゆる根蓴のやうに、隨分忍んで、私のくることばかりは、厭つて下さるなとなり。

ことならば思はずとやはいひはてぬなぞ世の中の玉襷なる　よみ人あらず

(釋)○ことならば　春下「ことならば咲かずやはあらぬ」の條を見よ。○玉襷　玉は美稱、襷(タスキ)は掛くる物なれば、どちらつかずに引きかゝれる意の隱語に用ゐたり。

一首の意は、このやうに、逢うてくれぬとならば、いつそ、何とも思はぬといひ切つてしまへばよい、なぜに、二人の中が、どちらつかずに引掛つて、玉襷であることぞとなり。

(評)後にも、「大幣にして」と詠める隱語を、俳諧の意とせり。

○

思ふてふ人の心のくまごとにたち隱れつゝ見るよしもがな

(釋)一首の意は、自分を思ふと、口でいふ人の心の隅々(スミ〳〵)へ、そつと這入つて、隱れ〳〵して、實か

(九三五)

嘘かを見屆くる手だてが、あつてほしいワイとなり。

○

思へども思はずとのみいふなればいなや思はじ思ふかひなし

（九三六）

（釋）○いなや　否やなり。

一首の意は、これほど、眞實に思ふけれど、それを、かの人は疑うて、思うて居らぬとばかりいふのであるから、いや〳〵、これから、もう思ふまいぞ、とても、思ふかひがないワイとなり。

四句六帖に、今は思はじとあり。

○

われをのみおもふといはばあるべきをいでや心は大幣にして

（釋）○大幣（オホヌサ）にして　大幣は、戀四「大幣のひく手あまたになりぬれば」の條に釋けり。こゝは、ひく手あまたの隱語に用ゐたり。

一首の意は、かの人が、思ふ〳〵といふのも、自分ばかりを思ふのならば、それでよからうが、いやもう、かの人の心は、あちらへもこちらへも靡く、引手あまたの大幣であつて、一向、あてにならぬワイとなり。

○

われを思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人のわれを思はぬ

一首の意は、自分を思うてくるゝ人を、思うてやらぬ報かして、自分が戀しう思ふ人が、自分を思うてくれぬワイとなり。

（評）眞淵は、俳諧にあらずといへり。されど、詞は、思ふの語を、故意に疊用し、意は、思はぬ報をいへる、これら俳諧なるべし。次なる歌も、むくいをいへり。

○

〔一本ふかやぶ〕

思ひけむ人をぞともに思はましまさしや報なかりけりやは

（釋）○まさしや　正しやなり。

一首の意は、あの、自分を思うてくれたであらう人をサ、こちからも思はうことであつたワイ、あゝ爭はれぬもの、報といふものが無かつたことか、いや、覿面にあつて、今、自分の思ふ人が、自分を思うてくれぬワイとなり。

〔一本よみ人しらず〕

出でゆかむ人をとゞめむよしなきに隣のかたに鼻もひぬかな

（釋）○鼻もひぬ　鼻をひるとは、嚏（クサメ）をすること。

一首の意は、今、こちから出でゆかうとする人を留めう手だてがないによつて、人が嚏をすれば、

（九三七）

出ることを忌む習があるから、かこつけて留めうと思へど、生憎、近所隣で、嘘もせぬことよと
なり。

(評)奈良時代には、鼻ひれば、待人來るといひ、又、人の思ふ時は、嚏るともいへり。この頃は、又、鼻ひれば、出で行くことを忌むといふ迷信ありけるなるべし。

作者の名、上のもこれも、一本云々とあり。奏覧の原本にあるまじきことなり。定家卿校正の時書き加へらるともいへり。このわたり、皆、よみ人しらずなるべし。

(九三八)

○

紅にそめしこゝろもたのまれず人をあくにはうつるてふなり

(釋)○あく　飽くに、灰汁をかく。紅は、藍の灰汁にて洗へば、色の褪むるものとぞ。

一首の意は、紅のやうに、深い色に染めこんだる人の心も、たのみにはならぬ、なぜなれば、かの紅も、灰汁に漬くれば、色が變るといふやうに、人を飽くといふ氣が出ると、つい、心が變るといふことであるワイとなり。

(評)思の深き由を、人のいひ誇らへより、その紅の深き色とても、あてにはならぬ物といひくたしたるなり。

二句、六帖に、染めしころももとあり。

○

いとはるゝわが身は春の駒なれや野飼がてらに放ちすてたる

(釋)○野飼がてら　顕註に、馬をも牛をも、放ちて飼ふをば、野飼といふ、それに寄せて、人を思ひ放つをも、野かふといふなりとあり。景樹の説に、退きのきを延べて、かふといふにて、退きがてらに遠ざかる譬なりといへり。後撰集に、「みちのくの尾駁の駒も野飼ふには荒れこそまされなつくものかは」など、まことに、退く意ありと見へたり。

一首の意は、人に厭はるゝ自分の身は、春の駒かして、丁度、春駒を、野飼がてらに放しずてにしておくやうに、かの人が、客氣せぬやうなる顔をして、その身を退きがてら、自分を見すてて、一向かまはぬワイとなり。

○

鶯のこぞのやどりのふるすとやわれには人のつれなかるらむ

(釋)○鶯のこぞのやどりの　古巣といはむ序。○ふるす　古巣に、舊すをかく。

一首の意は、鶯の去年の宿を古巣といふやうに、かの人が、自分を舊いものにして、見捨つるというて、それで、かうも氣強うするのであらうかとなり。

○

(九三九)

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやく霜夜をわが獨ぬる　（九四〇）

（釋）○さかしら　賢しらになり。かしこだての意。○さやく　さや〳〵と、さやかに鳴ること。一首の意は、人に見捨てられても、ぬからぬ顔に、夏は、人まねに、いつそ、獨寢の方がよいなどいうて紛はしても見たが、このやうに、笹の葉の、さや〳〵と鳴る寒い霜夜をも、自分が、獨寢ることよ、これは、いかにも堪へやうがないワイとなり。

あふ事の今ははつかになりぬれば夜深からではつきなかりけり　平中興

（釋）○はつか　僅に、二十日を寄す。○つき　便宜に、月を寄す。一首の意は、何時も、二十日になれば、夜がふけねば、月がないが、自分も、かの人に逢ふ事が、人目のうるささに、今では、わづかになつたによつて、たまに逢ふにも、人目の無い夜ふけでなくては、便宜がなくなつたワイとなり。

もろこしの吉野の山にこもるとも後れむと思ふ我ならなくに　左のおほいまうち君

（釋）○もろこしの吉野の山　吉野山は、山深くして、世を厭へる人などの、よく籠る所なれば、假令、諸越の、さる深山に籠るともと、設けていへるなり。一首の意は、貴方が、大和の吉野山は、勿論、假令、唐の吉野山の奥へ引き込まうとも、どこまでも慕うてこそゆけ、あとに殘つて居ようと思ふ自分ではないものをサ、それを、心の淺いやうに思はるゝは口惜しいワイとなり。

（評）戀五に見えたる、伊勢の御が、仲平朝臣におくれる、「三輪の山いかにまち見む云々」の歌の返しとて、これを、伊勢集に擧げたるより、仲平の作とし、さて、仲平は、後にこそ、左大臣にもなりたれ、延喜の頃は、未だ微官なればとて、「左のおほいまうち君」の署名を疑へるものあるは、伊勢集に泥めるなり。かの集は、素より、しどけなきものにして、勅撰の面正しきものにあらず。これをおきて、彼を採るは、本末を誤れるものぞ。「三輪の山」の返しにもあらず、仲平の作にもあらず、左大臣藤原時平の詠なり。

雲はれぬ淺間の山のあさましや人のこゝろを見てこそやまめ　なかき

（釋）○雲はれぬ淺間の山の　譬喩をかねて、あさましの序としたり。淺間山は、信濃國北佐久郡なる噴火山。○人の　おのれをさしたり。一首の意は、淺間山の噴き出す烟が、雲となつて晴れずにあるやうに、疑の晴れもせぬに、早くも退いてしまうとは、あまり怪しからぬ、肝のつぶれたことよ、私の心を、とくと見たうへでサ、

（九四一）

止むなら止めたがよいワイとなり。

なにはなる長柄の橋もつくるなり今はわが身を何にたとへむ　伊勢　（九四二）

（釋）○つくる　造るの意。蓋くるに解くは當らず。この事、序文中「長柄の橋もつくるなりときく人は」の條に論じたり。

一首の意は、これまで、舊い物のためしに引いたる難波の長柄の橋も、新しう出來るのである、今はもう、人に飽かれて、舊い物となつてしまうたる自分の身を、何に譬へうぞ、何にも譬ふる物も無くて、心の慰みやうも無いワイとなり。

初句、金玉集に、つのくにのとあり。

まめなれど何ぞはよけく刈萱の亂れてあれどあしけくもなし　よみ人しらず

（釋）○まめ　眞實、或は、眞面目などの意。○何ぞはよけく　よけくあらむの略。○刈萱の　刈萱は、萱の一種。その葉細くして、亂れがちなるが故に、亂れてといはむ序としたり。眞淵、宣長などが、刈る萱の意に見たるは非なり。

一首の意は、自分は、隨分、實體であるけれど、それが、何のよい事があらうぞ、現に、かの人が、自分を賴みにせぬではないか、かの人などは、刈萱の亂れたるやうに、あちこちに、心を移して亂れて居るけれど、それでも、さのみわるいやうな事もないワイとなり。

何がその名のたつ事のをしからむ　おきかぜ　ありて惑ふは我ばかりかは

（釋）一首の意は、何のその、名の立つことが惜しからうぞ、戀路のならひ、よくも無いと知りながら迷ふのは、自分ひとりかまあ、自分ばかりでは無い、皆さうであるワイとなり。

いとこなりける男によそへて、人のいひければ。　くそ

よそながらわが身にいとのよるといへば只いつはりにすくばかりなり

（釋）いとこなりける云々　從弟なる男に、惜交のあるやうによそへて、世の人のいひ騷ぎければの意。但、いとこなりける男のけるは、要なき辭なり。こは、顯註に、「この歌は、いとといふ男によそへて、人のいひければ、女のよめるなり」とあるを見れば、或は、もと、いとといふ男にとありけるを、いとこと寫し誤りたるより、心も得ぬ者の、濫に、いとこなりける男と書き改めもやしけむ。こは、試にいふのみ。姑く、本文のまゝにて、解を下しつ。○いとのよる　從弟の寄るに、糸の縒るを寄す。○いつはり　僞に、針を寄す。○すくす　着ぐること、好色を寄せたるものとま

（九四三）

で見るべからず。

一首の意は、この頃、よそながら聞けば、何か、従弟の男が、自分に附いて居るといふ、根も無い噂をするから、そんな糸の縒つたのは、外に、仕方が無い、只、偽といふ針に、すげ通すばかりであるはサとなり。

（九四四）

題しらず

さぬき

ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそはてはなげきの森となるらめ

（釋）○ねぎ言　願言なり。○なげき　歎きに、木をかく。なげきのは、歎がの意にて、なげ木の森と讀くにはあらず。

一首の意は、多くの人が歎き願ふ詞を、さやうに、お聞き入れなされたであらうと思ふ神の社はサ、しまひには、なげきといふ木の茂る森になるであらうワイ、といふが表面の意にて、人のいひ寄るのを、さやうに、無暗と聞き入れて、誰彼なしに逢ふたであらう人がサ、しまひには、歎きがしげうなるであらうワイ、といふが裏面の意なり。

（評）さて、その人は、作者自身なるべし。

大輔

なげき樵る山とし高くなりぬればつら杖のみぞまづつかれける

（釋）○なげき　歎きに、木をかく。○つら杖　頬杖なり。

一首の意は、いろ〳〵の歎きが、山のやうにサ、高く積つたから、何ぞ思ふと、頬杖ばかりサ、突くやうになることではあるワイとなり。

（評）木を樵り來て、山の高くて、道すがら、杖を突くをもて仕立てたり。

よみ人しらず

なけきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり

（釋）○なげき　歎きに、木をかく。○足引の山の　かひといはむ序。山には、峡あれば、詮（甲斐）にかけたるなり。

一首の意は、あまりに、木を樵り積むと、山の峡が埋つてなくなるやうに、自分は、戀ゆゑに、歎きばかりが積つて、その歎き甲斐がなくなつてしまひさうな樣子だワイとなり。

○

人こふることを重荷と擔ひもてあふごなきこそ佗しかりけれ

（釋）○あふご　枴に、逢ふ期をかく。枴は荷ひ棒なり。

一首の意は、戀を、重荷と擔うて居るから、それなら、枴がある筈なるに、その枴といふ逢ふ期が

（九四五）

ないのがサ、難儀なことであつたワイとなり。

○

よひの間にいでて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもある
かな

（釋）○よひの間にいでて入りぬる三日月の　三日月は、片破れなるより、われてといはむ序とした り。○われて　わりなくの意。わりなくは、ことわりなくの略にて、無理やりに、又は、強ひて などいふ意に似たり。

一首の意は、宵の口に、一寸出て這入つてしまう三日月の、片破れといふやうに、わりなく無上に、物思をする、この頃であることよとなり。

○

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひ知らずあふさきるさに

（釋）○そへにとて　契沖いふ、後撰集に「けふそへに」といへる詞あるは、副の意にて、けふさへにいふ詞なれば、同じからず。古今著聞集第十六、法師の、角力とる事をいへる條に、「そへにと答ふ」、といふ詞見ゆ。それよといふ詞に近しといへり。この說從ふべし。　○あふさきるさに　合ふさ離さなり。さて、往くさ來さの意ともなり、轉りては、往き逆ひ、かけ逆ひなどの意にも用ゐられたるなり。諸註、皆いひ足らず。

一首の意は、さうだと、一つ思案をきめてして見ると、一方に差支ふるし、それならばと、又、その方へ片づいてして見ると、又、こちらの一方に差支ふる、あゝ、何というてよいやら、いひやうも知らぬワイ、とかく、世の中の事は、あちこち往きちがひのものであつてサとなり。

（評）かくすればとあるべきを、上にゆづりて略きたり。

○

世の中のうきたび毎に身を投げばふかき谷こそ淺くなりなめ

（釋）一の意は、自分が、世の中の憂く思はるゝ度毎に、世を厭うて、身を投げうなら、深い谷がサ、その死骸でつまつて、淺くなつてしまうであらうワイ、このやうに、憂い事の多い世の中なればサとなり。

よの中はいかにくるしと思ふらむこゝらの人に恨みらるれば

在原もとかた

（釋）一首の意は、心があらば、世の中そのものは、どんなにか苦しいと思ふであらうワイ、かう、澤山の人に、世中が恨めしい〳〵と恨まるゝからサとなり。

四句、六帖に、ようづの人にとあり。

よみ人しらず　（九四八）

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき

（釋）○やさしき　羞しきこと。

一首の意は、一體、自分はまあ、何をして、このやうに、年寄つたのであらう、何一つ仕出したる事もなしに、寄つてしまうたる年の思はくがサ、心はづかしいワイとなり。

三句、朗詠に、老いにけむ、結句、六帖に、こともやさしくとあり。

おきかぜ

身はすてつ心をだにもはふらさじ遂にはいかゞなると知るべく

（釋）○はふらさじ　はふるは放ち捨つるなり。物を擲つを、俗に、はうるといふもこれなり。零落の意にもなれど、こゝには當らず。

一首の意は、とても、この世の望は、思ふにかなはぬ故、この身は、思ひ切つて無い物として、捨てたワイ、しかし、せめて、心だけなりとも、大切に持つて、捨鉢といふやうに、ふり捨てまいぞ、流石に、捨てたるこの身の行末が、どのやうになるかと見屆けらるゝやうにサとなり。

結句、家集に、なると見るべくとあり。

ちさと

白雪のともにわが身はふりぬれど心はきえぬ物にぞありける

（釋）○ともに　伴侶の意。白雪と共にの意にあらず。

一首の意は、白雪の友達として、自分の身は、雪の降るといふやうに、ふるび老いたれど、流石に、雪の消ゆるやうには、心は消えぬものでサ、やはり、若い時に變らぬワイとなり。

題しらず　よみ人しらず

梅の花さきてののちのみなればやすきものとのみ人のいふらむ

（釋）○み　實に、身をかく、○すきもの　酸き物に、好色者をかく。

一首の意は、梅の花が咲いて後になる實は、酸いものであるが、そのやうなるこの身であればかして、自分を、好色者だ〳〵とばかり、人がいふのであらうワイとなり。

法皇、西川におはしましたりける日、さる、山のかひにさけぶといふことをよませ給うける。　みつね

わびしらにましらな鳴きそ足引の山のかひあるけふにやはあ

（九四九）

らぬ

（釋）法皇西川におはしまし　雜上「芦たづの立てる川邊を云々」の條を見よ。さる、山のかひにさけぶは、猿叫二山峽一にて、鶴立洲と同じく、詩題なり。○ましら　猿のこと。翻譯名義集に「摩斯吒、或、末迦吒、此云二獼猴一」とあり。○かひ　詮（甲斐）に、峽をかく。

一首の意は、猿よ、そのやうに啼くなよ、今日は、法皇樣の御幸があつて、この山のありがひのある日ではないことか、ほんに、甲斐ある有難い日であるぞよとなり。

（評）わびしらに啼くといへるは、題の趣によれるなり。詩には、猿聲を悲しきものに作り、宜都山川記「巴東三峽猿鳴悲、猿鳴三聲淚沾レ裳」、白氏文集「三聲猿後垂二鄕淚一」の類、屈指に遑あらず。さて、眞淵は、これを、意詞たはれたるところなくめでたしとて、この部に入りたるを疑へり。想ふに、わびしらの音を反復すべく、マシタの梵語を、ましらと轉じて、口合（アヒ）にしたるか。或は、萬葉集に、ましの助辭に、猿の字を塡てたれば、早くより、マシとのみいひならへるを、わざと、ら文字を添へて、疊音にしたるならむ。この作者、時に、かやうの戯をなすことあり。比良の山を隱して詠まむとては、「かくてのみわが思らのやまざらば」と、思らの新熟語を作りぬ。ましらも、この條ならむこと、必せり。さては、なほ俳諧なるべし。

題ならず　よみ人ならず

世を厭ひこの本ごとにたちよりてうつふし染の麻のきぬなり

（釋）○うつふし染　うつふしは、俯臥（ウツフシ）にて、假寢のさまなり。空五倍子（ウツフシ）をかく。宣長が、全臥（ウツ）にて、全剝の全なり、丸寢と同じといへるは、强ひたり。五倍子は、ぬるでの木に產する蟲の巢にて、そのうちうつろなれば、空五倍子（ウツフシ）といへるなり。これにて、黑色を染む。○麻のきぬ　僧衣なり。

一首の意は、この衣は、浮世を厭うて、所定めずあるく僧の、どこでも行きかゝり次第、樹蔭樹蔭に立寄つて、俯臥に假寢するとこころの、空五倍子染の麻の黑衣であるワイとなり。

（評）五倍子染の僧衣を贈るとて、詠めるなるべし。

結句、六帖に、苔のころもぞ、遍昭集に、麻の袈裟なりとあり。又、大和物語には、上句「霜雪のふるやの中にひとり寢の」とありて、遍照の詠とせり。但、本文のを正しとすべし。

古今和歌集卷第二十

大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

日本紀には、つかへまつらめ萬代までに

(釋)大歌所　西宮抄に、「大歌所、在二圖所寮東一、新嘗時供奉、有二親王、大納言、非參議、六位別當、琴師、歌師十生二」とあり。邦樂なる神樂、風俗等の謠物を掌れる官人、歌人等を召し置かるゝ所なり。それを習ひ傳ふるにも、こゝにて教ふるなり。江家次第に、大歌、小歌の稱見ゆ。大歌は公朝に用ゐ給ふをいひ、公ならず、世に、專ら歌ふを、小歌といふ。又、謠ふには、更に撰びてうたひ、その曲調をも作ることありとす。大嘗會、新嘗會の時には、大歌の人奏樂するなり。雅樂寮の、專ら唐風の舞樂を司るとは異なれり。この卷の歌ども、皆、こゝにて歌はれたるものなれば、御歌といへり。○おほなほび　紀記に、伊邪那岐大神の、夜見の國より歸りまして、その禍を直さむとて成りませる　神直毘大直毘神のことと見ゆ。卽ち、その大直毘神の御祭の時にうたへる歌なり。後にも「ひるめの歌」とあるに准すべし。催馬樂の韓神の詞に、「おほなほみ」とあるも同

じにて、もとは、この神の祭の歌なりしなるべし、これを、大直日の義とし、神を祭りはてて後の直會(ナホラヒ)の日とする說あれど、諾ひ難し。○たのしきをつめ　樂しきを積むに、木を積むを寄せたり。木を積むは、年の正月十五日、百官、悉く薪を奉る、これを御薪(ミカマギ)といふ。その數の定めは、延喜式に見えたり、

一首の意は、この新しい年の始に、何時も、この通りにサ、今から、千年の先までをかけて、樂しい積木を、お庭に積まうワイとなり。

(評)續日本紀、天平十四年正月に、天皇、大安殿に出御ましまして、五節の舞等奏しをはりて、諸臣に、宴を賜へる時、六位以下の人々、琴をひきて、「新しき時の始にかくしこそつかへまつらめ萬代までに」と歌へりしこと見ゆ。左註、日本紀とあるは、誤なり。この頃は樂しきをつめの巧を添へて、時調に歌ひかへしならむ。結句のつめ、契冲が、一たび、古き上手の書けるへ文字は、つに紛ひ易きより。後の人の寫し誤れるにて、へめなるべしと唱へしより、先覺、皆、これに從へり。本文のまゝにて。よく聞えたるを、猶、異說を立つるは、好んで、平地に、波瀾を起すものといふべし。

この大歌所の歌どもの端書、さどけなくして、事行かぬふし多く、上なる卷々のにふさはず。思ふに、もとは、端書なくして、只、歌章どもをかきつらねたるにとゞまれりけむを、後人、樂府の本によりて書き入れしとおぼし。されば、必ず、詞書によれりて釋かむは、愚ならむ。

ふるきやまとまひの歌

ふるもとゆふかづらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆる哉

(釋)ふるきやまとまひ　もとは、大和の國振の舞なるべし。大嘗會の己の日に、豐樂殿にて、さまゝの舞ある中の一つなり。されど、この時のみならず、神社の祭にも演ぜらる。こゝに、ふるきといへるは、大和舞の歌章中のふるきなり。○ふるもとゆふ　楚結ふなり。楚は、若木の茂り立ちたるもの、これを刈りて、薪にすべく、藤葛もて結ぶことあるより、葛(カヅラ)につゞけて、枕詞とせり。○かづらき山　大和國葛上郡と、河內國石川郡とに跨る。

一首の意は、あの葛城山にふる雪の、ふらぬ間のないやうに、何時といふことなしに、君のことが、心にかゝつて、忘るゝひまのないことよとなり。

(評)三句までは序にて、戀歌なり。構想は、天武帝の、

三吉野の耳我の嶺に、時なくぞ雪はふりける、ひまなくぞ雨はふりける、その雪の時のなきがごと、その雨のひまなきがごと、隈もおちず思ひつゝぞ來し、その山道を。(萬葉卷一)

と同じ。さかも、詩形小なれば、曲折拍合の妙を缺けり。殊に、結句、格卑く、語に力なし。平安朝となりては、頭大尾小の體多きは、七五調の結果ならむも、かやうなる凡句輕句を以て結果するは、完作をなす所以にあらず。されば、同じ事にても、

うち渡す竹田の原になくたづのまなく時なくわが戀ふらくは(萬葉卷四)

の如く、いはまほしきなり。

あふみぶり

◎近江よりあさ立ちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は

（九五六）

（釋）あふみぶり　古事記に、夷振、宮人振、天田振などあると同じく、管絃に合はせて奏せし歌には、おの〳〵、一定の曲節あり。そを、何振と名づくるなり。なほ、何節といはむが如し。こゝに近江振といひ、次に、水莖振、四極山振といへるは、樂府にて呼べる名にて、たゞ、その歌の詞を取りて、假に、その節に名づけたるのみ。その國の風俗の歌曲なりなど思ふべからず。○うねの野　近江國蒲生郡にありて、今、蒲生野といふ。

一首の意は、あふみから、今朝、はやく立つてくれば、今、うね野に、あれ、鶴がサ鳴くは、さあ、夜が、もう明けたワイとなり。

（評）近江よりは、大らかに詠めりとすべけれど、或説に、今、うね野の三里ばかりに大見といふ所あり、昔の順路なり、假字は違へど、聲の通へば、この誤りたるにや、といへるも捨て難く覺えしが、更に考ふるに、あふみは、必ず淡海にて、琵琶湖をいへるなるべし。即ち、淡海の海の邊なる旅館を、夜深く立出でつる人の詠めるならし。うね野のあたり、古は、大湖の水近かりけむからに、人里稀に、鳥雀の影絶えて、鷺鶴類の渉水鳥のみ、多く栖息したりしならむ。曉行幾里、こゝに至りて、天、始めて白く、聞き得たる鶴の聲、認め得たる鶴の影、旅情、今こそ慰みつべけれ。

あけぬこの夜はの倒裝は、四句切れなる、上の強き調に對抗して、千斤の力量あり。このの一語、また、下し易からず。わびしみて、夜の明くるを下待ちたる趣も、よりて見らるゝにあらずや。されば、後人、好んで、この句を襲用したれど、畢竟、優孟の衣冠なることは、代々の撰集を見て知るべし。要するに、高古にして、神韻縹渺、一唱三嘆に値するものなり。

みづぐきぶり

水莖の岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

（釋）○水莖の岡　近江なり、又、筑前なりといふ説もあれど、宣長が、水莖のは、草木の瑞々しきをりをりの色にて、その稚は、ヲカと通へは、岡の枕詞とせりといへるに從ふべし。○岡のやかた　岡の屋形なり。殿舍に比べて、備はらざる家だちをいふ。宣長は、岡の屋縣の略にて、岡の屋は、山城國宇治郡なる地名なりといへり。○妹　妻女をいふ。○あれ　我の古言。○朝け　朝明の略○はも　嘆辭。

一首の意は、この岡の家で、妹と我と寢て、夜の明けたる今朝の、この霜の降りやうはまあ、一方ならぬワィとなり。

（評）昨夜は、二人して寢たれば、かほど、冷ゆる夜とも思はざりしがの餘意あり。蓋し、岡邊は、おのづから、風さゆる處なれば、その霜とても、雪の如くなりしならむ。たま〳〵、その屋形に相宿せし人、よべの悲夢の曙なりしに思ひ較べて、覺えず、驚嘆の語を洩らせるなり。寢ての朝け

（九五七）

造語簡淨なり。霜のふりはもの歌後の詞、想像の餘地無窮にして、情致の含蓄を多大ならしむ。結句、古き一本に、雪のふりはもとあり。

（九五八）

右はつ山振

はつ山うち出でて見れば笠ゆひの島こぎかくる棚なし小舟

（釋）この歌、元來、萬葉集卷三、高市連黑人が羇旅歌八首の中の第三「四極山うち越え見れば笠縫の島こぎ隱る棚なし小舟」を歌ひひがめたるものにて、このまゝにては解き難し。姑く、萬葉に據りて釋すべし。○しはつ山　攝津國住吉より、東の方喜連といふところへ行く道の間に、岡山の卑き阪あるこれなり。喜連は、吳の訛にて、維略紀に、十四年正月、吳人の參れるところに「泊二住吉津一、是月、爲二吳客一、通二磯齒津路一、名二吳坂一」とあり。○笠縫の島　攝津國東成郡深江村なるべし。管田多くありて、その質、他よりも勝れ、里人、昔より笠を縫ふことを業とすとぞ。この村、土地高くして、あたりは卑ければ、いにしへは、皆、ひろき沼江にて、この村のみ、島にてありしならむ。かくて、笠縫の島の名ありけるなるべし。

一首の意は、四極山を、ずつと越えて見渡すと、あれ、あの笠縫島の蔭へ、漕ぎ隱れて行くヲイ、棚無しの小舟がサとなり。

（評）作者は、萬葉に據るに、高市連黑人なり。この人、また、住吉にて、

住の江のえな津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆいづる舟人

と詠めり。同時の作ならむ。舟の出入の差こそあれ、畢竟同趣向なり。但、笠縫の棚なし小舟、詩境、やゝ面白きか。鼻のつかへたるやうなる山路を越え來れば、俄に、眼界豁然として、開展せられたる一幅の活畫圖、萬頃の蒼波、幾處の蜑村、歷々指點しつべし。かくて、この棚無小舟も、幸に、詩人の一顧を得るに至れる、景致想ふべし。

神あそびのうた

とり物のうた

かみがきのみむろの山の榊葉は神のみまへに茂りあひにけり

（釋）神あそび　神慮を慰むる爲に、神祭の時に奏する舞樂の遊をいふ。即ち、神樂なり。○とり物　神祭の時、舞ひはやすとて、手に採り持つ物なり。榊、幣、杖、篠、弓、劍、鉾、杓、葛の九種あり。この採物に就きて、一々、謠ひはやす歌章あり。これより以下の歌どもこれなり。○みむろ　橿守部いはく、又、みもろともいふ、御杜の義なり、神籬を、ヒモロギと訓めるも同じといへり。面白き考とは見ゆれど、姑く、舊說の如く、御室と解きて、神の社殿のこととす。御室の山は、卽ち、社殿のある山の意。いづこの社地の山にてもいはるべし。飛鳥の神岳、又は、三輪山を、御諸山とさしていへるとは同じからず。○榊葉　榊は、和名抄に、龍眼木を訓み、新撰字鏡には、その外、杜を訓みたり。眞淵は、榮樹の意なれば、何にまれ、常磐木の稱にて、特に、榊をいへるならむといへり。荒木田久老は、榛かといひ、田中道麻呂は、北國にて、ミシャ〳〵

（九五九）

キ、ビサゴ、濃尾附近にてチサカキ、ビサカキ、シラシヤケと稱ふる物といひ、宣長も、これを贊けて、伊勢にて、ミサカキといへるに同じ、和名抄に「柃、比左加木」とある物なりといひ、本居太平は、今いふ榊の木なるべしといへり。但、字鏡に、杜を、佐加木と訓めるにつきて思ふに、神社に、神木とて齊けるは、多く常磐木なり。されば、字義は、眞淵の說從ふべく、しかも、榊とのみ定めたるはわろし。

一首の意は、神のまします御社の山の榊は、かうして、手に執るによつて、たゞちに、神の御前に茂り合うたワイとなり。

初句、六帖に、神垣やとあり。

○

霜やたびおけど枯れせぬ榊葉のたち榮ゆべき神のきねはも

（釋）○やたび　八度なり。數多きことに、八を換へていへるなり。○神のきね　神樂歌秘抄に、かむなぎとあり。ねぎは、眞淵は、願女の轉なりといひたれど、禱部の轉ならむと、守部のいへるは、巫現を通じたる說なれば、事ひろし。さて、神樂には、八處女とて、八人の巫女相具せり。宣長が、木根ならむといひ、太平が、城根ならむといへるなど、皆非なり。

一首の意は、霜が、幾たび置いても枯れぬ榊葉のやうに、行末立ち榮えさうなる巫女であるはまあとなり。

（評）八處女の、いとうるはしきが立舞ふを見て、なりいでむ行末を思ひやれるにて、御前の榊を借り用ゐて、序としたり。かくいへば、おのづから、いつける神を祝ぐ方にもなりぬべし。以上二首は、榊をとりて歌ふなり。

結句、六帖に、神のきねかなとなり。

○

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがに山かづらせよ

（釋）○まきもくのあなしの山　まきもくは、卷向の轉。卷向山は、大和國式上郡にあり。大和志に「峰を、弓月嶽といひ、南を、檜原山、北を、穴師山といふ」とあり。○がに　かのやうにと譯す。がねの轉音。○山人　山住の人をいふ。太平が、西山記、北山抄、江次第などに、神事の時、衛士を以て、山人と爲して、事を執ること見えたり、こゝのも、それなるべしといへるは、非なり。○山かづら　山住の人、日蔭（女羅）を頭飾とすることあり。萬葉に「足曳の山下日影かづらける」、「足曳の山蔭の兒」、「足曳の山蔭かけ」の類、これなり。神事に從ふ者も、女羅を、冠などにかけたりき。又、組絲にしてかくるにも、日蔭の名あり。紀記、天岩戸の段には、眞柝を髮として日蔭を手襷とすと見えたり。そのうつれるならむ。

一首の意は、神事を勤むる人達よ、あれは、卷向の穴師の山の山人であると、よその人も見るほどに、山蔭をしだかよいとなり。

（評）山蔭を、さばかり勸むるは、卽ち、神事をいそしめといべる諷意なり。まき向のおなしの山と續けたるに、山深き地の趣を見せ、さるところの山賤の風俗を思ひ寄せて、山人と見るかにとはいへり。この誇張と、かの諷意と、山及び人といふ語を反復したる、壓音の諧調と相俟ちて、一種の詩味のうごくを覺ゆ。さて、これは、神樂の葛の歌なり。

初句、神樂譜に、わぎもこが、四句、同書に、人もしるべく、六帖に、人も見るがねとあり。

（九六二）

○

み山には霰ふるらし外山なるまさきのかづら色付きにけり

（釋）○外山（ト）　奥山にむかへて、端なる山をいふ。○正木の葛　二説あり。一は、蘿（キレイ）といふものにて、本草綱目に、四時凋まず、厚葉堅强なるものにて、花さかずして、實なるとある物なるべしといひ、二は、其の葉は、南天に似たるものにて黑みあり、冬のはじめに、古葉の紅葉して美しきものなりといへり。こゝに「正木のかつら色つきにけり」などあるによれば、常盤木にはあらず。後説を可とすべし。されば、名義も、常に、綠色なるものなれば、眞幸（マサキ）の意ならむといへる説は立たず。眞柝（マサキ）に柝きて、物に用ゐるよりの名ならむ。正木の借字なることは、論なし。

一首の意は、奥山には、もう、霰が降るらしいワイ、なぜなれば、この外山にある正木の葛が色づいたゞイとなり。

（評）體製は、外山の葛に、深山の霰の排對なり。かく、外山に對へたるから、深山も、その本義より轉りて、奥山の意と聞き做さるゝは、自然のことなり。時雨ともいはで、霰を取出でたる、殊に、すさまじき山中の景氣を點出するに由あり。但、こればかりの想像は、奇とするに足らざれども、氣韻天成にして、詞に、些の塵垢なく、及び難き高調なり。さて、神樂には、上のとおなじく、葛に歌ふ。蓋し、日蔭と眞柝と並べ歌へるなり。又、庭燎の時に、これるを歌へり。紅葉の色を、燎の色によそへてならむ。

○

陸奥のあだちの眞弓わがひかば末さへよりこゑのびくに

（釋）○あだちの眞弓　あだちは、今の岩代國安達郡なり。延喜六年までは、安積郡の一部にて、安達郷なりき。こゝより、良弓を貢せしならむ。萬葉には、あたゝら眞弓と詠めり。よりて思ふに、あたゝらの約りたるあたらに、安達の字をあてたるか、達の字は、タルとよめば、タラにも通へり。さらば、あたらの眞弓なるべし。近藤芳樹は、安達太郎（アタラサン）と安達の原とは、所在懸隔したれば、一つにすべきにあらず、安達の眞弓は、安達太郎（アタラ）眞弓の唱へひがめなりといへり。○末さへよりこ　よりこは、寄來なり。弓を引けば、本末、わが方へ寄るものなれば、寄せたり。

一首の意は、あの陸奥の安達の眞弓をひけば、本末が、こちへ寄つて來るが、そのやうに、かの思ふ人も、自分の引くまゝに、末さへかけて、靡いて寄れよ、人目に立たゝぬやうにサとなり。

（評）初二句は序なり。端を借りて、纖綿たる情思をつくす。曲折味あり。疎句を以て結束したるは、

（九六三）

この、卑俗に陥らざる所以なり。さて、神樂には、弓の歌なり。二句、神樂譜天治本に、あづさの眞弓、四句、同譜に、やう〳〵、神樂歌秘抄には、やうやくとあり。

○

わが門の板井のしみづ里遠み人し汲まねばみくさ生ひにけり

（釋）○板井　板を、井筒としたる井。○みくさ　水草なり。こゝには、澁の類をいへり。一首の意は、自分の門口の板井の清水は、里ばなれであるが故に、人がサ汲まぬによつて、あゝ、水草が生えたソイとなり。

（評）眼前景致口頭語、平々叙し去りて、何となく、風趣あるを覺ゆ。神樂には、杓（ヒサゴ）の歌なり。水を汲む器なればなるべし。

初句、六帖に、わが宿の、結句、神樂譜に、水さびにけり、同一本に、みさびぬにけりとあり。

ひるめの歌

さゝのくま檜のくま川に駒とめてゑばし水かへ影をだに見む

（釋）ひるめ　天照大神を、紀に「大日孁貴（オホヒルメムチ）」と申すこと見えたり。ひるめとのみにては、餘に禮なし。されど、神樂譜にも、畫目歌の題目あれば、譜のまゝにかけるものなるべし。藤原敦長が、

大嘗會の米簸女（コノヒルメ）の歌なりといへるは、非なり。○さゝのくま　解し難し。この歌、萬葉に、

左檜の隈檜の隈川に馬とめて馬に水かへわれよそに見む（卷十二）

とあるを歌ひかへたるなり。左檜の隈の左は、接頭の美稱、檜の隈川は、大和國高市郡檜隈郷の。流なり。

一首の意は、あの檜の隈川に、駒をとめて、しばし、その駒に、水をお飼ひなされ、さらば、その間もせめて、貴方の後姿をなりとも見ようワイとなり。

（評）初二句、檜の隈を折返して歌へるなるを、辭樣の古體なるより、後人、その意を察し得ずして、下なる檜の隈に對して、篠の隈と思ひ誤れるならむ。既に、源語、葵の卷にも、「さゝの隈ともいだせり。結句を、景樹が、聞えずといへるは、おのれのえ聞かぬなり。影を、水に映れる影と思ひしにや。こは、その後手（ウシロデ）の影なり。混ずべからず。後朝の空しめやかに、袂を分てば、駒に扶け乘せられつゝ、遠ざかり行く人の後影、歩一歩よりも小ならむとす。惜しや、名殘をしや、行手に流るゝ檜の隈の檜の隈川、人もし、心あらば、そこに、しばしだに、駒に水飼ひて、御姿を見しめ給へと誂へつけたる、痴意、熱情、實にいぢらしさに堪へざるものあるにあらずや。心なき木佛も、必ず、首を回しつべし。況や、かの、心ある人においてをや。さて、この歌、必ず、大日靈神の御祀に歌ひしならば、影をだに見むを、大神の御影をだに見べく希へる意に擬へたるならむ。

かへしものの歌

青柳をかた絲によりてうぐひすの縫ふてふ笠はうめの花笠　（九六六）

（釋）かへしもの　催馬樂に、呂の律になるを、反聲（カヘリゴエ）といふ。まづ、はじめに、「眞金ふく吉備の中山などの呂歌をうたひて、その後、律にかへして、この青柳の歌をうたふが故に、この稱あり。以下、催馬樂の歌章なり。○うめの花笠　梅の花を、笠に譬へていへり。

一首の意は、青柳の絲を、片絲に縒つて、それで、鶯が縫ふといふ笠は、どのやうなる笠かと思へば、梅の花笠であるはサとなり。

（評）柳の條を、絲に譬ふることは、常套なり。そを、片絲に縒るといへるは、風に片靡きする狀を思へるなめり。鶯の縫ふとは、今も、彼方此方と、筋違はしてあるくを、縫ひて行くといふに同じく、鶯の、枝より枝に、木傳ひあるくをいふ。その縫ふといふ語の聯想に、笠は縫ふ物なれば、柳の絲して、梅の花笠を縫ふと巧みなしたり。梅の花笠は、既に、華美なる笠、或は、花を飾れる笠を、花笠といふ成語あるより、それに、梅のと冠らせたること、「松の絲子」の類にて、作者の造語なり。梅柳に、鶯をあへしらひ、しかも、この笠縫の妙趣向さへあれば、すべて、花やかに、面白し。されど、てふの語、猶妥貼ならず。この歌よりも以前に、鶯の縫ふといへる古歌ありけるにや。はた又、もと、縫ふなる笠はなどありけるを、催馬樂に歌ふにつきて、調子にまかせて、てふと歌ひかへたるか　さる類例多ければ、かくも疑はるゝなり。

○

まがねふく吉備の中山帶にせるほそたに川のおとのさやけさ

この歌は、承和（ジヤウワ）の御（ミ）べのきびの國のうた。

（釋）○まがねふく　かねは、廣く金屬をさしていふ。まは、例の美稱。これを、舊註は、鋏なりといひ、契沖は、黃金なりといへど、當らず。ふくは、鞴（フイゴ）にて、鑛物を吹くをいふ。こゝは、吉備の枕詞に用ゐたり。吉備の國に、昔、產鑛の山ありしならむ。○吉備の中山　吉備は三備の總稱なれど、中山は、備中國吉備郡眞金村にあり。方角抄に、「備前備中の國境なり、吉備津の宮あり。山は、さして高からず、松むら〳〵あり。今、細谷川といふ水も、この山の腰なりとあり」。○ほそたに川　細き谷川なり。川の名とするはうつれるなり。木下長嘯の九州紀行に、「細谷川のほとりに至りて、その水上にのぼりて見れば、小き池の中より、たえ〴〵いづる清水なりけり。水無月の頃にも絕ゆることなしとなむいへる。その谷川の廣さ、篠築の長さばかりありけり」とあるは、しひて設けたる名なり。○左注にいへる承和は、仁明帝の年號。御べは、大嘗（オホニヘ）を略きたるなり。續日本紀に、この御代の天長十年十一月の大嘗會に、主基（スキ）の國備中、悠紀（ユキ）は近江とあり。その度の歌なるべし。

一首の意は、この吉備の中山が、山の腰に帶にして居る一筋の紐と見ゆる、細谷川の水の音のさはやかさよとなり。

（評）萬葉集卷七、

おほ君の三笠の山の帶にせる細谷川のおとのさやけさ

の初二句をかへて、大嘗會の主基の歌とせしならむ。眼目は、帶にせるの一句にあり。山の腰といふよりの聯想なり。昔の帶は、その幅狹くして、殆ど、紐の如き物なれば、細谷川をば、帶と見むに由あり。

（九六八）

○

みまさかや久米のさら山さら〳〵にわが名はたてじ萬代までに

これは、水のをの御べの美作國のうた。

（釋）○みまさかや　やは連辭。○久米のさら山　美作國久米郡佐良山村。もとの久米南條郡佐良莊にある山なり。○さら〳〵に　新にといはむが如し。今の俗にいふとは、意かはれり。○左註の水のをは、清和帝の御號。三代實錄に「貞觀元年十一月大嘗會、悠記三河國、主基美作國」とある時のなり。

一首の意は、美作の久米の皿山の名のやうに、今更に、自分の戀するといふ名は立てまいぞ、それは、何時までもサとなり。

（評）　こも、古く、さる歌のありしを用ゐられしならむ。さらば、初二句の序の如きは、或は、折にかなふべく、歌ひかへられけむもはかり難し。四句までは、戀歌のやうにて、結句、はた、殊なる趣あり。四句、催馬樂に、わが名はたえじとあり。これは、わが名を、萬代までもいひ繼がむの意なれば、打合ひたり。さかし、もとは戀歌なるべし。

○

みののくに關のふぢ川たえずして君につかへむ萬代までに

これは、元慶の御べのみののうた

（釋）○關のふぢ川　美濃國不破郡、不破の關を流るゝ藤川なり。今、藤子川といふ。小鳥の口遊に「關の藤川は、その名もなつかしければ、言問ひ侍りし。名はことぐしけれど、さしもなき小川にて、萬代までの流ともわかれず。されど、たえぬためしは、いと賴もしくて云々」。○左註の元慶は、陽成帝の年號。三代實錄に「元慶元年十一月大嘗會、悠記美濃國席田郡。主基備中國都宇郡」と見えたり。

一首の意は、美濃の國の關の藤川の流の絕えずしてあるやうに、我等も、君に仕へ奉らうワイ、萬年までもサとなり。

（評）この御時のは席田郡なり。然るに、不破郡の關の藤川を詠めり。眞淵が、これを訝りて、席田郡にも、關の藤川あるかといへるは、一わたり、さる事なり。但、地理的思想の缺乏せる時代の歌人なれば、或は詠み過ちならむも測られざるを、猶思へば、これは、大らかに、美濃の國の歌として詠めるならむ。餘に細かにことわるは、作者の本意に背きぬべし。下句、古調なり、上句は作りかへしものか。

（九六九）

○

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも

これは、仁和の御べのいせのくにのうた。

(釋)○長濱　伊勢國員辨郡。○よみ　數をよむは、卽ち數ふることなり。○左註は、三代實錄に、光孝帝の大嘗會に、「元慶八年十一月、悠紀伊勢國員辨郡、主基備前國和氣郡」と見えたり。

一首の意は、君の御代は、何時までといふ限もあるまい、名さへ長濱といふ、この濱の眞砂の數は、たとひ數へつくすといふともサとなり。

(評)序文にひける「わが戀はよむともつきじありそみの」とある歌の下句、これに同じ。又、賀、「わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ」と、著想を同じうす。蓋し、彼より奪胎したるならむ。詞もうるはしく、聲調も滑かとなれり。たゞ、その格調の、漸く卑さは、やむを得ず。猶、賀「わたつ海の」の條にいへる評を參照せよ。又、續後拾遺集に、仁和の御時の大嘗會の悠記方伊勢國風俗歌「伊勢の海の渚を清み云々」の作者を、大伴黑主とあるより、契沖は、これをも、黑主の歌と定めたり。まことに、かくよみかへて、謠物とせしは、黑主ならむも測り難し。

あふみのや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千年は　　おほとものくろぬし

これは、今上の御べのあふみの歌。

(釋)○あふみのや　やは嘆辭。○左註の今上は醍醐帝。その大嘗會は、寛平九年十一月。この頃は、悠記には、近江の國を用ゐらるゝ例となれり。

一首の意は、近江の國にまあ、鏡山といふ山が立ててあるによつて、前以てサ、よく見ゆるワイ君が御代の千年で御座ることはとなり。

(評)鏡によれる著想は、雜上、

鏡山いざたちよりて見て行かむ年へぬる身はおいやしぬると

と同じくて、これは、やゝ、鏡を重く取なして、山をたてたりと具象的にいへる、面白し。調さやかにして、細流の、瀨に鳴るが如し。作者は、近江の國人にして、歌詠むといはれたる人なれは、この風俗歌仕うまつれるか。さて、上なる御べの歌ども、作者の名を署せざるに、これひとり、あるは、全く、當代の事にして、作者もたしかなればなり。上なるは、皆、古歌を取繕ひたるものと見ゆれば、作者と名づくべき作者なきなり。

東歌

みちのくうた

あぶ隈に霧たち渡り明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

(釋)東歌(アヅマ)　東國の歌なればいへり。これも、謠物に用ゐられしなり。○あぶ隈　あぶくま川なり。

阿武隈、阿福麻、逢隈の字をあつ。源を、磐城に發し、岩代を横流して、陸前の亘理郡に至りて、海に入る。

一首の意は、阿武隈川に、霧が立つて、夜が明けたりとも、思ふ人をばやるまいぞ、やつてしまうて、又、來るまでを待てば、その間が、何とも、仕方がないワイとなり。

（評）二句は、たち渡れなるべきか。さらば、霧立ちて、明けぬる夜もわかれずあれかしの意なり。起き別れゆく人をとゞめむすべなきに、思ひ煩ひたるに、端なく、宿近き、さる大河の、水波高く、て、常に霧り易きに想ひ到りて、その霧よ立渡れと命令したるは、既に、常識を超越したるものにて、君をばやらじと思へる熱情の高度に達せるを見る。下句の、屑々いひ下せるは、節奏の上よりしても面白きに、まてばすべなしの單句、實に、千鈞の筆力あり。爲に、全首無窮の情味の涌くを覺ゆ。かの龍尾、一たび掉へば、鱗甲、悉く竪つといへるものに庶幾し。さて、四五の句イ韻を踏みて排對したるは、聲調の諧へるのみならず、その樂凄凉にして、沈痛の感を助長するに適せり。定家の密勘に、東歌を評して、「凡此部歌、與二日月一懸、與二鬼神一爭レ奥、非二短慮所一及」といへるは、彼、一隻眼を有すといふべし。

二句、今本に、たちくもり〳〵あり。本文は、一本のに從へり。四句、六帖に、せなをばやらじとあり。東歌としては、東國の俗語なるせなを用ゐむぞかなふべき。勢語にも、陸奥の女の、せなと詠める歌見えたり。

○

みちのくはいづくはあれど鹽竈の浦こぐ舟の綱手かなしも

（釋）○いづく　六帖に、いづことあるをよしとす。誤寫ならむ。○綱手かなしも　綱手は、こゝは、曳舟の綱をいへり。かなしは、面白しと感歎せらゝ意にて、悲しにはあらず。もは歎辭。

一首の意は、奥州は、どこにも、面白い所があるけれど、別して、この鹽竈の浦を漕ぐ舟の綱手を曳いてゆく景色が、面白いことであるはまあとなり。

（評）思ひやれば、誠に面白き景色なり。然れども、その詩境の内容の叙寫を怠りて、輪廓をのみ擧げたるは、慊らず。

四句、六帖に、雛が島のとあるはわろし。

○

わがせこを都にやりてあはがまの雛が島のまつぞこひしき

（釋）○都に　都へとあるべきなり。古歌の例、若然り。○雛が島　鹽竈の浦にあり。○まつ　松に、待つをかく。

一首の意は、わが夫を、都へ出しやつて、何時戻らるゝことかと、鹽竈の浦の雛が島の松といふ名の、待つて居ることがサ、さても〳〵戀しいことであるワイとなり。

（評）陸奥女の閨愁をのべたるものなり。三四の句は、待つといはむ序ながら、都との對照ありて、一別千里、兩地、空しく相思ふの趣も見ゆめり。惜しいかな、戀しきといへるは露骨なり。され

ば、同想の同型なる萬葉卷十四、

わがせこをやまとへやりて翳刺足柄山の杉の木のまか

に遥ること遠し、島の松の彫技如きは、何かあらむ。

結句、六帖に、まつは苦しもとあり。

○

をぐろ崎みつのこじまの人ならば都の苞にいざといはましを

(釋)○をぐろ崎　いづれ、磐城、岩代以北の地ならむも、所在未詳。○みつのこじま　三つの小島なり。

一首の意は、あの小黒崎にある三つの小島が、人であるならば、京へのみやげに、さあ來いというて連れうものを、人でない故、それもならぬが、殘念であるワイとなり。

(評)この面白き景色を、こゝに遺し置かむは惜しきことかなの餘意あり。この餘意を、諸注、都人に見せたしとまで解けるは、いひ過ぎたり。小黒崎三つの小島、いかにをかしき處ならむ。島を、土産にせむの著想、何ぞ詩的なる。人ならばは、分別に住する嫌あれど、人ならぬ故、いざともいひ難き意を反覆して、苞にえせぬを憾み惜める歎意を深からしむ。さては、主眼の句にて、一首の性命は、全く、こゝに係れりといふべし。作者は、京人なり。伊勢物語に、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

は、これをかへて、例の作話の料としたるなめり。

○

みさぶらひ御笠とまをせ宮城野の木の下露は雨にまされり

(釋)○みさぶひ　御侍なり。貴人の侍臣をいへり。句の意は、御侍よの意。○御笠(ミカサ)とまをせ　御笠を召し給へと申せの意。

一首の意は、御家來衆よ、それお笠と申し上げられい、この宮城野の樹蔭の露は滋くて、雨よりもきつう御座るワイとなり。

(評)げにや、宮城野は、西のはづれ岡山にして、今も、木茂き昔の俤を殘せり。いにしへの木の下露、いかに滋かりけむ。鄙には珍しき狩衣姿の貴人、指貫のそばとり給ふもたゆげに、野を分けわびさせ給へるに、御笠もち、御馬曳きつれたる侍共、萩の露ふみしだきつゝ出で來るは、宛たる一幅の畫圖ならずや。露の、雨にまされりといふは、既に誇張なるを、更に、御笠を取出でて、それを實にしたるは、空中樓閣に、金碧を粧成するものなり。この妙不可思議力、何人か魅せられざるものあらむ。初二三句に、みの頭韻を戴けるは、故意か、無心かは知らねど、聲調の諧ふことは事實なり。

○

もがみ川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり　（九七六）

（釋）○もがみ川　羽前の大河にして、最上郡に入りて、最上川の名あり。下流は、酒田の港に注きて、酒田川と呼ぶ。○稲舟　刈稲積みたる舟にて、こは、正税を國衙に運ぶものなり。いにしへは、稲何束といひて、穂付のまゝに、正税を納めしなり。○いな　否なり。

一首の意は、最上川をのぼるもあれば、くだるもある稲舟の名のやうに、否といふではない、しかし、この月中だけは、障があつて、逢はれませぬワイとなり。

（評）最上川は、日本三急流の一と聞えたり。さる河上を、秋冬の交、正税の稲舟、追ひすがひ、上りくだるさま思ひやるべし。さて、そを序としたり。急流なれば、上れば、忽ちくだるの意と見むも由なきにあらねど、事狹くして、をかしからず。さて、この序は、いなにはあらずの意を、強く表示し得て、相手の心を取るに、いと力あり。かく、一度、肯諾の意を洩し置きて、さて、本題に入りて、この月ばかりは否と表裏せる、紆餘曲折の妙、言語に絶せり。結句の造語も簡淨なり。尙思ふに、この月は、婦人の月事を、下に含めたるか。さらば、この障を過してのち逢はむの意なるべし。こは、試にいふのみ。又、全首、語調の、いたく促迫せるを見よ。音數の排列を案ずるに、

初句（三二）、二句（四三）、三句（四二）、四句（四三）、五句（四三）

とやうの組織にして、句々、促調ならざるはなし。珍しといふべし。この急き込みたる調子は、

男に、さらばなど怨みられて、あわてて辨疏したる趣に聞きなさるめり。

○

君をおきてあだし心をわがもたばするの松山波もこえなむ

（釋）○あだし心　空々（アダ）しき心なり。○するの松山　冬「浦近くふりくる雪は白波の末の松山こすかとぞ見る」の條に、委しくいへり。さて、猶思ふに、陸前國桃生郡に、須江といふ山村あり、海岸を距ること一里半ばかりなり。はやく、陶物（スエ）造りの居りける所にて、もとは、するといひけるを、いつか、假名の違ひけるならむ。果して、そこならば、波をいはむにも、由ありて覺ゆ。

一首の意は、貴方をさしおいて、他心（ホカ）を、私が持つたら、このするの松山を、浪も越ゆるであらうワイとなり。

（評）さる事あるべくもなければ、わが仇し心持つこともなしと思への餘意あり。波もは、人の越ゆるに對へたり。すべて、盟誓には、常住固定なる事物を提擧して、不渝不變の意を立證すること常なり。日本紀に、新羅人の誓に「東の日、西に入り、あれなれ川の、さかさまに流るゝ時まで渝らじ」といへるも同じ。貞潔の語、すでに、情の美に禁へざるに、加ふるに、波もこえなむの婉語を以てす。蓋し絶唱なり。

さがみうた

○小よろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波　（九七八）

（釋）○小よろぎの磯　雜上「玉だれの小瓶やいづら」の條にいでたり。○たちならし　踏み平すこと。○磯菜　磯つきの海草をすべていふ。○めざし　髪を、切禿にしたる兒女の稱。髪の短くて目を刺すほどなるよりいへり。德の名とするは非なり。○をれ　居れと命ずるなり。折れにはあらず。

一首の意は、小洲の磯に出て、あちこちあるいて、磯菜を摘む、あの子供を濡らすな、これ浪よ、さう、磯へ立つて來ずに、沖の方に居れとなり。

（評）海人の子どもが磯わたりして、若布など摘むさまの面白きに、寄せて來ては碎け散る波に、しとゝなるをいとほしみて、其方に退き居れと、波に命令したる擬人のあつかひ、凡想を超えたるものなり。詩境、また、畫の如し。

ひたちうた

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御かげにまさるかげはなし

（釋）○筑波根　雜下「つくばねの木の下毎に立ちぞよる」の條にいでたり。○このもかのも　此面彼面なり。○御かげ　御惠の蔭なり。俗にいふ「オカゲ」に同じ。

一首の意は、筑波山のこなたおもてにも、あなたおもてにも、木の蔭は、おびたゞしくあれども、お惠のあつい君のお蔭にまさる蔭はないワイとなり。

（評）筑波山は、關東の平野に特立して、四方より、その山容を仰ぎ得べきこと、猶、芙蓉峰の、八面玲瓏なるが如し。されば、かれには、彼方おもて、此方おもてをいひ、これには、このもかのもをいへり。景樹が、女神、男神とて、同じさまなる高根の立並びたれば、このもかのもといへりと解けるは、この實境を知らざる說のみ。また、この山、奈良時代には、鷲さへかゞなきたりし程にて、今も、樹木鬱蒼たる所なれば、蔭をいへるなり。さて、君の御蔭より、筑波の樹蔭を聯想し得て、この同音異意義の二語を、全然混同して、比較したる沒理趣が、詩味の素を成せるなり。まず蔭はなしの斷案を下すに至りて、いよ〳〵詩的なり。このもかのもの疊音、かげの語の三疊は、いよ〳〵諧調となりて、聲響、うたゝ佳なり。

○筑波根の峰のもみぢ葉おち積りあるもあらぬもなべてしかなし

（釋）一首の意は、この筑波嶺の紅葉が、麓に落ち積つたのが、面白くてをしまるゝやうに、誰彼なしに、悉く親しう愛せらるゝはまあとなり。

（評）上句は、かなしもへ係る序といへる、宣長の說從ふべし。但、この歌のみにては、事相漠然た

（九七九）

れば、評せず。

かひうた

○かひがねをさやにも見しがけゝれなく横ぼりふせるさやの中山

（釋）○かひがね　甲斐が嶺なり。○さやに　鮮かにの意。○が　願望の辭。○けゝれ　こゝろの轉。東國の方言なり。金槐集に、けゝれ木とよみ、甲斐人は、今も、九日をケヽヌカといへり。○横ぼりふせる　横たはり臥せるの意。○さやの中山　今、さよの中山といふ。遠江國小笠郡、日坂峠と金谷峠との間、もとの佐益郡のなからにありければ、この名あり。

一首の意は、故郷の甲斐が嶺をば、あり〳〵と、あざやかに見たいワイ、それに、心もなう、あのやうに横たはり臥して、目前をふさいで居る佐夜の中山であることよとなり。

（評）都にのぼる甲斐人の、遠江まで來て、故郷の方を顧みしけるか、はた、都より歸れる甲斐人の、こゝまで來て、故郷を望めるか、そはいづれにてもありぬべし。空谷の跫音、わづかに、一片の山影を望みても、この望郷の歎を慰するに足るは、蓋し人情なり。さるを、佐夜の中山横ぼり臥して、恰も、墻に面して立てるが如し。頑たるかなや、佐夜の中山。けゝれなしといはざるべけむや、佐夜の中山。又、こゝに、甲斐が嶺といへるは、富士のねをさせるか。甲斐に、高き山多けれど、富士にまさる山もあらじ。故郷にて見馴れしまゝに、打任せて、甲斐がねといはむもつきなからず。

四句、顯註に、一本、横ぼりくせる、又、一本、こせるとある由見えたり。ともに、ふせるの訛なるべし。心を、けゝれといへる類の甲斐の方言と思ゆれば、もとは、さもありけむかし。

○甲斐がねをねこし山こしふく風を人にもがもや言づてやらむ

（釋）○ねこし　嶺越しなり。○人にもがもや　がもは願望の辭。やは嘆辭。

一首の意は、峰をも越し、山をも越して、甲斐が嶺を吹いてゆく風を、どうぞ、人にしたいもだワイ、さらば、都へ、言傳をしてやらうにとなり。

（評）京より下り居る地方官吏などの詠めるか。日夜、鄕愁に禁へざるに、問ひやらむ便さへなくてわび居る時、たま〳〵、山風の、重疊せる峰巒を吹き平しつゝゆくを見て、風の便を思ひ寄り、人にもがもやと歌へるなり。この句の眼目なる事は、上なる、「小黑崎三つの小島の人ならば」の歌と同じ。そこにいへるを參看すべし。二句、つぎ〳〵に吹き渡る山越の風を形容して、その妙を悉せり。しかも、下に、旅ゆく人の、ねこし山こしするに由ありて、おのづから、人にもがもやの槪染となり、四句唐突ならず。想を遣ること細やかなりといふべし。かくて、聲調もをかしきなり。「三つの小島」と、同工異曲なる中に、彼は、一時の逸興、これは、永久なる沈痛の響なれば、情味の長き點においては、彼及かず。その疎宕にして、人願を解くは、これ及ばず。

いせうた

をふの浦にかたえさしおほひなる梨のなりもならずも寝て語らはむ

（九八二）

（釋）○をふの浦　所在たしかならず。顯註に、「志摩の國にあり。齋宮の御庄にて、梨を献ずる所なり。伊勢志摩といひて、一つによめり」とあるに、姑く從ふ。○なりもならずも　成否の意にて、嫁娶の定るをなるといふ。

一首の意は、麻生の浦に、片枝さし覆うてなる梨があるが、その梨のなるといふやうに、其方と自分も、表向の相談のなるならざるはともかくもまあ、何であらうと、一所に寝て、話をせうワイとなり。

（評）詞づかひはおもしろし。老練のしわざなり。

冬の加茂のまつりのうた　藤原敏行朝臣

ちはやぶる加茂のやしろの姫小松よろづ代ふとも色は變らじ

（釋）冬の加茂の云々　加茂は、四月を例祭とす。然るに、十一月の臨時の祭を始め給ひしは、寛平元年にして、左近中將藤原時平朝臣を御使として、藤原敏行に、東遊の歌を詠まじめ給ひし事、寛平の御記に見えたり。大鏡にも、これにつきたる傳說を載せたり。下の未の日試楽、下の酉の日、この祭あり。

一首の意は、この御神威のはげしい加茂の社の御前の姫小松は、このうへ、萬代を經るといふとも、色は變りはすまいワイとなり。

（評）かくの如き神德にて護らせ給ふ君の御うへは、申すまでもなしの餘意あり。眞淵いふ、歌は、いさゝかも隱れたる事なく、且滯りたる所なく、詞は、まどかなる玉を見るが如し、この卷の終に置かるべき歌なり。そのうへ、今上の御父帝の、神の御告にて始め給へる祭の歌にて、限なき御よろこびの事なれば、この卷のとぢめにせらるゝなりといへる、適評なり。

二句、顯本、かもの祭のとあり。